

撰関期の賀茂祭関係記事（その一）

——『小右記』を中心とする古記録部類作成へ向けて（三）——

一、賀茂祭の成立と次第

三 橋 正*
山 岸 健 二
（小右記講読会 委員）

はじめに

古記録（日記）を正確に理解するためには、「古記録文化」の理念でもある部類的な読み方が欠かせない。小右記講読会ではデータベースの構築を目指して「小右記講読会」のホームページ (<http://saneyori.lcmeisei-u.ac.jp>) を公開すると共に、古記録の本文と書下し文のテキストから、目録などの関係資料とを総合的に検索した結果を示す例として、一昨年度は「立后」、昨年度は「着座」「着陣」の記事を部類的にまとめてきた。ここではそれらに続き、「賀茂祭」に関する記事を集成したものの前半（寛弘八年まで）を掲載する。

賀茂祭は、四月中酉日に行なわれた賀茂御祖神社（下社）と賀茂別雷神社（上社）の祭である。現在、五月十五日に行なわれている葵祭は、近代になってこの賀茂祭と十一月の賀茂臨時祭の儀を合わせた形で復興したものである。祭の起源は定かではないが、『続日本紀』に賀茂祭での騎射を禁じたり（文武天皇二年〔六九八〕三月辛巳〔廿一日〕条・大宝二年〔七〇二〕四月庚子〔三日〕条）、国司による検祭を定めたりしていることから（和銅四年〔七一〕四月乙未〔廿日〕条）、この地域に展開した賀茂氏の祭として盛大に举行され、朝廷の統制が必要なほどであったことが窺える。その後、長岡京・平安京への遷都により賀茂社は朝廷の特別な崇敬を受けるようになり、更に弘仁元年（八一〇）の薬子の変で「二所朝廷」の危機を克服した嵯峨天皇によって皇女有智子内親王（八〇七〜八四七）が初の賀茂斎院に卜定され（『一代要記』など）、同九年に斎院司が置かれ（『類聚三代格』卷四所収同年五月九日・廿二日付官符など）、同十年に賀茂祭は中祀に準じられた（『類聚国史』卷五・神祇五・賀茂大神、同年三月甲午〔十六日〕条）。「神祇令」に示された祭祀の三等級について、「式」の規定で大祀は一代一度の大嘗祭のみで、中祀は祈年祭・月次祭・神嘗祭・賀茂祭の四祭、他の祭はすべて小祀とされていた。つまり、神社の祭として伊勢神宮の神嘗祭と肩を並べていたのであり、ここからも賀茂祭の重要性を知ることができる。

平安時代における賀茂祭の重要性は、都に隣接する大社の大祭というだけでなく、朝儀（公祭）として举行されていたことにあった。よって年中行事の中でも最大規模のもので、上記の歴史的展開を受けて、その

儀礼も複合的になっていた。ここでは参考として『小野宮年中行事』(四月)から関係する記載を挙げて、一連の行事を概観する。

十日、(中略)

差賀茂斎内親王・禊日前驅奏聞事、

前十日、差前驅・次第使等、近代之例、不差自志軫尉之人、一上奏行、若有障者以次上奏行、但加奏一上有障之詞、

故殿天慶元年四月十六日御記云、斎院御禊前驅、右衛門尉源忠光向伊勢国^(伊勢公也)之替、改仰中務少丞平佐忠、檢先例、諸衛尉有障之時、以当府尉^(伊勢公也)之差改、府中無可改差之者、以中務丞・内舍

人等^(伊勢公也)之差改、是延喜廿年之例也、仰少外記有時了、

故殿御日記、天慶十年四月十二日、從^(天慶元年)内有喚、仍參入、依雜事未具、可延行禊之状、斎院有令申之事、彼院申云、可

改申日云々、令勸先例、有行未日之例無行申日之例、為之如何、宜定申者、小臣申云、依先例行未日宜敷

云々、蒙仰云、然則可仰所司者、仰外記是連了、但只可示仰官人、不^(伊勢公也)可准^(伊勢公也)朝拜・五月節等、下停止宣旨云々、

中吉日、斎院禊事、^(有未日)之例、

前二日、斎院別当弁率陰陽寮及供奉諸司等到河辺、点定其地、付藏人奏之、当日早旦、召王卿家及山城・近江等国牛

給彼院、先是被召仰件牛、但山城・近江給所牒、祭日同用之、又御覽藏人所陪從、其後遣彼院、

中未日、御覽左右馬寮女騎料御馬事、中少将一人候御前、隨勅仰騎下之由、御覽十列之時、又以効之、

先賀茂祭一日、警固事、

祭使雖止猶有警固、大臣^(若不參、納言)以上得之、令内侍奏可警固之状、其詞云、為賀茂祭令奉警固、大臣着陣座、召仰諸衛府、大臣宣、欲為賀茂祀我故爾如常奉固衛、諸衛共称唯退、

中申西日、賀茂祭事、^(西日庶務、當日使立、)

先二日、少納言付内侍奏可祭斎之文、当日早旦内記書宣命、付内侍、内侍奏之、覽訖令給内藏寮使、又已一刻使等參入、付内侍令奏罷向祭所由、即給例禄、天皇御南殿、

南廂中央間立大床子為内侍臨檻喚人、公卿自東階參上着簀子敷、東第二間敷、次出居次将昇自同階着座、^(東階上着簀子、北頭敷、簀子一枚、)

上北面、便男女使被馬及從者等、入自日華門西度出、自日華門、其次第、内藏寮使馬、次近衛府使馬、次馬寮使馬、次中宮使馬、次東宮使馬、次内侍馬、次命婦馬、次中宮命婦馬、次藏人馬、次中宮藏人馬、次閤司馬、若典侍供

奉、唯有走婦并手振等、貞觀十五年例、使馬等西度、更又東還、祭日若不御南殿、已刻使等付内侍申罷向由、又内侍已下女使等參上、候

於清涼殿東庭覽之、又召藏人所陪從等御前、^(其馬階下、或騎之、)或召近衛府使於御前賜酒肴、兼令奏歌舞給禄、一同春日祭使、

仁和四年六月二日御記云、^(伊勢公也)右近衛中将時平其兄也、被充賀茂祭使、饗近衛等之日、彼大臣手親執盃与近衛等、是一失也、

同年十二月十一日御記云、時平朝臣為仲春春日祭使、其饗近衛等之日、父太政大臣執盃勸彼舍人、為過也、

仁和五年四月乙酉、辰四刻鴨祭使、左近少将友于參入、便令歌舞云々、然近衛府所歌舞極以冷淡、仍喚殿上人等更歌舞、酤

之至多過他日、即賜件人等禄、各有差、

戊日、解警固陣事、

祭王還^二本宮^一之後、大臣令^三内侍奏^二解陣之由^一、若不^レ候時、大臣付^レ藏人若殿上弁^二令^レ奏^三其由^一、後以^レ外記^三召^二内豎^一、令^レ召^三諸衛府官人^一、官人連立後、大臣仰云、陣解、

先ず、齋院の御禊に関わる準備として、祭の十日前に前驅・次第使を決めて齋院に奏上し、御禊の二日前に賀茂川のどこで御禊するかを陰陽寮に占わせて天皇に奏上する。そして、午日に御禊と天皇が祭当日用の牛などを覧る。未日に天皇は馬（十列）などを覧る。そして祭の前日（未日または申日）に、六衛府に警備を命じる警固がある。

祭日は「中申酉日」となっているが、申日は「国祭」の日とも言われ（『台記』久安三年（一一四七）四月十五日戊申条）、臣下の奉幣や参詣（後の摂関賀茂詣）が行なわれる日であるが、諸儀式書に記載はなく、詳細は不明であり、実質的に賀茂祭は酉日の一日で行なわれた。その「賀茂祭事」に記されている内容は、すべて内裏（天皇）のことであり、神社での儀式については触れられていない。中祀は祭とその前後の計三日の齋を必要としたので、二日前に潔斎の開始を伝える奏聞がなされ、当日に宣命が奏上される。天皇はそれを覽て内蔵寮使に給い、さらに紫宸殿（南殿）に出御して祭使一向を覽て送り出す。天皇が紫宸殿に出御しない場合でも、祭使たちが乗る威儀の唐鞍を付けた飾馬（被馬）や従者を覽ることがあり、また藏人所から選出された陪従を御前に召したり、春日祭と同じように、特別に近衛府使に酒肴をご馳走し、近衛府使が引き連れる舞人・陪従に歌舞を奏させてから禄を給うこともあった。

翌日（戌日）、齋院が紫野に戻り、大臣（上卿）による解陣が行なわれた。警固・解陣は、奈良時代からの統制とも、行列を見物する多くの野次馬に対する規制とも考えられるが、いずれにせよ他の祭にはない儀

で、賀茂祭が京都中を虜にした盛儀であったことを示している。警固・解陣のみならず、齋院御禊から内裏での祭使（勅使）発遣、社頭での儀に至るまで、神祇官は主導的な立場になく、上卿を首班とする太政官によって挙行されていたことも重要である。賀茂祭の儀は実質的に午日の齋院御禊から戌日の解陣までの五日間であるが、その前から周到な準備があるだけでなく、例えば『小野宮年中行事』四月「十五日、授^二成選位記^一事」に「外記序例云、若当^三鴨祭^一、行^二十七日^一、見^二日記^一、」とあるように、干支で決められる祭の日取りによって政務の日程が変わることもあるほど影響力があり、まさに朝廷にとっても最大の年中行事であった。

二、摂関期の賀茂祭

賀茂祭に関する摂関期の日記（古記録）を正確に把握するためには、警固・解陣を含めた儀式そのものの重層性を理解し、時代変化にも注目すると共に、記主の立場や視点に留意しながら読み進める必要がある。

ここに【事例】として取り上げたのは、『親信卿記』の記載がある天禄三年（九七二）から『御堂関白記』『権記』『小右記』（『小記目録』）の記載が揃う最終年である寛弘八年（一〇一一）までの賀茂祭関連の記事である。円融天皇（九五九～九九一、在位は九六九～九八四）・花山天皇（九六八～一〇〇八、在位は九八六まで）・一条天皇（九八〇～一〇一一）までの時代で、祭儀の中核である齋院は尊子内親王と選子内親王が勤めていた。

尊子内親王（九六六～九八五）は、冷泉天皇の皇女で、母は女御藤原懷子。冷泉天皇の時代、安和元年（九六八）七月一日に卜定され、同年

十二月廿七日に初斎院（左近衛府）に入り、天禄元年（九七〇）四月十二日に紫野斎院に入った（『日本紀略』『賀茂斎院記』など）。賀茂祭への奉仕もこの年からと考えられるが、史料上確認できるのは翌二年からで、『日本紀略』同年四月の条に「十七日、壬午、賀茂斎王禊、」廿日、乙酉、賀茂祭、」とある。

その翌年から三ヶ年分（天禄三年①、天延元年②、同二年③）の記録が『親信卿記』に詳しく記されている。現在に伝わる『親信卿記』は、記主の平親信（九四六～一〇一七）が六位蔵人であった天禄三年正月廿六日から天延三年正月七日までの日記を、同じく六位蔵人を勤めた子息の重義・行義らのために編集したもので、その際に、並行して別々に付けていた具注暦記（暦記）と部類形式の別記を統合させたと考えられる。その「賀茂祭」に関する別記と一緒に、自身の実務執行に必要な儀式次第や先例をまとめておいたものが「賀茂祭の雑事」（③⑧・③「祭の雑抄」と考えられる。ここから摂関期における実務官人の朝儀に臨む姿勢と日記の付け方を窺い知ることができると共に、賀茂祭についても、マニュアル（「賀茂祭の雑事」と、御禊の前駆定（①①・①、②①）、天皇が斎院の饗の相伴役として遣わす垣下（①②・①、③①・①、⑧・②）、御禊（①③・①、②②・①、③②・①）、警固の召仰（①⑤・①、⑥・①、②④・①、③④・②、⑤・②）、女騎の馬と唐鞍（①⑥・②、②④・②、③④・①、⑤・①）、宣命（①⑥・③、②⑥・①、③⑥・①）、祭（①⑦・①、②⑦・①、③⑥・①）、斎院の裳や還饗（②⑦・②、③⑧・①）、葵桂献上（②⑨・①）、解陣（①⑨・①、②⑨・②、③⑧・①）などに関する実例を比較して検証できる。

なお、尊子内親王は天延三年（九七五）四月三日に母の薨去により退下したので（『賀茂斎院記』『日本紀略』、同年の賀茂祭は斎院の奉仕な

しで行なわれた（④③）。また、退下後の内親王は、天元三年（九八〇）十月に円融天皇の女御として入内して承香殿女御と呼ばれたが、同五年四月に突如剃髪し、寛和元年（九八五）四月に受戒、同年五月二日に薨去した。

選子内親王（九六四～一〇三五）は、村上天皇の皇女で、母は皇后藤原安子。天延三年六月廿五日に卜定されたが、まだ本院に入っていないというところで翌年の賀茂祭には奉仕していない（⑤③）。その貞元元年（九七六）九月廿二日に初斎院（大膳職）に入り、同二年四月十六日に紫野斎院に入ったので（⑥①）、この年から奉仕したと考えられるが、史料上確認できるのは翌天元元年からである（⑦）。以後、円融・花山・一条・三条・後一条と五代の天皇の賀茂斎王を勤めたことにより「大斎院」と称された。退下は長元四年（一〇三一）九月廿二日、病によるもので、その様子は『左経記』に詳しい（黒板伸夫監修・三橋正編『小右記註釈 長元四年』下〈小右記講読会刊行・八木書店発売、二〇〇八年〉参照）。

選子内親王の斎院時代の賀茂祭を記す最初の日記は、『小右記』天元五年（九八二）の条である（⑪）。『小右記』の賀茂祭記事が同元年からあったことは『小記目録』からわかるが、記主藤原実資（九五七～一〇四六）は同四年二月に蔵人頭になっており、その翌年の賀茂祭記事がまゝとまって残されていることは意義深い。この年（天元五年）三月に藤原遵子（頼忠女）が皇后となり、実資は皇后宮亮に任命され（拙稿「摂関期の立后関係記事」〈本紀要第一九号〉参照）、賀茂祭でも中宮使を奉仕しすることになった。そのために引馬の雑具や唐鞍を借りたこと（③▼b、④▼a、⑤▼a、⑪▼a、②①▼a）、祭の前日に内裏に籠もらなかったこと（⑧*1）、何よりも使の立場からの祭当日の中宮の儀や行列

と下社・上社・宿所の様子(17)▼a*2)、翌日の宿院と紫野斎院での饗宴などを描いている(19)▼a*1)。また、蔵人頭の立場によるか、中宮使の立場によるかは不明だが、実資自身も祭日と翌日に自邸(小野宮第)で「儲所の饗」を設けて来訪者に酒肴や禄を振る舞っている(17)▼a、(19)▼b)。この年の祭で注目されるのは、賀茂祭に供奉する者の従者が綾羅を着るような過差を禁じる命が下され(1)▼b)、御禊の上卿・参議が来なかったことで召問われ(6)▼a、(8)*2、(9)、(22)*1、(23)▼a、(24)、(25)*4)、祭当日に使の多くが来なかったり代官となったりしただけでなく、上卿も来なかったので参議を代官とし(16)、(17)*2*3)、穢により唐鞍の調達ができなかったり大祓をしたり(7)、(8)*1、(12)、(13)、(14)*2、(15)、特別に賀茂社と松尾社の禰宜を御禊の日に呼んで祭の平安を祈らせたりしたことなど(8)*3)、朝儀としての賀茂祭に対する弛緩への対応が多く記されていることである。他方、祭の前日(申日)には関白藤原頼忠の賀茂詣がなされた(14)*1)。

花山天皇朝の賀茂祭についても、蔵人頭であった実資による『小右記』寛和元年(九八五)の記事が略本で残されているが(14)(8)、祭当日に関白頼忠による賀茂詣があったことを記し(+1)、朝儀については「伝聞」として近衛府使と内蔵寮使の代官を記す程度である(+2)。一条天皇の蔵人頭を勤めていた時の『小右記』の記事はないが、参議になった直後の永祚元年(九八九)には(18)、上卿である藤原济時に障が生じたので摂政藤原兼家の命により実資が一人で御禊を行ない(1)▼a、(2)、(3)▼a、(4)、祭の当日も済時を補佐している(8)▼b)。実資は祭の前日に円融法皇の使として賀茂社に詣で、一条天皇ための御祈の祭文を読み、自身の私幣を奉っている(7)▼c)。なお、藤原実資は一条天皇朝の長保三年(一〇〇一)に権大納言で右大将を兼ね、後に大納

言・右大臣となっても右大将を辞せずに続け、賀茂祭の上卿を多く勤めた。その立場から記録に残された初例が寛弘二年(一〇〇五)であり(34)、『権記』同七年四月廿四日条(39)(8)△A)に実資が触穢で藤原斎信が代行したことを特記していることなどから、寛弘年間には実資による上卿が常態化していたことを窺わせる。三条天皇朝・後一条天皇朝になると、実資は賀茂祭上卿という立場から『小右記』により詳細な記載を残しており(本稿の続編に掲載予定)、それらを合わせて検証すること、摂関期の賀茂祭の諸相を複合的に考察することが可能になる。

藤原行成(九七二―一〇二七)も一条天皇の蔵人頭を勤め、その立場からの最後の『権記』の記事が長保三年にあり(30)、垣下が斎院御禊に一人も来なかったこと(5)△A)、疫病流行により見物が少なかったこと(10)△A)、祭使の詳細(10)△B)などについて記している。

『権記』の記事は本稿の【事例】で扱った最後の年である寛弘八年(一〇一一)までしか伝わらないが(40)、行成は公卿となった後も賀茂祭の諸儀の記録を残しており、藤原道長の『御堂関白記』と共に『小右記』の記事が少ないところを補う形になっている。

三、賀茂祭に対する関心の変化 ―近衛府使と摂関賀茂詣―

『小右記』『権記』『御堂関白記』の記事に共通することは、朝儀としての賀茂祭の諸儀より、周縁についての記載が多くなることであり、そこから貴族社会における関心の変化を知ることができる。

賀茂祭における斎院の位置付けは微妙で、少なくとも斎院不在時や初斎院段階で祭儀に参加しなかったことは、その存在が不可欠ではなかったことを意味している。それ以上に内裏から遣わされる祭使(勅使)が

重要で、その中の意味合いも時代と共に変化している。

賀茂祭使の行列は、『江家次第』（巻六・四月・賀茂祭使）の「路頭次第」によれば、山城の歩兵左右各四〇人、前驅の騎兵左右各六〇人、郡司八人、国司一人、内蔵・中宮・春宮・院の御幣及び宮主、春宮・中宮・馬寮の走馬、春宮使・中宮使・馬寮使・近衛府使・内蔵寮使、關司・中宮藏人・内蔵人・中宮命婦・内命婦・左右火長各一〇人、門部・兵衛・近衛左右各二人、齋院長官と齋王の輿、女孺一〇人、執物一〇人、腰輿、供膳韓櫃三荷、雜器物二荷、膳部六人、騎女一〇人、陰陽寮漏刻、童女四人、院司二人、韓櫃一〇荷、藏人所陪從六人、さらに車駕が連なるといふ盛大なものであった。それが内裏から下社・上社へと連なるのであるから、見物者が多数あり、棧敷も設けられ、時に場所争いが起こったことも肯ける（²⁶⑨*1、¹¹▼a*1、¹³*1、²⁹⑮△A、³¹⑬△Cなど）。その中の勅使をみると馬寮使・近衛府使・内蔵寮使の三人があり、祭儀の面では宣命と幣帛を持つ内蔵寮使が中核であったと考えられる。ところが、摂関期には祭使団を引き連れるという意味もあって、舞人・陪從を率いる近衛府使が最も注目される存在となっていた。

近衛府使は春日祭使と同様に次将（中将・少将）が勤め、その父などが邸宅で出立儀と還饗を催して縁のある者を集め、舞人・陪從のための摺袴などを届けてもらう習慣があった。それが高級貴族の子弟が祭使となった時には、公卿となる前のお披露目としての意味が付加され、特に盛大になされたことは言うまでもない。先の『小野宮年中行事』の「中申西日、賀茂祭事」に「或召近衛府使於御前賜酒肴、兼令奏歌舞給祿、一同春日祭使」とある近衛府使が内裏に召される儀は、この私邸での儀の延長上にあつたのである（²²⑫*1、³⁶⑮▲B、³⁹⑦▲A）。

【事例】にある代表的な者に、永祚元年（九八九）に父忠平の四条第西対から出立った藤原公任（¹⁸⑦▼a、⁸▼a、¹⁰▼a）、正暦四年（九九三）に父道隆の東三条院西対から出立った藤原隆家（²²⑫*1*2）、寛弘二年（一〇〇五）に道長の枇杷殿西対から出立った源雅信（³⁴⑮▼c、²⁵▲A、²⁶△A）、同四年に父道長の土御門殿東対から出立った藤原頼宗（³⁶①▲B、²¹▲A、²²△A）、同七年に父道長の土御門殿西対から出立った藤原教通（³⁹①▲B、⁷▲A、¹⁰▲B）などがある。さらに重要なことは、この時代に摂関賀茂詣が成立することである。

『師光年中行事』『公事根源』などでは摂関賀茂詣のはじまりを天祿二年（九七一）九月廿六日戊午に摂政右大臣藤原伊尹が行なったことに求めているが、四月の賀茂祭前後と言うことでは、藤原兼通が関白内大臣となつた翌年の天延元年（九七三）四月末日（十二日乙未）に行なつたのが初例となる（²⑤）。兼通は貞元元年（九七六）四月廿五日辛酉の賀茂祭当日にも参詣している（⁵③）。藤原頼忠は関白になつた翌年の天元元年（九七八）から毎年のように申日（祭の前日）の参詣をして（⁷④、⁵、⁸②、³、⁹④、¹⁰④、¹¹⑭*1、¹²④、¹⁴⑦、⁸+1、⁹）、この儀を成立させたように見えるが、天元五年五月二日に左大臣源雅信（¹¹⑭注1）、永観元年（九八三）四月廿二日丁未に右大臣藤原兼家（¹²③）、寛和元年（九八五）四月廿九日癸卯に三位中将藤原義懐も参詣しているように（¹⁴⑧注1）、まだ摂関の独占的な行事には至っておらず、有力者が競合していた。それは一条天皇即位の翌年の永延元年（九八七）四月十六日戊申に摂政藤原兼家が参詣し（¹⁶①、²*1）、その後、十三日乙巳に権大納言藤原道隆、廿日壬子と五月廿一日壬午に右大臣藤原為光の参詣があつたことから窺える（⁸▼a、²注1）。

兼家没後の正暦三年（九九二）にも四月廿一日甲申の摂政道隆に続い

て廿五日戊子に内大臣道兼が参詣している(21④・注1)。しかし、摂政道隆による同四年四月十四日壬申の参詣記事(22⑧、⑨)、関白になった翌五年四月十五日丙申の参詣記事(23⑤、⑥・1、⑦)には道長を含むほとんどの公卿が参列したとあり、摂関賀茂詣が確立したかに見える。それを内覧左大臣の立場で長徳四年(九九八)から継承し(27⑩)、摂関期の儀として不動のものとしたのが藤原道長であった。道長が参詣しなかった長保二年(一〇〇〇)四月十三日庚申や寛弘二年(一〇〇五)四月十九日丙申に右大臣藤原顕光が参詣したこともあるが(29⑪)▲A、⑫▲A、⑭⑮、⑯+1+2、⑰▲A、⑱△B)、もはや道長と争うような性格のものではなかったと思われる。道長が四月中申日(国祭日)の賀茂詣を信仰上の義務的なものとしていたことは、それを中止した際に由祓をしていることからわかるし(33⑧)▲A)、朝儀に匹敵する位置付けをしていたことは、『御堂関白記』寛弘四年・五年・八年の賀茂詣の記事に供奉者や舞人・陪従の名前を記したり(36⑰)▲A、⑳⑰▲A、㉑⑰▲A)、同七年・八年には賀茂詣の雑事を定めたという記事を残していることからわかる(39①)▲B、40②▲A)。ここから道長による政権の獲得が、社会に精神的な変質をもたらしただけがわかるであろう。

私邸でなされる近衛府使の出立・還饗にしても、摂関賀茂詣にしても、私的な色彩が濃く、朝儀としての賀茂祭という視点からは周縁の現象と映ってしまう。しかし、いずれの日記もそれらに篤い関心を寄せ、時には齋院や朝廷での儀式以上に詳しく記しているのであり、ここから時代の変化・価値観の変容を読み解くことができる。更に細かく読み込むことで、政治・社会のシステムや世相を知ることができる。ここで類聚した記事を、是非、多くの人に活用していただきたいと思う。

本稿の書下し文や「首書」記号は、前々稿「摂関期の立后関係記事」・前稿「摂関期の「着陣」「着座」記事」と同様で、以下の通りとした。平安時代の研究や古記録の学習にも役立てていただければ幸甚である。

『親信卿記』(平親信の日記)

・…陽明文庫本(陽明叢書記録文書篇『平記・大府記・永昌記・愚昧記』(思文閣出版、一九八八年)所収)の朱書首書。

『小右記』(藤原実資の日記)

*…長元四年条の底本(伏見宮本)と同じB系本の写本にあるもの。

+…尊経閣文庫(前田家)本などA系本の写本にあるもの。

▼…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

◆…底本に「小記目録」に記事があるもの。番号は編目順。

★…逸文。

・追加記号のアルファベットは小文字

『御堂関白記』(藤原道長の日記)

※…底本にあるもの。

▲…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

・追加記号のアルファベットは大文字

『権記』(藤原行成の日記)

△…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

☆…逸文。

・追加記号のアルファベットは大文字

『本朝世紀』

・…国史大系本の底本である伏見宮本・第一高等学校本の朱書・墨書の標目。

【事例】

①天禄三年（九七二）

①『親信卿記』天禄三年四月九日条

・1「御禊の前駈定」

九日（＝戊戌）。

中宮大夫藤原朝臣（＝源）朝成、射場殿に参り、賀茂の御禊の前駈並びに次第使の文を奏せしむ。〔宮に入る。〕奏聞し返給はる。

②『親信卿記』天禄三年四月十五日条

・1「斎院の垣下を押す事（事×）」

十五日、辰（＝甲辰）。

式部丞（＝藤原扶光カ）、斎院（＝尊子内親王）の垣下の書出押すべきの由を示付す。仍りて先例を尋ねて壁書す。陪膳の番の東の小柱也。式文（＝藏人式）に云はく「前だつこと二日、六・七人を差定す。」と云々。仍りて四位二人、五位三人、六位二人、之を定む。

斎院の垣下
禊日

忠清朝臣（＝源） 助信朝臣（＝藤原） 伊陟（＝源）

朝光（＝藤原） 義孝（＝藤原） 扶光（＝藤原）

時明（＝藤原カ）

祭の後朝

泰清朝臣（＝源） 文実朝臣（＝紀カ） 高遠（＝藤原）

実資（＝藤原） 光昭（＝藤原） 扶光（＝藤原）

通理（×迫理）（＝大江）

③『親信卿記』天禄三年四月十七日条

・1「御禊」

十七日、午（＝丙午）。

禊日也。御物忌に依り、所（＝藏人所）の陪従並びに諸国の牛等を覽ぜず。事由を奏するの後、彼の院（＝斎院）に遣はす。但し、牛に至りては、小舎人を差はし、之を遣はす。

④『日本紀略』天禄三年四月十七日条

十七日、丙午。

賀茂斎内親王「尊子」の禊。

⑤『親信卿記』天禄三年四月十八日条

・1「警固の召仰無き事」

十八日、（未（＝丁未））。

上卿参らず。警固の召仰無し。

⑥『親信卿記』天禄三年四月十九日条

・1「警固を行なはる事（事×）」

・2「女騎の馬を御覧する事（事×）」

・3「内記、明日の宣命を奏する事（事×）」

十九日、（申（＝戊申））。

民部卿（＝藤原文範）、警固の事を行なはる。但し、奏せられず。

〔先例を問ふべし。〕

女騎の料の左右の御馬を御覧ず。其の儀、官人、陣外に牽く由を申す。藏人、事由を奏す。着陣を仰す。〔東。〕次いで東廂（＝清涼殿）の御簾を下（×可）ろす。次いで少将高遠、毛文を文夾に差し、南第二間に進候じ、之を奏聞す。奏聞（々々）の後、滝口より牽入る。廻乗る儀は一、他の例の如し。左、退出す。次いで右、牽入る。御覧ず。亦、退出す。次いで少将、人を召す。藏人参入す。仰せて云はく「硯。」退出す。硯を取り、少将の座の東方に置く。仰に随

ひて尻付す。件くだんの尻付しつけ、毛付けつけの下に書く。命婦みょうぶは其子。藏人（＝女藏人）は其子。闌司みかどのかみは其子。但し、今年、掌侍なぐさ、典侍のり代に依りて騎馬きばすべし。仍りて其の料を付す。事、了りて退出す。次いで硯いを取る。次いで主殿しゅでんの官人くわんじん掃除そうじす。次いで御簾ごれんを上あぐ。件くだんの事、又々、他の人に案内あんいすべし。

又、内記ないぎ、宣命せんめいを持参しつさんす。藏人（＝女藏人）に付す。藏人（＝女藏人）奏聞そうもんす。御前に候こうず。明日、内蔵司（＝内蔵寮）の使に給ふと云々。件くだんの事の案内、他の人に問ふべし。

⑦『親信卿記』天禄三年四月廿日条

・1「祭」

廿日（＝己酉）。祭日也。

（注1）『蜻蛉日記』下に賀茂祭が行なわれたことが見える。

⑧『日本紀略』天禄三年四月廿日条

廿日、己酉。

賀茂祭。

今日、大宰権帥源朝臣高明、大宰府より上落じようらくす。葛野かどのの別屋べつおくに着す。

⑨『親信卿記』天禄三年四月廿一日条

・1「解陣」

廿一日（＝庚戌）。

民部卿藤原朝臣（＝文範）、陣座じんざに於いて、解陣げじんすべきの由を奏せしむ。事由を奏す。仰せて云はく「聞食きこめす。」と云々。陣に帰り、勅答ちくたふを仰す。其の後に解陣す。

②天延元年（九七三）

①『局中宝』第二冊・内覧後令奉行公事給例・忠義公（天延元年）

四月五日（＝戊子）、内大臣（＝藤原兼通）以下、仗座（＝陣座）に参る。賀茂斎内親王（＝尊子内親王）の前まへ駈がけの事を定めらる。

②『親信卿記』天延元年四月十一日条

・1「斎院（＝尊子内親王）の御禊」

十一日（＝甲午）。

斎院（＝尊子内親王）の御禊みそぎ。御物忌みのもろいみに依り、所（＝藏人所）の陪從（＝右大臣家）（＝藤原頼忠）・山城（＝近江等の肥牛を覽ぜず。直に彼の院）・小舎人（＝斎院）に遣はす。小舎人（＝斎院）を差はす。

③『日本紀略』天延元年四月十一日条

十一日、甲午。

賀茂斎内親王「尊子」の禊。

④『親信卿記』天延元年四月十二日条

・1「警固の召仰」

・2「女騎の馬を点定する事（事×）」

十二日、乙未（＝乙未）。

藤中納言（＝為光）（＝藤原）参入し、事由を奏せしめ、警固けいこの召仰めしおほせの事を行なふ。

此の日、右兵衛陣（＝陰明門）の前に於いて、藏人（＝源伊陟）に依り、祭の女騎の料の御馬を点定す。此の例、頗る不詳。已に明日、御物忌の外也。用意すべき歟。」

⑤『日本紀略』天延元年四月十二日条

十二日、乙未。

内大臣「兼通（＝藤原）」、賀茂社に参る。

(注1)『師光年中行事』(四月・撰閑家賀茂詣事)には「天延元年四月十三日内申、関白内大臣(忠義公)賀茂詣也」とある。

⑥『親信卿記』天延元年四月十三日条

・1「内記、宣命の紙を請ふ事(事×)」

十三日(内申)。

内記、宣命の料の紅紙二枚を請ふ。(即ち内侍恭子(橋)、之を奏せしむ。)

⑦『親信卿記』天延元年四月十四日条

・1「祭」

・2「齋王(尊子内親王)の御裳の沙汰」

十四日、(西(丁酉)。

祭也。先づ御簾を下ろす(清涼殿。内大臣(兼通)の牛を覽ず。小舎人を差はし、彼の院(齋院)に遣はす。而るに使の小舎人申して云はく「御禊の日、給ふ所の御牛、本家の物忌に依り、院に留め、之を飼はしむ。而るに今、此の牛有り。」先例を尋問ひ、祿を給ひて返遣はす。牛に至りては、初日を用ふ。」次いで所の陪従六人を覽ず。覽じりて罷帰る。騎馬を牽きて参入し、廻牽くの後、仰に依り、之に騎す。兩三廻る後に下る。次いで内蔵使の飾馬并びに牽馬・手振・取物。次いで命婦の飾馬・下仕六人・手振・取物。次いで關司の飾馬・手振・取物。(下仕二人有るべきに、失して度らず。)次いで東宮使(東宮師貞親王の使)の飾馬・手振・取物。次いで典侍の下仕八人・手振・取物。参るに随ひて御覽ず。次第に依らず。光景を惜しむ為也。

此の間、命婦・藏人(女藏人・關司、南殿(紫宸殿)の北廂に候ず。召に依り、小板鋪の御障子(賢聖障子)の許に候ず。内侍、祿

を給ふこと、差有り。典侍、朔平門の外に候ずるに、出納を差はし、之を給ふ。

今日、掃部の女孺来たりて請取ると云々。近衛府使、内侍所に就き、之を給はりて退出す。内蔵寮使、内侍に付し、参る由を奏せしむ。即ち宣命の文を給はりて退出す。馬に至りては、後に之を覽ず。祿法。

典侍。(紅花の褂。典侍の料を除き、皆、内侍所に請はしむ。)

命婦・藏人。(支子染の袈。)

關司。(同色の襖子。近衛府使。(同色の袈。)

今日、宣旨を宣り、「右近陣」件等の人馬、明義門より出で、侍(殿上間)の前并びに後涼殿の北の前を経て、本の如く出する。〔此の例、未だ先例を知らず。若しくは是、時議敷。〕

諸陣に仰せ、牛馬を入れしむ。

内作(内匠)に仰(せ、御前の橋(長橋)を取らしむ。

行事藏人、院に向かはず。(是、故実也。)

今日、参らざる使々は、馬司(馬寮)・中宮(昌子内親王)・近衛府(参ると雖も、馬の遅来たるを称して牽かず。)

私案するに、若し御覽すべくば、案内を仰すべき也。又、

先例、必ずしも尽くは覽ぜず。又、牽馬を覽ぜず。而るに今度、仰に依り、牽馬を牽かしむ。

内大臣(兼通)、召に依り、簾中に候ず。(馬御覽の間の事歟。)

藏人大藏大丞正雅(藤原)を院(尊子内親王)に遣はして仰せしめて云はく「院司(齋院司)申さしめて云はく『御裳の料の蘇芳を下されざるに依り、今日の事を闕くべし。』と云々。事、極めて不便也。早く事を闕かず、供奉せらるべし。」者り。院申されて云はく

「入る所の御裳は三腰也。院、纔に儲くる所は一腰也。此を以て、今日の事を成すべし。例事に至りては、已に以て闕く。」と云々。其の間、子細也。

⑧『日本紀略』天延元年四月十四日条
十四日、丁酉。

賀茂祭。

⑨『親信卿記』天延元年四月十五日条

・1「葵・桂を献ずる事(事×)」

・2「解陣」

十五日。

葵・桂 各二折櫃、内蔵寮、内侍所に付す。「上御社二櫃、下御社二櫃。」掃部の女官伝取り、女房に奉る。「昼御帳の犀角の辺に結付く。又、南殿の御帳に結付くと云々。」

内大臣、陣座に着す。解陣すべきの状を奏せしむ。奏聞の後、諸衛を召し、解陣の由を仰す。六衛府、日華門より入り、宜陽殿の壇上の柱の外を経て、軒廊(近廊)に立つ。「五位は柱の内、六位は柱の南。西上北面。」雨儀の為也。

③天延二年(九七四)

①『親信卿記』天延二年四月十四日条

・1「垣下を差はす事(事×)」

十四日。

差はす垣下、壁書す。

②『親信卿記』天延二年四月十六日条

・1「御禊」

十六日、(午(「甲午」))。

今日、御禊也。仍りて参内す。

次いで院(「齋院」に参る。内蔵寮の饗を催さしむ。上卿参らる。

〔中宮大夫(「藤原為光・修理大夫(「源惟正」))。御前(「前驅」)等参入す。〕垣下の員少なし。仍りて行事并並びに院の長官等、勸盃と為す。勸盃(々々)の者、一の上卿(「為光」に献ず。上卿(々々)、参議

(「惟正」に伝ふ。参議、南座の第一の人に給ふ。一の人(々々)起座し、殿上人に伝ふ。殿上人(々々)居し乍ら、北座の人に目す。北座の人(々々々)起座して来たり、盃を受く。又、殿上人に伝ふ。次々、此の如し。時議有り。御前の者、一行、之を下す。更に雑色(「藏人所雑色」、殿上人に勸盃す。是事等、故実也と云々。但し、先例を問ふべし。〕又、諸の御前の者、左(「左の諸衛」、南に着し、右

(「右の諸衛」、北に着す。

諸国の肥牛并びに太政大臣家(「藤原兼通」)の牛等、小舎人を差はして給ふ。藏人、并に触る。并、上卿の気色を候ひて牽廻らしむ。

〔口付、本人、之を引く。〕其の後、院に給ふ。

所(「藏人所」)の御前遅参す。仍りて上卿催仰せらる。而るに遂に来たらず。刻限、已に至る。仍りて御車を寄す。此の間、御前等参集す。

鳥居の辺に見物し、齋院に還参る。

頃之、還御す。内蔵寮、湯漬を儲く。一両の後、院司(「齋院司」、祿の辛櫃を昇がしむ。来集する殿上人并びに所の衆、祿を取り、御前の人々に被く。事了りて退出す。此の日、齋院(「尊子内親王」、子・櫛等を請ふ。

(注1)『蜻蛉日記』下に、右馬助藤原道綱が馬寮使に任じられたが、禊日に死んだ

犬を見たために使のことは取り止めたことが見える。

③『日本紀略』天延二年四月十六日条
十六日、甲午。

齋内親王（＝尊子内親王）の禊。

④『親信卿記』天延二年四月十七日条

・1「女騎の馬を覧する事（事×）」

・2「上卿参らざるに依り、警固の召仰無き事（事×）」

十七日、〈未（＝乙未）〉。

御馬を覧ずべし。仍りて左右（＝馬寮）に御馬乗の舍人に候ぜしむべき由を仰す。清涼殿の東庭に於いて、左右馬寮の御馬を御覧じ、女騎の料を点定す。其の儀、先づ御簾を下ろす。次いで人を召す。藏人参入す。退出し、右近少将致忠（＝藤原）を催し、御前に候ぜしむ。次いで藏人、御馬奏を奏す。退出の後、少将（＝致忠）に下給ふ。此の間、御馬を牽く。（寮（＝馬寮）申して云はく「先例、各、三疋を牽く。今日、五疋を牽かしむ。先例に非ず。」と云々。此の事、定例無し。太政大臣（＝兼通）の仰に依り、之を下知する也。」先づ左の五疋を牽き、次いで右の五疋を牽く。点定し了る後、少将、侍（＝殿上間）に於いて、名を書付く。

今日、上卿参らず。仍りて警固の召仰の事無し。

⑤『親信卿記』天延二年四月十八日条

・1「唐鞍を請ふ事（事×）」

・2「警固の召仰」

十八日、〈申（＝丙申）〉。
唐鞍等を催請はしむ。

左大臣（＝源兼明）奏せしめて云はく「昨日、上卿参らず、警固の

召仰の事を行なはず。今日、行なはむ。」仰せて云はく「例に依りて行なへ。」此の由を伝仰す。召仰、例の如し。但し、降雨に依り、宜陽殿の西廂の□柱の西を経て、軒廊に立つ。（五位は中（＝北側）に立ち、六位は後（＝南側）。退出、例の如し。）事了りぬ。余（＝平親信、警固の間、壺胡録を着す。是、故実也。

⑥『親信卿記』天延二年四月十九日条

・1「祭」

十九日、〈酉（＝丁酉）〉。

祭日也。御物忌に依り、男女の使等を召さず。

今日、典侍・陣外（＝北陣、朔平門）に率参り、直に列見辻に向かふ。是、日暮に依る也。（已に故実無し。）内藏寮使紀時文参入し、宣命を給はる。（昨、内記紀斉時、内侍候ぜざるに依り、藏人をして之を奏せしむ。仍りて之を召給ふと云々。但し、内藏寮、禄物を進る。仍りて給ふ為に、斉時に案内す。斉時（々々）申して云はく「給はらず。」と云々。先例を問ふべし。）

近衛府使は右近少将致忠。

所（＝藏人所）の御前（＝前驅）、見参に随ひ、四人、院（＝斎院）に遣はす。其の遣、追ひて院に参る。（小舍人等を分遣はし、飾馬・男女の使・所の御前等を催さしむ。次いで之を見物す。）

⑦『日本紀略』天延二年四月十九日条

十九日、丁酉。

賀茂祭。

⑧『親信卿記』天延二年四月廿日条

・1「斎院に参る儀」

・2「垣下の書様」

・3 「祭の雑抄」

廿日、〈戌（＝戊戌）〉。

早旦、見物す。

次いで院に参る。先づ庁に着す。〔穀倉院、饌を儲く。〕次いで諸

使（×儲使、召に依り、御前（＝齋王御在所）に参る。庭中の座に着す。

〔使等、中門より参る。所の陪従・六位の次第使等、掖門より参入

す。〕次いで使等の前に、衝重を居う。〔所の衆等、之を役す。〕

一・二巡の後、庭中に列舞ふ。舞了り、院司（＝齋院司）等、祿を取

り、舞人等に給ふ。次いで使々。次いで所の陪従。次いで近衛の陪

従等。

事了りて退出し、使の少将（＝藤原致忠）の宅に到る。

次いで参内す。御物忌と雖も、然るべき事有りて参る也。

源大納言（＝源雅信）、解陣の事を行なふ。

齋院の垣下。

禊日。

正清朝臣（＝源）、公季朝臣（＝藤原）、義孝（＝藤原）、顕光（＝藤

原）。時光（＝藤原）、道理（＝大江）、親信（＝平）。

祭の後朝。

泰清朝臣（＝源）、遠度朝臣（＝藤原）、致方（＝源）、光昭（＝藤原）。

正光（＝藤原）、修遠（＝藤原）、親信。

賀茂祭の雑事。

午日、御禊の事。垣下を差はす。

所の陪従並びに馬を御覧ず。〔日記（＝殿上日記カ）に云はく「御

簾を下ろす。〕齋王駕す牛〔王卿の家より召す。家司に召仰

す。〕及び所々の肥牛〔院に遣はす。小舎人を差はす。〕を御覧

ず。御前に引く時、出納・小舎人、之を引く。先つこと一日に

於て、内侍をして警固すべきの状を奏せしむ。内侍無からば、

上卿、陣座に於いて、藏人をして奏せしむ。末日、之を行なふ。

〔或は、申日、之を行なふ。〕

天慶五年日記に云はく「諸衛、日華門より参入し、軒廊の南

に立つ。〔北面西上。〕上卿（＝藤原実頼）問ひて曰はく『誰

〈そ。〕季方（＝藤原）以下、官職の名を申す。〔六位、姓名共

に申す。但し、入夜るの後、此の如き事の時、五位、名を申

す。六位、姓名を申す。未だ必ずしも官職を申さず。〕」

末日、馬寮の御馬を御覧ず。〔清涼殿。或は仁寿殿。〕

酉日の事。

所の御前（＝前驅）並びに騎馬を御覧ず。

或は御簾を下ろさず。近代は、之を下ろす。又、人に至りて

は、侍（＝殿上間）の前に於いて、之を覧ず。

内侍参入し、男女の使参る由を奏す。〔内侍無からば、代官、

之を奏す。〕

命婦、藏人（＝女藏人）、闌司、中宮の命婦、藏人（＝中宮の女

藏人）。近衛府使、内藏使、馬寮使、中宮使。

近衛府使、舞人等を率ゐ、内侍所に参る。事由を奏せしめ、

祿を給ふ。若しくは御前に召し、儀有り。

命婦・藏人・闌司、御前に参入す。即ち祿を給ふこと、各、

差有り。内侍、無からば、代官、之を奏す。

内侍は白の袂、命婦・藏人は支子染の袂、闌司は襖子（×奥

子。但し、典侍、朔平門の外に於いて奏せしむ。〔祿は紅色の褂。〕

飾馬・手振・下仕を覽ずる事。〔内藏・近衛・馬寮・東宮・内侍・命婦・闌司。〕

引馬覽ぜず。

承平七年、近衛・中宮使の引馬を覽ず。

天曆七年、中宮・東宮の男使の乗る馬・陪從等、之を覽ず。

宣命の事。

先だつこと一日に於て、内記、内侍所に付す。当日、件の宣命を奏す。内侍、内藏寮使参るの由を奏す。即ち祿を給ふの比、件の宣命を給ふ。

内侍候ぜざらば、上卿、当日、藏人をして之を奏せしむ。

承平七年、上卿に返給ふ。上卿（々々）、内藏寮使に給ふ。件の年、内侍代有り。命婦に非ざれば奏せず。

戌日、垣下を差はす。

上卿、内侍に付し、解陣の由を奏せしむ。〔宮に還るの後と云々。〕内侍無からば、藏人に付して奏せしむ。〔陣座に於いて、之を奏せしむ。〕

〔注1〕『親信卿記』天祿三年（①①②③④⑤⑥⑦⑧⑨、但し⑦は別記省略か）・天延元年（②②④⑥⑦⑧⑨）・同二年（③①②④⑤⑥⑧）条は「連の別記（類聚）記事であったと考えられ、「賀茂祭雜事」（③⑧・③）は、その別記（類聚）に付記されていた賀茂祭に関連する次第・先例で、「午日」の御禊、「未日」の御馬御覽、「酉日」の祭当日、「戌日」の垣下を遣わすことと解陣について記されている。

〔注2〕「天慶五年日記」は殿上日記か、あるいは外記日記か。天慶五年（九四二）の警固召仰は四月十八日辛末に行なわれ、「季方以下」は右衛門佐小野道風・右兵衛佐藤原敦敏・右近將監平安直・左衛門少尉藤原有予・左兵衛権少尉藤原

懷忠（本朝世紀）。

〔注3〕承平七年（九三七）の禊日は四月十三日、祭日は四月十五日で、近衛使は左近衛中将藤原敦忠、御禊の上卿は中納言平伊望（『西宮記』〈恒例二・四月・賀茂祭事・勅物、臨時六・次将事・祭使事・勅物〉所引『九記』逸文）。

〔注4〕天曆七年（九五三）の賀茂祭に関する史料は本日条のみ。

〔4〕天延三年（九七五）

①『日本紀略』天延三年四月十四日条
十四日、丙辰。

内裏、微穢有り。賀茂祭行なはるべきや否や、神祇官・陰陽寮等をして、之を占トせしむ。殊に咎無きの由を申す。仍りて穢れざる所司を以て、祭事を奉仕せしむべきの由、仰せられたりぬ。

祈年（二月四日）・当麻（四月四日、祭使発遣）・杜本（四月四日、祭使発遣）・当宗・平野（四月六日）・松尾・大神等の祭、恒例に依りて供奉す。賀茂祭に至りては、供奉する諸司多数（×赦）なり。穢の疑無きに非ざるも、弘仁・天長・貞観・天慶等の例に依り、所司下されりぬ。

②『日本紀略』天延三年四月十八日条
十八日、庚申。

建礼門の前に於いて大祓す。明日の賀茂祭に依る也。

③『日本紀略』天延三年四月十九日条
十九日、辛酉。

賀茂祭。斎王尊子内親王、母（藤原懷子）の喪（四月三日薨去）に依りて供奉せず。

〔注1〕『賀茂齋院記』（尊子内親王）にも同様の記述が見える（但し、十八日とする）。『園太曆』観応元年（一二三〇）十月五日条の勅例の中に「天延三十四九

賀茂祭、〔内裏穢、宣命於左衛門陣仰〕内記了、〕と見える。『日本紀略』四月三日条に「前女御從三位藤原懷子薨〔年四十〕」皇太子〔師貞親王〕并齋院〔尊子〕母也、仍齋院退、出東院、〕とある。『賀茂齋院記』は「東院」を「本院」とする。

〔注2〕この年、賀茂祭の従者の員数を規制する二月廿五日宣旨、三月一日太政官符〔政事要略〕巻七〇・糾弾雜事・従者員数、賀茂齋院用途紅花についての七月太政官符〔朝野群載〕巻二六・諸国公文・中・應徳二年〔一〇八五〕十月主税寮減省続文が発給されている。

〔5〕貞元元年（九七六）

①『日本紀略』貞元元年四月廿三日条

廿三日、己未。

上卿参らず、警固延引す。

②『日本紀略』貞元元年四月廿四日条

廿四日、庚申。

警固を召仰す。

③『日本紀略』貞元元年四月廿五日条

廿五日、辛酉。

賀茂祭。齋王〔選子〔選子内親王〕〕、未だ本院〔齋院〕に入らず。仍りて供奉すること無し。

今日、太政大臣〔兼通〔藤原〕〕、堀川第〔左京三条二坊九一〇町〕より、賀茂社に参る。弁・少納言供奉す。

〔注1〕賀茂祭と同日に太政大臣藤原兼通の賀茂詣が行なわれている。『賀茂注進雜記〕〔乾・行幸官幣御幸附祈願靈驗等〕、『賀茂齋院記〕〔選子内親王〕にも見える。

〔注2〕『年中行事秘抄〕〔四月・四月朔当西時禊祭用下午酉例〕に「貞元四四廿二禊、廿五祭」とあり、廿二日に御禊が行なわれた。

④『日本紀略』貞元元年四月廿六日条

廿六日、壬戌。

解陣。

〔6〕貞元二年（九七七）

①『日本紀略』貞元二年四月十六日条

十六日、丙午。

賀茂齋院選子内親王、大膳職〔初齋院〕より、東河〔鴨川〕に禊し、紫野院に入る。今日、凶会日也。中納言為光〔藤原〕、前駟と為る。

〔注1〕『賀茂齋院記〕〔選子内親王〕にも見える。

②『日本紀略』貞元二年四月十七日条

十七日、丁未。

警固。

③『日本紀略』貞元二年四月十九日条

十九日、己酉。

賀茂祭。

太政大臣〔藤原兼通〕の東三条第〔左京三条三坊一・二町〕の南門〔高門〕の北腋二字。

④『日本紀略』貞元二年四月廿日条

廿日、庚戌。

解陣。

〔7〕天元元年（九七八）

①『日本紀略』天元元年四月十六日条

十六日、庚午。

賀茂齋王「選子（＝選子内親王）」の禊みそぎ。

②『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

天元元年四月十七日、警固けいこの事。

③『日本紀略』天元元年四月十七日条

十七日、辛未。

警固。

④『小記目録』（第一五・摂政関白物詣事）

天元元年四月十八日、関白（＝藤原頼忠）の賀茂詣かももうでの事。

（注1）四月廿三日にも、頼忠が賀茂社に参詣している（『小記目録』第一五・摂政関白物詣事）。

⑤『日本紀略』天元元年四月十八日条

十八日、壬申。

左大臣（＝頼忠）、賀茂社かもしやに参詣さんけいす。

⑥『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

天元元年四月十九日、賀茂祭の事。

⑦『日本紀略』天元元年四月十九日条

十九日、癸酉。

賀茂祭。申刻さるのこく、雷鳴かみなり、雨水ひさめ（＝水雨。雹・霰）あり。

（注1）『政事要略』（卷六九・糾弾雑事・致敬拜礼下馬）に「勘諸祭供奉神事諸司人等、行列行路之間、触ふ類可レ有レ致敬下馬礼哉否事」と「勘檢非違使於京内・城外遇下可レ致敬人之時可レ下馬哉否事」の勘申に「天元々年四月廿三日、賀茂祭日、公卿（卿々）子孫、大夫庶士、為承相公卿、多被陵辱、其中有或公卿、窃問礼法、仍勸此二条」と見える。

⑧『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

同（＝天元元年四月）廿日、解陣げじん。

⑨『小記目録』（第八・神事・齋王事）

天元元年四月廿日、齋王の還向げこうの儀の事。

⑩『日本紀略』天元元年四月廿日条

廿日、甲戌。

解陣。

⑧天元二年（九七九）

①『日本紀略』天元二年四月廿三日条

廿三日、辛未。

警固けいこ。

②『小記目録』（第一五・摂政関白物詣事）

同（＝天元）二年四月廿四日、関白（＝藤原頼忠）の賀茂詣かももうでの事。

③『日本紀略』天元二年四月廿四日条

廿四日、壬申。

太政大臣「頼忠」、賀茂社かもしやに参る。

④『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝天元）二年四月廿五日、賀茂祭の違例いれいの事。

⑤『日本紀略』天元二年四月廿五日条

廿五日、癸酉。

賀茂祭。

⑥『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

同（＝天元）二年四月廿七日、解陣げじん、上卿しょうじん無く延引えんいんする事。

⑦『日本紀略』天元二年四月廿七日条

廿七日、乙亥。

解陣。

（注1）『年中行事秘抄』（四月・四月朔当酉時禊祭用下午酉例）に「天元二四廿二

禊、廿五祭、」とあり、廿二日に御禊が行なわれた。

(注2)『康富記』文安五年(二四四八)四月十六日条の「賀茂祭警固諸衛不参例・此外」に「天元二四廿五、賀茂祭也、廿六日諸卿不参、解陣停止、外記伴義忠付藏人奏之、雖戒儲陣官人、諸卿遂不参、解陣停止、廿七日、右大臣(藤原兼家)以下参入行解陣、如此所見者、陣官人可從上宣之条、亦無予儀者乎、」と見える。

⑨ 天元三年(九八〇)

①『小記目録』(第五・四月・御禊事)

天元三年四月廿二日、斎王(選子内親王)の禊の事。

②『日本紀略』天元三年四月廿二日条

廿二日、甲午。

賀茂斎王「選子(選子内親王)」の禊。

③『日本紀略』天元三年四月廿三日条

廿三日、乙未。

警固。

④『小記目録』(第一五・摂政関白物詣事)

同(天元)三年四月廿四日、関白(藤原頼忠)の賀茂詣の事。

⑤『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(天元)三年四月廿五日、賀茂祭の事。

⑥『日本紀略』天元三年四月廿五日条

廿五日、丁酉。

賀茂祭。

⑦『小記目録』(第五・四月・警固・解陣事)

同(天元)三年四月廿六日、解陣の事。

⑧『日本紀略』天元三年四月廿六日条

廿六日、戊戌。

解陣。

⑩ 天元四年(九八一)

①『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同(天元)四年四月十五日、御禊の上卿参らず、参議行なふ事。

②『日本紀略』天元四年四月十五日条

十五日、壬午。

賀茂斎王(選子内親王)の禊。

③『小記目録』(第五・四月・警固・解陣事)

同(天元)四年四月十七日、警固の事。

④『小記目録』(第一五・摂政関白物詣事)

同(天元)四年四月十七日、関白(藤原頼忠)の賀茂詣の事。

⑤『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(天元)四年四月十八日、賀茂祭、参議参らず、上卿一人行なふ事。

女使参内せず。

⑥『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(天元)四年四月十九日、祭の還立の事。

⑦『小記目録』(第五・四月・警固・解陣事)

同(天元四年四月)十九日、解陣の事。

⑧『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同年月(天元四年四月)廿一日、御禊の日の垣下(参らざる事。

⑨『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同(天元四年四月)廿二日、参らざる垣下の輩の恐懼の事。

(注1)この年、四月九日宣旨「応下早速以て前司一令進中納言院禊祭料絹貳拾参定上

「事」が発給されている（『小野宮年中行事裏書』）。

⑪ 天元五年（九八二）

① 『小右記』 天元五年三月十九日条

▼ a 「季御読経の日時勘文・僧名等を奏せらるる事」

▼ b 「綾羅を以て、従者の衣裳の裏と為すことを禁遏する事」

十九日、辛亥。

殿（＝藤原頼忠。四条第）に参る。次いで参内す。左府（＝源雅信）参らる。季御読経の日時勘文・僧名等を奏せらる。

▼ b 「年来、賀茂の禊祭、職掌の供奉する者の従者、綾羅を以て、衣裳の裏と為すこと、禁遏せらるる所なり。而るに其の制に拘らず、間、違法有り。是、檢非違使等、憲法を忘るる也。有司、阿容せば停むべし。廷尉の職掌の輩、若し違犯有らば、釐務を停め、将来を懲らしめよ。」者り。左大臣（＝雅信）に仰下されりぬ。「殿上の侍臣に至りては、永に簡（＝殿上簡）を除くべし。」者り。即ち仰知らしむること、又、了りぬ。

（注1）▼ b の宣旨は『政事要略』（巻七〇・糾彈雜事・従者員数事）に見える。

② 『日本紀略』 天元五年三月廿二日条

廿二日、甲寅。

宣旨。賀茂斎王「選子（＝選子内親王）」の禊祭の間、陪従の人等、綾羅を着するの事、殊に禁制すべし。」者り。

（注1）『賀茂斎院記』（選子内親王）に同文の記事が見える。

③ 『小右記』 天元五年四月十五日条

▼ a 「中宮（＝藤原遵子）、内裏に入り給ふの事を定むる事」

▼ b 「民部卿（＝藤原文範）、引馬の雜具等を借送る事」

▼ c 「内裏触穢」

十五日、丙子。

午後、殿（＝頼忠）に参る。右大將（＝藤原清時）参らる。中宮（＝藤原遵子）、内裏に入り給ふの事を定めらる。来たる十九日、入り給ふべきの事、一定すること已に了りぬ。而るに賀茂祭、其の程、近きに在り。仍りて便無かるべくば、陰陽師等を召し、他の日を勘申せしむ。勘へて云はく「来月七日、吉日。」者り。返問はれて云はく「五月、是、宜しからざるの月（×同）なり。若しくは忌避すべき敷。」申して云はく「更に所見無し。又、四月節、節用（□）の時に随ふ。」者り。仍りて来月七日を以て、一定せられりぬ。

▼ b 民部卿（＝藤原文範）の許より、引馬の鞍の雜具等を借送る。伝聞く。「内裏、犬死穢有り。」と云々。

（注1）天元五年は四月七日が立夏で、五月八日が芒種であるため、五月七日は節切りで四月節。

④ 『小右記』 天元五年四月十六日条

* 1 「牛斃の穢」

▼ a 「唐鞍を借る事」

▼ b 「大神祭使（＝播磨貞理）、本府（＝右近衛府）より出立つ事」

十六日、丁丑。

雨降る。去夜、牛斃の穢有り。早朝、殿（＝頼忠）に参る。先づ（且）此の由を申し、假文を奉る。

▼ a 大將殿（＝清時）より、唐鞍一具を借給はる。

▼ b 右近將監貞理（＝播磨）、大神祭使にして、本府（＝右近衛府）より出立つと云々。摺袴一腰を送る。穢に染むと雖も、此の由を仰せ、之を遣はしむ。伝聞く。「西京（×景）の小人（×少人）の宅に宿す。」

⑤『小右記』天元五年四月十七日条

▼a「総轡を借る事」

十七日、戊寅。

雨降る。小時(×将)、天霽る。殿(＝頼忠)より総轡を借賜はる。

⑥『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同(＝天元)五年四月廿一日、斎王(＝選子内親王)の御禊、上卿(＝済時)・参議(＝源伊陟)参らず。仍りて左中弁懷忠(＝藤原)を以て、上代(＝上卿代)と為す事。

⑦『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(＝天元)五年四月廿一日、作物所^{つくもどころ}穢有^{けがれ}るの時、馬寮^{ひようもんくら}の平文^{へいぶん}の鞍を以て、唐鞍^{からくら}の代に用ふべき事。

⑧『小右記』天元五年四月廿一日条

*1「御禊、作物所の犬死穢の沙汰」(↓⑦)

*2「上卿(＝済時)・参議(＝伊陟)等参らず、弁懷忠(＝藤原)を以て、上代と為す事(事×)」(↓⑥)

*3「賀茂・松尾等の禰宜(□□)を召し、祭の平安の由を祈らるる事(事×)」

廿一日、壬午。

*1 殿(＝頼忠)に参る。伝聞く。「作物所の板敷の下、犬死有り。」と云々。参内す。陣外に於いて、案内を問ふ。又、宮使(＝中宮藤原遵子)の使に依り、籠候せざるの由を奏せしむ。中使(＝勅使)と為て、藏人孝忠(＝藤原)、太相府(＝頼忠)に遣はさると云々。奏せられて云はく「唐鞍、皆、悉く触穢す。仍りて馬寮の平文の鞍を以て、唐鞍の代(×伐)と為さむ。兼ねて又、王臣家に在るの走馬の鞍を召して相具すべし。執物に至りては、具せずと雖も、何事か有らむ。」

者り。仰無き以前、下官(＝藤原実資)を以て、此の趣を奏せらる。大相府に帰参す。

*2 晩景、見物の為に、一条の辺に向かふ。日暮に依り、見物を遂げず帰宅す。伝聞く。「亥時許、斎王(＝選子内親王)、河頭(＝鴨川)に向かはる。」と云々。今日、上卿(＝済時)及び参議(＝伊陟)、斎院に参らず。仍りて左中弁懷忠を以て、上代(×伐)と為し、其の事を

行なはしむと云々。事、已に希有なり。奇驚き了りぬ。

*3 今朝、賀茂・松尾等の禰宜を召し、祭の平安の由を祈申さる。世間の謠言云々、雲の如し。仍りて昨夕、女房を以て奏せしむる所也。

⑨『日本紀略』天元五年四月廿一日条

廿一日、壬午。

賀茂斎王(＝選子内親王)の禊也。上卿中納言済時、参議伊陟、故障を申して参らず。他の卿相を催さるるの間、日景り空暮れ、遂に参らず。仍りて左中弁懷忠朝臣、上卿代と為すべきの由、外記に仰せられ畢りぬ。亥刻に臨み、斎王、禊所に向かふ。又、今日、内裏犬死穢有り。斎王の御料の牛を御覧ぜず、陣外より、之を奉らる。

(注)「賀茂斎院記(選子内親王)にも同様の記述が見える(但し、廿二日とする)。

⑩『小記目録』(第五・四月・警固・解陣事)

同(＝天元)五年四月廿二日、警固の事。

⑪『小右記』天元五年四月廿二日条

▼a「唐鞍を馬に飾る事」

*1「警固」(↓⑩)

廿二日、癸未。
唐鞍を馬に飾試さしむ。

*1 源中納言(＝源保光)参入し、警固の事を行なふと云々。

⑫『日本紀略』天元五年四月廿二日条

廿二日、癸未。

賀茂祭の女使おんなづかいの料の唐鞍等、内裏、期に臨むの間、大死穢おほしづめに触れりぬ。仍りて諸卿しよきやう、献借すべきの由、之を宣下せんげせらる。今日、警固。

⑬『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同年同月（＝天元五年四月）廿三日、賀茂祭、穢の間、大祓を行なはる事。

⑭『小右記』天元五年四月廿三日条

*1「太相府（＝藤原頼忠）の賀茂詣」

*2「賀茂祭、古跡、内裏の穢、大祓す。弁を以て上代と為す事（事×）」（↓⑬）

廿三日、甲申。

*1 太相府（＝頼忠、賀茂に参らる。仰に依り、御供に候ず。頻りに明日、経営有るの由を申さしむ。已に許さざるの氣有り。仍りて扈從する所なり。
*2 今日、大祓の事有り。賀茂祭の間、内裏、穢有るの時、前例、大祓を行なはると云々。上達部参入せず。仍りて右中弁（＝藤原懷遠（懷平）を以て、上代と為して行なはると云々。
（注1）五月二日に左大臣源雅信が賀茂社に参詣している（『小右記』）。

⑮『日本紀略』天元五年四月廿三日条

廿三日、甲申。

八省院（＝朝堂院）の東廊に於いて大祓す。大死穢の故也。

⑯『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝天元五年四月）廿四日、賀茂祭の事。（馬寮使（＝藤原正光、俄に

身の暇有り、次第使の馬助（＝藤原保信）を以て、寮（＝右馬寮）の使と為す事。納言参らず、参議を以て、上卿代と為す事。）

⑰『小右記』天元五年四月廿四日条

▼a「儲所の饗」

*1「賀茂祭」（↓⑮）

*2「馬寮使服す。仍りて次第使の助（＝馬助）を以て、使と為す事（事×）」（↓⑮）

*3「納言、齋院に参らず、参議二人行なふ事」（↓⑮）

廿四日、乙酉。

▼a「儲所（＝中宮使藤原実資の出立所である小野宮第）の饗、来問ふ人等に処す。

*1「時許、祓の事有り。唐鞍・引馬等を覽ず。申未時許、宮（＝中宮。四条第）に参る。唐鞍・引馬等を覽ず。申

時許、祓の事有り。

禊了りて一条大路に向かふ。上東門に於いて、唐鞍の馬に騎す。

権左中弁致方（＝源・民部少輔時通（＝源・修理亮孝忠（＝藤原）来

会ひて相訪ふ。府生公助（＝下毛野カ）を差はし、内蔵寮に遣はし、

葵・桂等を受けしむ。酉時許、一条大路（二条大道）を渡る。

*2 宮の姫の使、式御曹司に於いて理髪し、其の辺に於いて騎馬す。

寮（＝馬寮）の使正光（＝藤原、忽ちに服身の假有り。（今日、兄念禪

亡す。）仍りて次第使左馬助保信（＝藤原カ）を以て、馬寮使と為す。

仍りて次第使無し。皇太后宮（×皇后宮）（＝昌子内親王、穢に依り、

使を立てられず。東宮（＝師貞親王、御服に依り、又、立てられず。

西終、下御社の宿所に着す。戌時許、社頭に参り、御幣を奉らし

む。上御社に参るべし。即ち参る。御幣了りて、宿所に帰る。（件

の宿所、河の東に在り。御社の政所と号す。）

*₃ 今日、大相府（＝頼忠）・左府（＝雅信）見物せらる。今日、納言、齋院に参らず。唯、参議二人参入す。仰に依り、上代と為して行なふと云々。

（注1）「廿四日」の右傍書に「賀茂祭、癸務」、左傍書に「賀茂祭」とある。あるいは、右傍書は具注曆上部欄外の文字か。

（注2）「儲所饗処来問人等未時許参宮」について、古記録本は「儲所饗処来問人等未時許参宮」、史料本は「儲所饗、□来問人等、未時許参宮」、大成本は「儲所饗来問人等、○内閣一本作余、未時許参宮」とする。古記録本は「諸卿、饗の後（×処）に来問ふ。余（×人等）、未時許、宮に参る。」と解釈しているか。

⑬『日本紀略』天元五年四月廿四日条

廿四日、乙酉。

賀茂祭。行事上卿中納言済時の家、俄に死穢有り。其の身出で難し。衣裳・雑具等、多く触穢して参勤せざる也。権大納言朝光卿（＝藤原）、今日の事を行なふべきの処、舍弟阿闍梨念禪（＝親光）死去す。又、右馬寮使頭正光朝臣、同じ服假（×暇）。仰せて云はく「参議を以て、上卿代と為すべし。次第使左馬助保信を以て、使（＝馬寮使）の代と為せ。」者り。又、今日の宣命、内裏の穢に依り、陣外に於いて使に給ふ。

⑭『小右記』天元五年四月廿五日条

* 1 「宿院に於いて、御前（＝前驅）に給ふ御祿」

▼ a 「齋院の饗」

▼ b 「儲所の饗」

廿五日、丙戌。

* 1 辰時許、宿院に参る。饗の座に着す。先づ藏人所の前驅を御前に召し、祿を賜ふ。其の後、使々（×こ）に祿を給ふ。

▼ a 了りて本院（＝齋院）に帰御す。先づ客殿に着す。次いで御前（＝齋王御在所）に召す。肴物を賜ひ、祿を給ふ。近衛府使、御前に進立ち、歌笛の声を発す。例に依り、歌舞有り。

▼ b 未時許、帰宅す。儲所の饗、史生・藏人・手振等に賜ふ。祿を給ふこと、差有り。近衛府の官人等に、祿を賜ふこと、差有り。

⑯『日本紀略』天元五年四月廿五日条

廿五日、丙戌。

解陣。

⑰『小右記』天元五年四月廿六日条

▼ a 「引馬の雑具等を返す事」

廿六日、丁亥。

▼ a 引馬の雑具等、民部卿（＝文範）に返し奉る。

⑱『小右記』天元五年四月廿七日条

▼ a 「御剣等を返上する事」

* 1 「禊祭の参らざる上卿等問はるる事（事×）」

▼ b 「備前守（＝藤原理兼）の罷申」

廿七日、戊子。

▼ a 殿（＝頼忠）に参る。借り給はる所の御剣・御靴等を返上す。又、

將軍（＝済時）借す所の平緒、大藏丞佐政を以て返奉せしむ。

* 1 参内す。仰せられて云はく「禊祭の間、上卿（＝公卿）参らず。民

部卿藤原朝臣（＝文範）・左衛門督源朝臣（＝重光）の申す所、已に掬

る所無し。宜しく召問はしむべきの由、先づ大相府（＝頼忠）に仰

せ。」者り。

▼ b 備前守理兼（＝藤原）、藏人公正（＝藤原）を以て、赴任（×起任）の由を奏せしむ。御前に召し、御衣一襲を賜ふ。（御衣一襲、祿は給ふ

べからず。未（×未）だ其の故を知らず。宿侍す。

②③『小右記』天元五年四月廿八日条

▼a「殿（＝頼忠）に昨日の仰事の旨を申す事」

廿八日、己丑。

▲a 早朝、内より退出す。殿（＝頼忠）に参り、昨日の仰事の旨を申す。早く召問ふべきの由を奏せらる。

②④『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同年同月（＝天元五年四月）卅日（×廿二日）、禊祭の間、参らざる上卿（＝公卿）二人「文範（＝藤原）・重光（＝源）の恐懼の事。」

②⑤『小右記』天元五年四月卅日条

*1「太相府（＝藤原頼忠）、密々に競馬を覧ずる事」

*2「仁王会定」

*3「省試の間頭博士（×間頭博士）参らざるの旨の沙汰」

「秀才試の間頭博士伊行（＝源）、判ずる日に参らず、同を奉る事」

（目一八・秀才事）

*4「禊祭参らざる上卿、重ねて問はるる事（事×）」

*5「重光卿（＝源）の恐申。禊祭に参らざるに依る也」（↓②④）

▼a「小屋の焼亡」

卅日、辛卯。

*1 早朝、太相府（＝頼忠）、西京の佐比大道（×佐江大道）（＝道祖大路）に出で給ひ、密々（蜜々）に競馬の事あり。

*2 未時、参内す。左府（＝雅信）、臨時仁王会の日時勘文並びに僧名等を定奏せらる。

*3 式部権大輔輔正（×式部権大輔正）（＝菅原）、昨日の夕、文章得業生（＝高階信順）及び擬文章生の判文等、下官（＝実資）に付す。先づ太相

府に覧じ、今日奏聞す。「間頭博士伊行（＝源）、已に省（＝式部省）に参らず。里第に在り乍ら、唯、同（×問）じの由を申して奉る。理然るべからず。若し猶、問頭博士無く行なふべくば、先づ事由を奏して行なふべし。」者り。省官及び博士等召問ふべきの由、左府（＝雅信）に仰せらる。

*4 又、禊祭の日、納言等、障を称し、斎院に参らず。就中、民部卿文範・左衛門督重光、其の障、扱る所無し。「文範、障を申し、近衛府使の処に在り。重光、禊日の前日、参入すべきの由を申す。当日、使を付催すに、障の由を申す也。」仍りて召問ふべきの由、左府に仰せらる。

*5 重光参入す。避申す所有りと雖も、恐るべきの状を仰せられ了りぬ。文範は参入せず。

▲a 今夜、宿侍す。子時許、三条の辺の小屋焼亡す。

⑫永観元年（九八三）

①『小記目録』（第五・四月・御禊事）

永観元年四月廿一日、斎王（＝選子内親王）の御禊の事。

②『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

永観元年四月廿二日、警固の事。

③『日本紀略』永観元年四月廿二日条

廿二日、丁未。

警固。

今日、右大臣「兼家（＝藤原）、賀茂社に参らる。

④『小記目録』（第一五・摂政関白物語事）

永観元年四月廿三日、関白（＝藤原頼忠）の賀茂詣の事。

⑤『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

永観元年四月廿四日、賀茂祭の事。

⑥『日本紀略』永観元年四月廿四日条

廿四日、己酉。

賀茂祭。

⑦『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同年同月（＝永観元年四月）廿五日、親王（＝懷仁カ）の見物の事。

⑧『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

同（＝永観元年四月）廿五日、解陣げじんの事。

⑨『日本紀略』永観元年四月廿五日条

廿五日、庚戌。

解陣。

⑬ 永観二年（九八四）

①『小記目録』（第五・四月・御禊みそぎ事）

同（＝永観二年四月五日、御禊みそぎの前さき駈かけ定の事。

②『小記目録』（第五・四月・御禊みそぎ事）

同年（＝永観二年）四月十四日、御禊みそぎの事。

③『小記目録』（第五・四月・警固・解陣けいこ事）

同（＝永観二年四月十五日、警固けいこの事。

④『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝永観二年四月十七日、賀茂祭の事。

⑤『日本紀略』永観二年四月十七日条

十七日、丁酉。

賀茂祭。

⑥『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同年月（＝永観二年四月）十八日、祭使さいしの還立かえりだちの事。

⑦『日本紀略』永観二年四月十八日条

十八日、戊戌。

解陣げじん。

⑭ 寛和元年（九八五）

①『小右記』寛和元年四月廿日条

▼a「斎院さいいんの牛うしを奉る事」

廿日、甲午。

召あめしに依り、殿（＝藤原頼忠）に参る。仰せて云はく「昨日の夕方、

出納すいとう来たりて云はく『斎王（＝選子内親王）の牛を借り奉らむ。例に

依りて借し奉るべし。』者り。未だ其の心を得ず。仍りて返事を申

さしむ。所在の牛は二頭也。一頭は灸治きゅうじ。今一頭は甚だ短少にして、

彼の料に当つべからず。若し奉るべき時は、兼ねて仰事おほせごと有り、殊ことに

勞飼いたずまかふ者也。而るに忽しかちに此の仰おほせ有り。何ぞ奉仕ほうしせむ乎。奏聞そうもんの

後、又、仰事無し。陣外じんがいに参り、案内あんないを取るべし。』者り。参内さんないす。

藏人ざうじん举直（＝藤原）に相逢あいあひ、案内あんないを奏せしむ。仰せて云はく「昨日、

元命（＝藤原）云はく『例は、第一の人の牛を以て、斎王の車に懸け

しむ。若し其の障さわり有らば、次々の卿等きやうとうに仰せ。』者り。仍りて仰遣おほせつか

はす所也。』

②『日本紀略』寛和元年四月廿日条

廿日、甲午。

賀茂斎王「選子（＝選子内親王）」の禊みそぎ。

③『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

同（『永観』三年（『寛和元年』四月廿一日、警固の事。

④『小右記』寛和元年四月廿一日条

▼a「女騎の料の馬を覽ずる事」

+1「警固の事」(目↓③)

廿一日、乙未。

参内す。清涼殿に於いて、女騎の料の馬を覽ず。〔左（『左馬寮』

三、右（『右馬寮』三。〕余（『藤原実資、御前に候ず。右三足を以て、

女騎の料と為す。〔命婦・藏人（『女藏人・闌司等也。〕毛付の後

に注付し、馬寮の官人に下給ふ。

警固の事有り。左衛門督（『源重光、之を行なふ。先づ警固すべ

きの由、惟成（『藤原）を以て奏聞せしむ。晩景、罷出づ。

女騎の馬を覽ずるの後、左右馬寮の十列及び二坊の御馬等を覽ず。

臨時の仰事也。

⑤『日本紀略』寛和元年四月廿一日条

廿一日、乙未。

警固。

⑥『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（『永観』三年（『寛和元年』四月廿三日、明日の祭使（『源時中）等、

代官を用ふる事。

⑦『小記目録』（第一五・摂政関白物詣事）

同（『永観』三年（『寛和元年』四月廿三日、関白（『頼忠、賀茂に参る

事。

⑧『小右記』寛和元年四月廿三日条

+1「関白（『藤原頼忠、賀茂に参詣する事（事×）」(↓⑦)

+2「祭使（『近衛府使源時中）、代官（『平親信）を用ふる事」(↓⑥)

廿三日、丁酉。

早朝、殿（『頼忠）に参る。辰時許、賀茂に参り給ふ。巳時許より

陰雨。憚る所有るに依り、瑞垣の内に入らず。未時許、帰り給ふ。

此の間、甚雨。上官等、例禄を給はる。

+2つたえき
伝聞く。「祭使右近中将時中朝臣（『源、忽ちに霍乱（×霍乱）を

煩ふの由を奏せしむ。」と云々。左府（『源雅信 奏聞せらるると云々。

仍りて親信（近信）（『平）を以て、代官と為すと云々。又、内藏寮使

信輔（『藤原、明日忌日（『父頼忠。康保二年（九六五）四月廿四日卒去

の由を奏せしむ。仍りて大監物忠望（『橘）を以て、代官と為す。先

日、戒仰せらるる所なり。

入夜、参内し、宿侍す。

祭使所に、摺袴を送る。

（注）関白藤原忠平は祭日（酉日）に賀茂詣を行なっている。四月廿九日に三位

中将藤原義懐が賀茂社に参詣している（『小右記』。

⑨『日本紀略』寛和元年四月廿三日条

廿三日、丁酉。

終日、大雨。賀茂祭。右近衛府使中将源時中朝臣、忽ちに障を申

す。仍りて右衛門権佐平親信を以て、代官と為す。

今朝、太政大臣「頼忠」、賀茂社に参る。走馬等有り。少納言・

弁以下相従ふ。

⑩『小右記』寛和元年四月廿四日条

+1「陸奥の貢馬の事」(目一四・御馬御覽事)

▼a「院（『円融上皇）、銭を故典侍頼子の宅に遣はす事」

廿四日、戊戌。

陸奥守為長（『藤原、御馬一疋を貢ず。解文の中、四足を載す。

而るに上野国に於いて、強盜の為に、二疋を射殺せらる。今一疋、盗、執る。今日、御覽すべきの仰有り。下官(＝実資)奏せしめて云はく「警固の間、未だ御馬を覽ずるの事を見ず。今日、解陣の後、御覽するは如何。」仰せて云はく「猶、御覽すべし。」者り。又、左右馬寮の一疋等を覽ず。陸奥国司(＝為長)の貢馬、觀覽の後、左馬寮に給ふ。未時許、罷出づ。

召に依り、院(＝円融上皇)に参る。仰せて云はく「季明(＝藤原)進る所の錢の内の五十貫、故典侍頼子(＝紀三位か、源輔好の女か。三月十六日に死去)の宅に遣はすべし。」者り。秉燭、罷出づ。

⑪『日本紀略』寛和元年四月廿四日条
廿四日、戊戌。

解陣。

今日、酉刻、大蟹、承香殿の壇上に出遊ぶ。怪為り。

⑫寛和二年(九八六)

①『小記目録』(第五・四月・御禊事)
寛和二年四月廿日、御禊の事。

②『本朝世紀』寛和二年四月廿日条
廿日、戊午。

天晴。政無し。仍りて諸卿参らず。午後、参議大江斎光卿(卿×)(脱文)。

今日、賀茂斎院(＝選子内親王)の御禊の日也。権中納言藤原顕光卿、斎院に着して行事す。未刻、一条大路度り給ふ。

③『日本紀略』寛和二年四月廿日条
廿日、戊午。

賀茂斎王「選子(＝選子内親王)」の禊。

④『小記目録』(第五・四月・警固・解陣事)
寛和二年四月廿一日、警固の事。

⑤『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)
寛和二年四月廿三日、賀茂祭の事。

⑥『本朝世紀』寛和二年四月廿三日条
廿三日、辛酉。

天陰り、小雨降る。巳二刻より、天晴。此の日、賀茂祭の日也。

⑦『日本紀略』寛和二年四月廿三日条
廿三日、辛酉。
賀茂祭。

⑧『小記目録』(第五・四月・警固・解陣事)

同(＝寛和二年四月)廿四日、解陣の事。

(注1)『本朝世紀』寛和二年四月廿四日条に「廿四日、壬戌、天陰雨降、午後、権中納言(権×)藤原顕光卿参着左伏座、□日」とあり、解陣に関する記事か。

⑨『小記目録』(第一七・濫行事)

同(＝寛和)二年四月廿九日、右大将済時(＝藤原)見物の間、左京進信通(＝藤原)を凌轢(×磔)する事。

⑩永延元年(九八七)

①『小記目録』(第一五・摂政関白物語事)

永延元年四月十六日、摂政(＝藤原兼家)の賀茂詣の事。

②『小右記』永延元年四月十六日条

▼a「假」

*1「摂政(＝兼家)の賀茂詣」(①)

十六日、戊申。

▼¹ 假三。

*¹ 摂政（＝兼家）、賀茂に参る。公卿及び三位、合はせて十人祇候す。但し、左大将（＝藤原朝光）一人、御車後に候すと云々。自余は、皆、騎馬と云々。御共に候ずるの公卿。〔左大将・権大納言（＝藤原道隆）・藤中納言（＝藤原顕光）・春宮権大夫（＝藤原公季）・大藏卿（＝源時忠）・源宰相（＝源伊勢）・高三位（＝高階成忠）・修理大夫（＝藤原懷平）。〕

（注1）四月十三日に権大納言藤原道隆が、四月廿日に右大臣藤原為光が賀茂社に参詣している（『小右記』）。為光は五月廿一日にも参詣している（16⑧）。また、六月廿九日に摂政藤原兼家が左大臣源雅信・右大臣藤原為光以下を伴って、祈雨報賽のために賀茂社に参詣している（『小右記』、『小記目録』一五・摂政関白物語事、『日本紀略』、『扶桑略記』）。

③『小記目録』（第一七・闘乱事）

永延元年四月十七日、見物の間、右大臣（＝藤原為光）と右近中将道綱（＝藤原）・左少将道長（＝藤原）と打合ふ事。

④『小右記』永延元年四月十七日条

*1「右大臣（＝為光）見物し、右近中将〈道綱〉・左少将〈道長〉の車を打破らるる事」（↓③）

十七日、己酉。

*¹ 右大臣（＝為光）見物するの処、右近中将道綱・左少将道長乗車し、

御車の前を度るの間、雑色人等数多、石を執り、車を打つと云々。

彼の両重将（＝道綱・道長、摂政殿（＝兼家）に愁申すと云々。仍りて

彼の右府（＝為光）の家司亮時朝臣（＝宮道）を召遣はし、申文・過状を進らしむ。歩行して参入すと云々。又、打破らるる所の車、

即ち見せしめ給ふ。右府、暗に乗り、彼の殿（＝兼家）に参らると云々。然而相遭はれずと云々。

⑤『小記目録』（第一七・闘乱事）

同年同月（＝永延元年四月）十七日、昨日の見物の乱に依り、右府（＝為光）の家司等、召名を下さるる事。

⑥『小右記』永延元年四月十八日条

▼a「清水寺に参らざる事」

*1「昨日の見物の乱に依り、右府（＝為光）の家司等、召名を下さるる事」（目↓⑤）

十八日、庚戌。

▼^a 触穢の疑有るに依り、清水寺に参らず。

*¹ 昨日の事に依り、右府（＝為光）の家司亮時朝臣・経国朝臣（＝藤原カ・右衛門尉高年（＝文屋）・雑色長の官の史生助方（＝ウジ名不詳）・安部（×陪）近範等、召名を下さると云々。

⑦『小右記』永延元年五月十一日条

▼a「参对宣旨」

十一日、壬申。

▼^a 参内す。候宿す。修理権大夫（＝藤原安親）談じて云はく「右府（＝為光）の賀茂祭の召名、朝大夫已下、今日、参对宣旨を下さる。」と云々。

⑧『小右記』永延元年五月廿一日条

▼a「右大臣（＝為光）、賀茂に参らるる事」

▼b「右中弁資忠（＝菅原）亡逝く事」

▼c「祈雨奉幣」

廿一日、壬午。

▼^a 参内す。候宿す。右大臣（＝為光）、賀茂に参らる。右中将道綱・左少将道長・右少将道頼（＝藤原）、御共に候ずと云々。道綱・道長

の兩人、賀茂祭の間、彼の家の下人の為に陵せらる。三人の亜将（道綱・道長・道頼）に劍各一柄を志さると云々。若しくは祭の間の事を思ふに依る歟。如何。

▼今夜、右中弁資忠（菅原）亡逝くと云々。此の兩三日、瘧病（瘧病）の如く悩乱ると云々。殊に重く悩まず。而るに忽ちに亡逝くと云々。

▼丹生・貴布禰等の社、蔵人を遣はして奉幣す。雨の御祈に依る。

17 永延二年（九八八）

①『小記目録』（第五・四月・御禊事）

永延二年四月廿日、斎王（選子内親王）の禊の事。

②『日本紀略』永延二年四月廿日条

廿日、丙午。

賀茂斎王（選子内親王）の禊。

③『百練抄』永延二年四月廿日条

廿日（×廿三日）。

斎王「選子」の御禊。摂政（藤原兼家）、左府「雅信（源）」の棧敷に向かはる。院（冷泉上皇）の三「為尊」・四「敦通」兩親王、同じく渡御す。其の儲、数言ふべからず。各、贈物有り。摂政の帶する所の蒔絵の野剣を以て、左府に送らる。

④『日本紀略』永延二年四月廿一日条

廿一日、丁未。

警固。

⑤『小記目録』（第一五・摂政関白物詣事）

同（永延）二年四月廿二日、摂政（兼家）の賀茂詣の事。

（注1）『賀茂注進雜記』（乾・行幸官幣御幸附祈願靈驗等）にも見える。

⑥『日本紀略』永延二年四月廿二日条

廿二日、戊申。

摂政（兼家）、賀茂社に参詣す。

⑦『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

永延二年四月廿三日、摂政（兼家）の見物の事。

⑧『日本紀略』永延二年四月廿三日条

廿三日、己酉。

賀茂祭。

⑨『日本紀略』永延二年四月廿四日条

廿四日、庚戌。

解陣。

（注1）この年、四月十四日太政官符「応禁制諸祭使多随歩卒僕從着用綾羅緋絹衣袴事」が発給されている（『政事要略』巻七〇・糾彈雜事・從者員数）。

18 永祚元年（九八九）

①『小右記』永祚元年四月十九日条

▼a「御禊の雜事を催行なふ事」

十九日、己巳。

参内の間、大外記致時朝臣（中原）、宅（小野宮第）に來たりて云はく「摂政殿（藤原兼家）仰せて云はく「明日の御禊並びに祭日、斎院に参り、雜事を催行なはしめよ。就中、明日は、上卿（公卿）、皆、障有り、着行すべからざる也。右大將（藤原濟時）一人、指障無き也。而るに昨日より、大死穢有り、着行すべからず。他の上卿、皆以て輕服なり。明日、院（斎院）に参り、御禊の事を

催すべし。但し、祭日は、右大将参入すべし。相俱に行なふべし。』者り。則ち仰事を伝置きて退去すと云々。

②『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同(『永延』三年(『永祚元年』四月廿日、御禊の事。〔参議一人(『藤原実資』行なふ事。大弁(『藤原在国、禊祭を行なふ事。藏人所の前驅(『源信』・次第使の馬允(『文室重基』の座次の事。)

③『小右記』永祚元年四月廿日条

▼a「御禊の事〔参議一人行なふ事。大弁、禊祭を行なふ事。藏人所の前驅・次第使の馬允の座次の事〕」(目↓②)

廿日、庚午。

早朝、摂政殿(『兼家』)に参る。斎院に罷着するの由を申さしむ。仰せられて云はく「懈怠無く催行なふべし。」者り。

仍りて斎院に参る。〔已時許。〕客殿の座に着す。〔東向。北を以て、上と為す。座の後、班幔(×班幔)を旋す。上卿の座は高麗端畳、上に茵を敷く。参議の座は同じ端の畳、円座を敷く。今日、上卿(『藤原濟時)、障有りて参らず。〕

先是、右大弁在国(『藤原)、座に在り。〔件の座、母屋の坤(『西南)の角の間に在り。柱に迫り、高麗畳・円座等を敷く也。件の座、今(×个)、新に定めて敷く敷。大弁の座は槌ならず。太相府(『頼忠、大弁為るの時、此の事を行なはる。是、中弁より斎院の事を行なはるの間、俄に〔通祭の間、大弁に任ぜらる。事煩有るに依りて行なはる所也。其の外に、他の例無し。今、彼の例に依(依×)り、又、行なはる所也。而るに其の座は不詳なり。公卿、皆、西廂に在り。大弁、母屋に在るは、便無し。前驅の座の坤に当たる。〕前驅の座、母屋に在り。

其の饗、台盤を用ふ。南北に相対す。〔高麗端畳に、円座四枚を敷く。〕垣下の殿上人の座、北廂に在り。所(『藏人所)の衆の座、東廂に在り。外記の座、南廂に在り。

午時、藏人所より、左府(『源雅信)の牛・肥牛等〔山城・近江。〕を送らる。即ち引廻らしめ、之を見る。各頒行せしむ。

藏人所の前驅参入して着座す。雑色右近将監源信(『、次第使右馬允文室重基の下に参着す。右大弁在国、之、前々、論有る事也。藏人所の前驅六人、衛府の前驅の下に着す。然而、藏人所の前驅と雖も、又是、公家(『一条天皇)の差遣はさる所也。衛府の前驅の事と雖も、又、相同じ。何ぞ更に次第使の下に着する乎。邑上先皇(『村上天皇)の御時、各、所論有り。仍りて垣下の藏人所の衆の座に着す。信、垣下の座に着すべきの由、大弁(『在国)教諭す。仍りて起座し、垣下の座に着す。今、慮(×慮)を廻らすに、行事人、事を仰すべきに非ざる敷。

午終、事具し了りぬ。未始、御車を寄す。余(『藤原実資)及び弁列立す。梅樹の下に御す。藏人所の前驅、御車を寄す。

乗り給ひ了り、余及び弁・史等相率ゐて退出す。余見物す。是、先跡也。行事人、次第の違濫(×)を糾すを見むが為なり。未終許、斎王(『選子内親王)度り給ふ。見了りて即ち帰る。

今日の饗は内藏寮。上達部の前の高坏、大弁以下皆、執る而已。

(注) 藤原頼忠は、天曆十年(九五六)三月廿四日に権左中弁、天徳四年(九六〇)四月廿二日に右大弁、康保三年(九六六)九月十七日に左大弁に任じられ、安和元年(九六八)二月五日に中納言に任じられた(『公卿補任』)。史料上は大弁として賀茂祭に参入した例は見えない。

④『日本紀略』永祚元年四月廿日条

廿日、庚午。

賀茂斎王（＝選子内親王）の禊。上卿（＝済時）参らず。参議（＝実資）、之を行なふ。

⑤『日本紀略』永祚元年四月廿一日条

廿一日、辛未。

警固。

（注1）「廿二日、壬申」の誤りか。

⑥『小記目錄』（第五・四月・警固・解陣事）

永延三年（＝永祚元年）四月廿二日、大臣（＝左大臣源雅信）、警固を行なふ事。

⑦『小右記』永祚元年四月廿二日条

▼a「近衛府使の雑事」

▼b「大臣（＝雅信）、警固を行なふ事」（目↓⑥）

▼c「法皇（＝円融）、公家（＝一条天皇）の奉為に祈申さるる事」

廿二日、壬申。

▼早朝、大相国（＝頼忠）に参る。明日の祭使（＝近衛府使藤原公任）の雑事を見行なふ。晩頭、罷出づ。

▼今日、左府（＝符）（＝雅信）、警固の事を行なはる。納言（＝助言）

以上、皆、輕服なり。右大将（＝済時）一人、服に非ず。而るに、今日に至り、触穢有り。仍りて参行なはるる所と云々。

▼丑時許、賀茂に参る。騎馬。密々に参入す。法皇（＝円融）、公家（＝一条天皇）の奉為に、下官（＝実資）を以て、使と為し、祈申さるる事等有り。事趣、祭文に在り。余（＝実資）作る所也。先日、奏覽せしめたりぬ。御社に参り、先づ祭文を読申す。

次いで私の御幣を奉る。禰宜等に、膝突の料の布を給ふ。

⑧『小右記』永祚元年四月廿三日条

▼a「祭使所の饗」

▼b「賀茂祭」

廿三日、癸酉。

▼早朝、太相府（＝頼忠）に参る。頭中将（＝藤原公任）、祭使（＝近衛府使）と為て、西対（＝父藤原頼忠第四条第）より出立つ。已終、使・陪從着座す。先是、勘解由長官（＝藤原佐理）・修理権大夫（＝藤原安親）・修理大夫（＝藤原懷平）・余（＝実資）、座に在り。余、斎院の行事の為に、彼の院（＝斎院）に早参すべし。而るに太相国（＝頼忠）の命に依り、暫く此の座に在り。二献の盃を執る。

▼斎院に参る。茲より以前、右大将（＝済時）、斎院に参らる。飾馬・肥牛等を廻見る。未終許、御輿を寄す。右大将・余、御前（＝寢殿）に進み、梅樹の西の頭に列立す。（御前の巽の方に在り。）蔵人所の陪從等、手を御輿に懸く。乗り給ひたり、右大将・余・行事弁・史等相率ゐて出づ。將軍（＝済時）・余、見物す。未終、斎王（＝選子内親王）渡り給ふ。

伝聞く。「祭使所に、民部卿（＝藤原文範）・左兵衛督（＝源時中）訪到る。」

⑨『日本紀略』永祚元年四月廿三日条

廿三日、癸酉。

賀茂祭。

⑩『小右記』永祚元年四月廿四日条

▼a「還立」

廿四日、甲戌。

▼早朝、太相府（＝頼忠）に参る。午時、中将（＝公任）還来たる。四位・五位等、迎盃を執ること、例の如し。使・陪從の飯、先づ居

(×) 厄。う。〔権議有り、居(×) 厄。うる所也。〕着する後、一献。了りて粉熟を居う。今日、只、求子を舞ふ。自余の事、恒の如し。左衛門督(＝源重光・右衛門督(＝藤原道長)・勘解由長官(＝佐理)・修理大夫(＝懷平)・三位中将(＝道綱、使の所(＝還立所)に在り。摂政殿(＝兼家)の御馬の口付の舍人の男、絹二疋を給はると云々。頗る過差也。

⑪『日本紀略』永祚元年四月廿四日条

廿四日、甲戌。解陣。

(注1) 二月廿八日に摂政藤原兼家が内大臣藤原道隆以下を伴って賀茂社に参詣している(『小右記』、『小記目録』第一五・摂政関白物語事、『日本紀略』、『賀茂注進雜記』乾・行幸官幣御幸附祈願靈驗等)。また、九月廿五日に摂政藤原兼家が公卿を伴って賀茂社・北野社に参詣している(『小右記』、『小記目録』第一五・摂政関白物語事)。

⑫正暦元年(九九〇)

①『小記目録』(第五・四月・御禊事)

永祚二年(＝正暦元年) 四月十三日、斎王(＝選子内親王)の禊の事。

②『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同年月(＝永祚二年(＝正暦元年) 四月) 十三日、長官(＝斎院司長官)の輕服に依り、代官を用ふる事。

③『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

永祚二年(＝正暦元年) 四月十六日、賀茂祭の事。

④『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同年月日(×十六日) (＝永祚二年(＝正暦元年) 四月十六日)、内大臣(＝藤原道隆) 輕服にして、同宿乍ら、祭使を出立たる事。

(注1) この年、奢侈を禁止する四月一日宣旨「応制止賀茂祭使等装束儲二具一井從者數多令レ着違法衣袴上事」「定使典侍車并前驅數事」が発給されている(『政事要略』卷六七・糾彈雜事・男女衣服并實用雜物、卷七〇・糾彈雜事・從者員數)。

⑬正暦二年(九九一)

①『小記目録』(第五・四月・御禊事)

正暦二年四月五日、御禊の前驅定の事。

②『日本紀略』正暦二年四月五日条

五日、甲戌。

故從四位上平朝臣珍材に從三位を贈る。彼の男右大弁惟仲朝臣(＝平)の上奏に依る也。之を尋ねべし。

今日、賀茂斎内親王(＝選子内親王)の禊の前驅・次第使等を定む。

(注1)「可尋之」は割注か。

③『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同年(＝正暦二年) 四月十三日、御禊の前驅の行成(＝藤原、青朽葉)の下襲を着する事。

④『日本紀略』正暦二年四月十三日条

十三日、壬午。

賀茂斎王(＝選子内親王)の禊。

⑤『日本紀略』正暦二年四月十四日条

十四日、癸未。

警固。

⑥『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

正暦二年四月十六日、賀茂祭の事。

⑦『日本紀略』正暦二年四月十六日条

十六日、乙酉。

賀茂祭。

⑧『日本紀略』正暦二年四月十七日条

十七日、丙戌。

解陣。

②1 正暦三年（九九二）

①『日本紀略』正暦三年四月十九日条

十九日、壬午。

賀茂齋王（＝選子内親王）の禊。

②『日本紀略』正暦三年四月廿日条

廿日、癸未。

警固。

③『小記目録』（第一五・摂政関白物詣事）

同年（＝正暦三年）四月廿一日、摂政（＝藤原道隆）の賀茂詣の事。

④『日本紀略』正暦三年四月廿一日条

廿一日、甲申。

摂政「道隆」、賀茂社に参詣す。

（注1）四月廿五日にも、内大臣藤原道兼が賀茂社に参詣している（『日本紀略』）。

⑤『日本紀略』正暦三年四月廿二日条

廿二日、乙酉。

賀茂祭。

（注1）『栄花物語』（巻四・みはてぬゆめ）に左近衛中将藤原齊信が近衛府使を勤めたことが見える。

⑥『日本紀略』正暦三年四月廿三日条

廿三日、丙戌。

解陣。

②2 正暦四年（九九三）

①『小右記』正暦四年四月一日条

▼a「穢に依り、諸祭及び御禊を延引する事」

▼b「旬の事」

一日、己未。

▼a 内府（＝藤原道兼）の穢、昨日、摂政殿（＝藤原道隆）より入交る。諸

卿及び上下、皆、悉く相触る。来たる十二日に迄る。仍りて彼の

日以前の諸祭の延引の由、大外記致時朝臣（＝中原）来談す。御禊、

同じく延ばすべしと云々。

▼b 晩に喚使来たり、参内すべきの由を告ぐ。然而、障を申して参ら

ず。今日、諸卿参らず。仍りて召す所也と云々。旬の事に依る歟。

（注1）穢は三月卅日に東三条院南院が焼亡した（『小右記』『権記』『日本紀略』）

ことによるものか。

②『小右記』正暦四年四月六日条

▼a「摂政殿（＝道隆）に唐鞍の執物の具等を借す事」

六日、甲子。

▼a 摂政殿（＝道隆）の使知章朝臣（＝藤原）、唐鞍の執物の具等を借ら

る。鞭袋・笏袋・胡床等三種、使に付して奉り了りぬ。

③『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝正暦）四年四月十二日（十二日×）、齋王（＝選子内親王）の御禊の事。

④『小右記』正暦四年四月十二日条

* 1 「齋王（＝選子内親王）の御禊の事」（目↓③）

十二日、庚午。

* 1 御禊と云々。齋王（＝選子内親王）、申時許、河原（＝鴨川）に向かふ

と云々。行事は左衛門督顕光（＝藤原）・参議（参議×）公任（＝藤原）。

⑤ 『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

正暦四年四月十三日、警固の事。

⑥ 『小右記』正暦四年四月十三日条

* 1 「警固の事」（目↓⑤）

▼ a 「右兵衛督（＝源伊陟）、平緒を返送る事」

十三日、辛未。

* 1

為孝（＝藤原）来たりて云はく「今日、警固なり。権大納言「伊周

（＝藤原）、上（＝上卿）為り。」と云々。

▼ a 右兵衛督（＝源伊陟）、平緒を返送る。昨日、息子の前駆の料、借

す所也。

（注1）源伊陟の男には伊行・頼之・伊頼・延漢らがいる。ここは正暦四年に左兵

衛佐に在任している伊頼か（『権記』正月九日条、『小右記』正月十三日条、

『本朝世紀』十一月一日条）。

⑦ 『日本紀略』正暦四年四月十三日条

十三日、辛未。

警固。

⑧ 『小記目録』（第一五・摂政関白物語事）

同（＝正暦）四年四月十四日、摂政（＝藤原道隆）の賀茂詣の事。

⑨ 『小右記』正暦四年四月十四日条

▼ a 「摂政（＝道隆）の賀茂詣の事」（目↓⑧）

十四日、壬申。

▼ a 摂政（＝道隆）、賀茂に参らる。大納言伊周、中納言時中（＝源）・

道頼（＝藤原）、参議（一）道綱（＝藤原）・惟仲（＝平）、三位泰清（＝源）

等騎馬して前駆すと云々。大納言道長（＝藤原）・参議（一）安親（＝

藤原）乗車して追従すと云々。前々の人々、今日、賀茂に参らるる

の時、此の如き事無し。若しくは是、永の御願歟。大納言済時

（＝藤原）・中納言顕光・参議（一）懷忠（＝藤原）等、殿（＝道隆、東三条

院に参後れ、御共に候ぜずと云々。

（注1）六月廿三日に内大臣藤原道兼が賀茂社に参詣している（『小右記』、『小記目

録』第一五・大臣以下物語事）。

⑩ 『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝正暦）四年四月十五日、祭使（＝藤原隆家）立つ事。

⑪ 『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同日（＝正暦四年四月十五日）、齋王（＝選子内親王）、西終に度り給ふ事。

⑫ 『小右記』正暦四年四月十五日条

* 1 「祭使（＝隆家）立つ事」（目↓⑩）

* 2 「齋王、西終に度り給ふ事」（目↓⑪）

十五日、癸酉。

* 1 早朝、刑部丞為信（＝ウジ名不詳）を以て、摺袴を摂政殿（＝道隆）

に奉らしむ。午時許、彼の殿（＝近衛府使隆家の父道隆の東三条院）に参る。

西対出立つ。母屋、簾を懸く。鉤（×剣）を以て、簾を上ぐ。先例、

簾を懸けざるに、奇為り奇（々）為（々）り。摂政出でず。但し、同

じ対の西面に在り。烏（＝烏帽子）・直衣等を着す。公卿達に相逢ふ。

礼節を知らざるに似る。大納言朝光（＝藤原）、其の所に入る。相共

に飲酒す。極めて便無き也。

未時許、使（右中将隆家（＝藤原））参内す。此の間、摂政、将曹

公高（＝多）を召し、衣を脱ぎて給ふ也。大納言朝光・道長・伊周等、衣を脱ぎ、重行（＝下毛野）・兼時（＝尾張）等に賜ふ。自余の公卿^{おう}応ぜず。

大納言朝光、下官（＝藤原実資）を招く。同車して見物す。斎王（＝選子内親王、西終、度り給ふ。藏人所の前駟等、暗に投じて見えず。

今日、祭所（＝祭使所）に会するの公卿は、大納言朝光・道長・伊周、中納言公季・時中・伊陟（＝源・道頼、参議（一）道綱・安親・懷忠・惟仲、三位泰清等也。今日、使の所（＝祭使所）の作法、軽忽^{きやうこつ}の事多し。又、例に背く事等有り。馬副・手振等、紫の褐衣を着す。其の色（×■）、極めて浅し。縦ひ、美色と雖も、既に前例に乖く。（撰政不出、但在同対西面、着烏・直衣等、相逢公卿達、似礼節不知也、大納言朝光入其所、相共飲酒、極無便也。）

（注一）末尾の割注は上文に同文があり、朱書で「裏書」とある。

⑬『権記』正暦四年四月十五日条

△A「賀茂祭」

十五日、癸酉。

天皇（＝一条）、南殿（＝紫宸殿）に御し、使等の飾馬^{かざりうま}を覽ず。大納言伊周卿、御前に候ず。左少将（×左小将）明理（＝源）・右中将実方

（×実正）（＝藤原）出居すと云々。

⑭『日本紀略』正暦四年四月十五日条

十五日、癸酉。

賀茂祭。

⑮『小記目錄』（第五・四月・警固・解陣事）

同（＝正暦四年四月）十六日、解陣^{げじん}の事。

⑯『小右記』正暦四年四月十六日条

▼a「修理大夫（＝懷平）の亡室^{ぼうしつ}の七々の法事^{ほうじ}」

▼b「祭日に使々の飾馬・手振・取物等を御覽ずる事」

*1「解陣の事」（目↓⑮）

十六日、甲戌。

修理大夫（＝懷平）の亡室^{ぼうしつ}の七々の法事^{ほうじ}所（松崎寺（＝円明寺））に向かふ。

▼b 中納言時中、三位泰清・輔正（＝菅原）等会合し、相共（×方）に相談^{だん}じて云はく「昨日、主上（＝一条天皇）、南殿に出御し、祭の男女の使々（□々）の飾馬・手振・取物等を御覽ず。日華門より入り、月華門より出づ。日暮に依り帰度らず。但し、使に至りては、度らず。大納言伊周一人、御前に候ず。出居右中将実方・少将（＝左少将）明理、弓箭^{きゆうせん}を帶して候ず。」と云々。又、談じて云はく「隨身^{ずいじん}及び手振・馬副等、数に依り、御前を度る。」と云々。日記を見るに、隨身度（×座）るの由を見ず。又、手振・馬副等を見ず。数に依りて度る由、又々尋見て注付^{しるし}すべき也。

*1 為孝云はく「今日、解陣。左金吾「顯光」、上（＝上卿）為り。」と云々。

（注一）この藤原懷平の妻は二月廿八日に逝去した源保光の女か（『小右記』『権記』廿九日条）。

（注二）*1の部分は小字で記されている。

⑰正暦五年（九九四）

①『本朝世紀』正暦五年四月五日条

・1「御禊^{おみそぎ}の前駟^{さきげさだめ}定」

五日、丙戌。

午後、大納言藤原朝光卿、左仗座（＝陣座）に参着す。来たる十三日の斎内親王（＝選子）の御禊の前驅を差定めらる。参議参らざるに依り、右中弁源俊賢朝臣を以て、参議代と為す。

②『日本紀略』正暦五年四月十三日条
十三日、甲午。

賀茂斎王「選子（＝選子内親王）」の禊。

③『本朝世紀』正暦五年四月十四日条

・1「兵部録参らざるの代官の事」

・2「警固の事」

十四日、乙未。

天晴。今日、擬階奏有り。上卿權大納言藤原伊周卿（卿×）行なはる。式部輔代は陰陽頭大春日益満。兵部輔・録参らず。仍りて兵部輔代は散位和氣兼信。録は代官を取らず。行なはるること、已に畢りぬ。

次いで賀茂祭の警固の召仰有り。左近權少将源明理・右近将監大春日春近・左兵衛少尉常澄成淵・右兵衛權少尉藤原延常。左右衛門佐、各、故障を申して参らず。先例有るに依り、四府を以て召仰せらる。

④『日本紀略』正暦五年四月十四日条
十四日、乙未。

擬階奏。

又、警固有り。

⑤『小記目録』（第一五・摂政関白物詣事）

同（＝正暦）五年四月十五日、関白（＝藤原道隆）の賀茂詣の事。（公卿の騎馬の事。）

（注）年次は記されていないが、『大鏡』（中・内大臣道隆）に小一条大将（藤原濟時・関院大将（藤原朝光）とともに還立の見物を行なったこと、賀茂詣を行なったこと）が見え、『大鏡』（裏書）には「正暦五年四月十五日丙申、関白被参賀茂社」とある。賀茂詣のことは『古事談』（二・臣節・道隆愛酒）にも見え、『古本説話集』（卷一八・中関白道隆沈酔事）に類話がある。

⑥『本朝世紀』正暦五年四月十五日条

・1「賀茂詣」

十五日、丙申。

天晴。上卿参らず。仍りて政無し。

今日、関白（＝道隆）、賀茂に参り給ふ。彼の里第（＝東三条第）、諸卿、皆、参ると云々。

⑦『日本紀略』正暦五年四月十五日条

十五日、丙申。

関白（＝道隆）、賀茂社に参らる。

⑧『本朝世紀』正暦五年四月十六日条

・1「賀茂祭」

十六日、丁酉。

天晴。今日、賀茂祭也。仍りて中納言藤原顕光卿・参議平惟仲卿、齋院に参着す。件の祭事を行なはる。

⑨『日本紀略』正暦五年四月十六日条
十六日、丁酉。

賀茂祭。

⑩『本朝世紀』正暦五年四月十七日条

・1「解陣」

十七日、戊戌。

天陰り、雨降る。上卿遅参す。政無し。

午後、中納言藤原顕光卿参入し、警固の解陣の事を行なはる。亥二刻、退出す。

⑪『日本紀略』正暦五年四月十七日条
十七日、戊戌。
解陣。

⑭長徳元年（九九五）

①『小記目録』（第五・四月・御禊事）

長徳元年四月十八日、斎内親王（＝選子）の御禊の事。（上卿（＝源伊勢）参らざるに、左中弁忠輔（＝藤原）、門外に於いて催行なふ。穢に依り、院（＝齋院）の中に参らず。」

②『日本紀略』長徳元年四月十八日条
十八日、甲子。

賀茂斎王「選子（＝選子内親王）」の禊也。上卿権中納言源伊勢卿、傍親の服に依り参らず。参議藤原実資卿、之を行なふ。今日、前驅等、関白家（＝道隆）の穢（＝四月十日に道隆が薨去）に触るるの由、申さしむと雖も、之を許すこと無し。斎王の典、堀河を過ぐるの間、雷電霹靂す。時人云はく「穢の氣の人、供奉するの所致也。」頃時、晴る。畢りて、斎王還御の後、雹降る。大きき、栗の如し。

（注1）『賀茂斎院記』（選子内親王）にも見える。

③『日本紀略』長徳元年四月十九日条

十九日、乙未。
警固。

④『日本紀略』長徳元年四月廿日条

廿日、丙申。

大祓。賀茂祭に依る也。

（注1）『小記目録』第五・六月・臨時大祓に「長徳元年四月廿日、大祓事、（依内裏穢也）」とある。

⑤『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

長徳元年四月廿一日、賀茂祭の事。

⑥『日本紀略』長徳元年四月廿一日条
廿一日、丁酉。

賀茂祭也。太皇太后宮「昌子（＝昌子内親王）」・皇后宮「遵子（＝藤原」・中宮（＝藤原定子）・東宮（＝居貞親王）等、穢に依り、使を立てられず。近衛使、穢の由を申すに依り、以て右兵衛佐藤原義理、之を勤む。今日、花山法皇、御見物す。

（注1）『園太暦』観応元年（一一五〇）十月五日条の勘例の中に「長徳元四廿一、賀茂祭、（諸宮依穢、不被立使）」と見える。

⑦『日本紀略』長徳元年四月廿二日条

廿二日、戊戌。
解陣。

今日、宣旨に云はく「関白「道隆」の葬送、来たる廿四日也（＝四月十日薨去。九条右大臣（＝藤原師輔）の例に准じ、絹百疋、調布二百段、商布等給（×行）ふべし。」者り。

（注1）藤原師輔は天徳四年（九六〇）五月四日に薨去（『日本紀略』『公卿補任』）。『日本紀略』五月六日条に「其日、右大臣葬家、給絹百疋、調布二百段、商布五百段、鉄（脱文アルカ）云々」と見える。

⑭長徳二年（九九六）

①『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同(＝長徳)二年三月廿七日、禊祭の料物の未進の国、解却すべき事。

(注1) 三月廿八日に石見守藤原実明・長門守源輔良が解任されているが、『日本紀略』、関連があるか。

②『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同年(＝長徳二年)四月一日、御禊の前駆定の事。

③『小右記』長徳二年四月一日条

▼a「例幣」

*1「平座の事」

*2「御禊の前駆定の事」(目②)

*3「弁一人、三献を役する事」

▼b「上卿、敷政門より退出する事」(目五・四月・旬事)

一日、辛未。

例幣を賀茂に奉る。

*1 昨今、物忌。参内せず、障の由、外記に触れしむ。晩頭、内(＝

内裏)の召有り。即ち参入す。頭(＝藏人頭)行成(＝藤原)伝仰せて云

はく「侍従の見参奏せしむべし。」者り。陣(＝陣座)に着す。装束

(×■)(＝装束使)の弁候ぜず。仍りて権左少弁為紀(＝菅原)に仰(×

佐)せ、宜陽殿の座を敷かしむ。

*2 此の間、大外記致時朝臣(＝中原)、右大臣(＝藤原道長)の消息を伝

へて云はく「院(＝東三条院藤原詮子)の御悩に縁り参入するの間、御

禊の前駆を定申すこと能はず。定奏すべし。」者り。左大弁(＝平惟

仲)・右兵衛督(＝源俊賢)、陣に候ず。大外記致時を召し、御禊の文

書等を奉るべきの由を仰す。右兵衛佐道順(＝高階)、公家(＝一条天

皇)の勘事有り。時方(＝源)、任国の与不、未だ成らず。此の間、

勅定に随ふべき由、行成を以て奏せしむ。仰せて云はく「道順に

至(×奉)りては、差はすべからず。時方(×也方)は京に在りと云々。

与不の案内を問はしめて(×含)差はすべし。文、其の事有らば、

代官を差はすべし。」者り。余(＝藤原実資)答へしめて云はく「最初

代官は便無き歟。時方、已に洛下に在り。程限の内、公役を勤仕す

るに、何事か有らむ哉。」仰せて云はく「申す所然るべし。時方を

差はすべし。」者り。即ち南座に移着す。外記、造酒の代官を申す。

文書・硯等を召す。左大弁執筆す。件の定文、管を召し、定文を入

れ、外記守成(＝能登)を以て、先づ右府(×符)(＝道長)に奉る。

*3 宜陽殿の饗饌弁備し了りぬ。外記の帰来たるを待つの間、深更に

及ぶべし。仍りて中間、宜陽殿に着す。三献。「権弁為紀、他の弁

無きに依り、三献役し了りぬ。」了りて侍従を召さむと欲するに、

候ぜざるの由と云々。仍りて更に召さず。汁物(×許物)を居えしむ

了りて箸を下ろす。四献を催さしむるの処、造酒司、早く以て罷去

れば(×志)、召さしむと雖も参入せず。ただ奇怪也。

仍りて見参・録の目録を召す。外記相門(＝林)、見参・録の目録

(目六)を書杖に挿し、陣の砌の溝に候ず。「小庭に候ずべし。奇(×

寄)に足る。」余目す。称唯して膝突に着し、見参等を奉る。一々

披見して返給ふ。更に本の如く杖に挿し、砌に立つ(初所池座。御

所に進み、行成を以て奏聞せしむ。御覽じ了りて返給ふ。本座に復

す。外記、見参・目録を返奉す。之を取る。外記、空杖を持ちて退

出す。此の間、弁二人、座に在り。少納言候ぜず。弁(説孝(説

■)を召し、見参・目録(目六)等(×出)を給ふ。少納言参らざる

に依り、見参、之を相加へて賜ふ所也。外記、陣の硯を撤す。事由

を仰せて返置かしむ。了りて宜陽殿の座(×坐)に赴く。陣座に還

着す。良久しきの後、外記、右府(×符)より帰来たる。件の禊日

の定文、頭行成を以て奏せしむ。即ち返給ふ。又、吉書きつしよを加納くわえおさむ。
▼撤へせしめり、敷政門ふせいもんより退出す。旬の日、件の門より退出するの例也。〔時は亥刻。〕

今日、録事ろくじを仰せず。然るべきの人無きに依る。又、見参けんさんを留めず。参入すべきの人少なきに依る（依少可参入之人）。近代の例也と云々。

④『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同年月（＝長徳二年四月）三日、禊の出車いだしくるま・童女の馬等どうにょを定むる事。

⑤『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝長徳二年四月）五日、御禊の前驅さわり、障を申す事。

⑥『小右記』長徳二年四月七日条

▼a「檢非違使補任」

*1「右大臣（＝道長）、官奏に候ずる事」

▼b「擬階奏（奏×）の事」（目五・四月・擬階奏事）

▼c「禊祭の行事の参議の事」

▼d「石見国の禊祭料」

七日、丁丑。

▼a 参内す。先づ右府（×符）（＝道長）の直廬じきろ（＝宜陽殿東廂か式御曹司か）

に参る。雜事ざじを申す。志宗我弘範死去する所なり。志伴忠信を以て、使序奏しちようのそうを賜ふ。即ち頭中將（＝藤原齊信）を以て奏聞そうもんせしむ。禊日の前驅左衛門尉維時（×候時）（＝平）、故障を申す。事、掲焉けえんに依りて奏聞せしむ。天許てんきよ有り。則光（＝橘）を以て、其の替かわりと為す。廻すまわち大外記（記×）致時朝臣に仰す。

*1 今日、右大臣（×左大臣）（＝道長）、官奏かんそうに候ず。（今年、初めての奏也。）左衛門督（＝藤原懷忠）・左大弁（＝惟仲）・左兵衛督（＝藤原公

任・春宮権大夫（才大夫）（＝藤原誠信）・右兵衛督（＝俊賢）参入す。

▼擬階（＝擬階奏）の事、左衛門督、之を行なふ。其の事の以前に退出す。

▼禊祭の行事の参議の事、奏聞せしむ。右兵衛督、勅許ちふきよ有り。即ち外記に仰す。

▼d「石見国の禊祭料の解文げぶん、奏聞せしむ。大炊寮に納めしむべし。」者り。説孝朝臣（＝藤原）に下す。

⑦『日本紀略』長徳二年四月十二日条

十二日、壬午。

賀茂斎王「選子（＝選子内親王）」の禊。

⑧『日本紀略』長徳二年四月十三日条

十三日、癸未。

警固。

⑨『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝長徳）二年四月十五日、賀茂祭の事。

⑩『日本紀略』長徳二年四月十五日条

十五日、乙酉。

賀茂祭。

⑪『日本紀略』長徳二年四月十六日条

十六日、丙戌。

解陣。

26 長徳三年（九九七）

①『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同年（＝長徳三年）二月九日、斎院（＝選子内親王）の禊祭の料米を定

申す事。

②『小右記』長徳三年二月廿三日条

* 1「齋院（＝選子内親王）の神事の奏、下す間の事」

▼ a「行事弁を替ふる事」

廿三日、戊午。

* 1 左府（×符）（＝藤原道長。土御門第）に参る。齋院の奏の事を申す。

「玄蕃頭頼節（頼時）（＝源）を以て、齋院を修造す。其の功に依り、

受領に任ずべき事。」続いて参内す。蔵人弁為任朝臣（＝藤原）を以

て、齋院の申請の事を奏せしむ。「相定めて仰下すべし。」者り。又、

同院（＝齋院）、神殿の御装束の料の絹、大宰進る所の練用の絹を以

て給ふべき事を申す。「件の絹、円教寺の会料（＝長徳四年正月廿二日に

行なわれる開眼供養会料か）に宛つべし。仍りて宛て給ふこと能はず。

但し、諸国に召して賜ふべき歟。」者り。

▼ a 又、同院の事を行なふの弁説孝（×孝。朝臣（＝藤原）、一月の服用

り。仍りて此の間、右少弁（×左少弁）朝経（＝藤原）を以て、院の事

を行なはしむべきの由奏聞せしむ。已に天許有り。即ち為任朝臣

（＝藤原）に仰下し了りぬ。晩頭、退出す。

③『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝長徳）三年四月四日、齋院の作を巡検する事。

④『小記目録』（第一四・官奏事）

同（＝長徳）三年四月五日、官奏並びに御禊の前駆定の事。

⑤『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝長徳）三年四月十三日、齋王（＝選子内親王）の御禊の事。

⑥『日本紀略』長徳三年四月十三日条

十三日、丙午。

御禊。

⑦『日本紀略』長徳三年四月十四日条

十四日、丁未。

警固。

⑧『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同年同月（＝長徳三年四月）十六日、賀茂祭の事。

⑨『小右記』長徳三年四月十六日条

* 1「右衛門督（＝藤原公任）の牛童、花山院より捕籠めらるる事」

「花山院の下部、別当公任の牛童等を、擲むる事」（目一七・闘乱事）

十六日、己酉。

* 1 右衛門督（＝藤原公任）示送りて云はく「宰相中将（＝藤原齊信）同車

し、左府（＝道長）より退出するの間、華山院（＝左京一条四坊三町）の

近衛（＝近衛大路）の面に、人数十人、兵仗を具して出来たる。搦を

持たしめ乍ら、牛童を捕籠む。又、雑人等走來たりて飛礫す。其の

間の濫行、云ふべからず。」者り。驚奇しむこと、極無し。

⑩『日本紀略』長徳三年四月十六日条

十六日、己酉。

賀茂祭。

⑪『小右記』長徳三年四月十七日条

▼ a「華山院の濫行の事」（目一七・闘乱事）

▼ b「還鑾」

* 1「右衛門督（＝公任）の濫行に依り、檢非違使等、花山院を囲み、

下手人を申す事」

* 2「檢非違使、華山院を囲む事」（目一七・闘乱事）

* 2「蔵人頭（＝藤原行成・藤原正光）、祭使の少将の神館の宿所に向かふ

は然るべからざる事」

十七日、庚戌。

修理大夫（＝藤原懷平）同車し、見物の為に知足院（智足院）の辺に向かふ。華山法皇、其の辺に御す。未だ見物に及ばず、中間に還御す。未だ其の由を知らず。左府（×苜）（＝道長）、又、彼の辺に坐（×座）す。仍りて余（＝藤原実實）、左府の見物所に進み、車を並べ、之を見る。宰相中将（＝齊信）・勘解由長官（＝源俊賢）、左府（×苜）の車に在り。左府（×苜）、花山院の濫吹の事を示さる。或云はく「件の事、左府より奏聞せらる。院（＝花山院）の人々（×又々）を追捕すべき仰有り。神館に在るの使（＝検非違使）の官人等を召遣はすの間、側に漏聞有り。法皇、車を懸けて還御す。」と云々。

見物し畢り、家（＝小野宮第）に帰る。束帯して、祭使所（所×）に詣づ。源大納言（＝源時中）・民部卿（＝藤原懷忠）・平中納言（＝平惟仲）・大藏卿（＝藤原時光）・修理大夫・右衛門督（＝公任）・左大弁（＝源扶義）・右大弁（＝藤原忠輔）（右大弁・宰相中将・勘解由長官会合す。三献の後（後×）、還祿を給はる。申剋許、各分散す。

勘解由長官・雲上の人々来会ふ。蹴鞠有り。又、小食を羞む。

或者云はく「検非違使等、勅に依り、華山院を囲み、去夕の濫行の下手人を申すと云々。此の間、慥なる説を得難し。院（＝花山院）の奉為に、太だ面目無し。積悪、之、致し奉る也。」と云々。

或云はく「下手人等、若し遂に出ださしめ給はざらば、院内を捜検すべきの由、綸旨有り。此の事、左衛門尉則光（＝橋）、〔検非違使。又、彼の院の乳母子（＝母は右近尼・右近内侍）也。〕彼の院に通ず。」と云々。噉々たる説、記すべからず。

伝聞（×転聞）く。「祭使の少将の神館の宿所、藏人頭二人（＝藤原

行成・藤原正光）及び雲上（×電上）の人々七八人來訪す。衣を脱ぎ、近衛府の官人已下に被く。」と云々。藏人頭、此の処に向かふは、往古聞かざるの事也。末代の事、太だ輕忽、輕忽（々々）。

〔注〕花山法皇の院司らの濫行については、『百練抄』四月十七日条に「検非違使等依勅退華山院、責申去夕濫行下手人、是右衛門督公任・宰相中将齊信同車、自左府退出（退×）之間、於路次、花山院人数十人致濫行之故也、」とある。『大鏡』（中・太政大臣伊尹）、『大鏡』裏書「或人記云（経記）」にも見え、『古事談』（一・王道后宮・花山院賀茂祭開乱事）に関連する記述がある。

⑫『日本紀略』長徳三年四月十七日条

十七日、庚戌。

解陣。

⑬『小右記』長徳三年四月十八日条

*1「花山院、下手人を出ださしむる事」

「花山院、下手人を進らるる事」（目一七・闘乱事）

十八日、辛亥。

*1 公誠朝臣（＝平）並びに下手の者四人、去夜、華山院より出（出×）ださる。検非違使、事由を奏聞す。「公誠朝臣に至りては候ぜしめよ。又々、追捕すべし。」者り。

〔注〕四月廿七日に右大臣藤原顕光が病により賀茂社参詣を中止したことが『小記目録』（一五・大臣以下物語）に見える。

⑭長徳四年（九九八）

①『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝長徳四年四月三日、禊祭の上卿、斎院に於いて雑事を定むる事（事×）。

②『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝長徳）四年四月四日、齋院の作事料の諸国召物の事。

③『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同年月（＝長徳四年四月）十一日、御禊の前驅等の故障奏聞せらるる事。

④『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝長徳四年四月）十八日、齋王（＝選子内親王）の御禊の事。

⑤『日本紀略』長徳四年四月十八日条

十八日、丙午。

御禊。

⑥『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同年月（＝長徳四年四月）十九日、祭の行事弁説孝（＝藤原、俄に服親

に依り参るべからざる事。

⑦『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

長徳四年四月十九日、上卿参らざるに依り、警固延引する事。

⑧『日本紀略』長徳四年四月十九日条

十九日、丁未。

警固。

（注1）警固は廿日に延引されている。

⑨『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

同（＝長徳四年四月）廿日、警固を行なはるる事。〈申日〉。

⑩『小記目録』（第一五・摂政関白物詣事）

長徳四年四月廿日、左大臣（＝藤原道長）の賀茂詣の事。

（注1）正月廿八日・四月廿八日にも左大臣藤原道長が賀茂社に参詣している（『日本紀略』、『小記目録』第一五・摂政関白物詣事）。

本紀略』、『小記目録』第一五・摂政関白物詣事。

⑪『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝長徳四年四月）廿一日、賀茂祭の事。〈齋院に於いて、穀倉院の

預と舞人との口論の事。〉

⑫『日本紀略』長徳四年四月廿一日条

廿一日、己酉。

賀茂祭。

⑬長保元年（九九九）

①『小記目録』（第五・四月・御禊事）

長保元年四月九日、御禊の前驅定の事。

②『本朝世紀』長保元年四月九日条

九日、辛酉。

今日、梅宮祭也。

午後、左大臣（＝藤原道長・参議藤原公任卿、内裏に参入す。賀

茂祭（×賀義御所）の事を定（定×）められて（×彼）退出す。

③『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同年月（＝長保元年四月）十八日、齋内親王（×齋王親王）（＝選子内親王）

の御禊の事。

④『本朝世紀』長保元年四月十九日条

十九日、辛未。

午後、中納言平惟仲卿参入す。左仗座（＝陣座）に着す。賀茂祭の

間の諸陣の警固の事を召仰せらる。仍りて諸衛の官人等を召す。而

るに右衛門并びに右兵衛府の官人等参らず、故障を申せば、候ずる

に随ひ、左衛門権少尉平仲方・左兵衛少尉（名脱カ）・左兵衛権少尉

（×右兵衛権少尉）（名脱カ）・左近衛権将監（×左近衛権少将監）尾張兼時を

召仰す。事訖り、各退出す。未刻、□□□□□。

⑤『日本紀略』長保元年四月十九日条

十九日、辛未。

警固。

⑥『小記目録』(第一五・摂政関白物語事)

同年(＝長保元年)四月廿日、左大臣(＝道長、賀茂に参る事。

⑦『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

長保元年四月廿一日、賀茂祭の事。

⑧『本朝世紀』長保元年四月廿一日条

廿一日、癸酉。

是の日、賀茂祭也。

⑨『日本紀略』長保元年四月廿一日条

廿一日、癸酉。

賀茂祭。

⑩『本朝世紀』長保元年四月廿二日条

廿二日、甲戌。

午後、中納言藤原実資卿・平惟仲卿、参議藤原懷平卿、左仗座に

着す。警固の解陣の事を行なはる。退出す。

⑪『日本紀略』長保元年四月廿二日条

廿二日、甲戌。

解陣。

(注1)『政事要略』(卷六九・糾弾難事・致敬拜礼下馬事)に、『延喜式』(式部省上・4節会行列条)を引用し、「長保元年四月廿二日、賀茂祭警固解陣、(仰上卿太皇太后宮大夫藤原実資卿)・右中将源頼定(四位)・左少将藤成房(五位)・依四位右中将列上、或人云、猶依府次第、雖五位左少将可列上云々、此説頗訛也」と見え、出居将が源頼定と藤原成房であったことがわかる。

29 長保二年(一〇〇〇)

①『御堂関白記』長保二年四月一日条

▲A「御禊の前駆定」

▲B「旬の平座」

▲C「平野臨時祭の宣命」

一日、戊申。

陣座(＝一条院)に着す。御禊の御前(＝前駆)を定む。

次侍従を補す。左大弁(＝藤原忠輔、之を書く。中務丞藤原公則

(公)に下す。旬(＝孟夏旬)の平座の事、他の上(＝公卿)無きに依り、

之を行なふ。

平野臨時祭の宣命、使宣孝朝臣(＝藤原)に賜ふ。

(注1)▲C「平野臨時祭宣命」の部分について、古写本は挿入符で「臨時」を傍

書し、抹消の勾点がある。

②『権記』長保二年四月一日条

△A「平野祭」

△B「御禊の前駆定」

一日、戊申。

平野祭也。使は右衛門権佐宣孝。行事藏人は忠隆(＝源)。左大臣

(＝藤原道長)、仗下(＝一条院の陣座)に於いて、今日(今日×)の見参を

奏せらる。

又、御禊の前駆の事定申さると云々。

此の夕、彈正宮(＝為尊親王。東院)に参る。亦、院(＝東三条院藤原詮

子)に参る。参内す(＝一条院)。宿す。

③『小記目録』(第五・四月・御禊事)

長保二年四月六日、禊祭の日の参議、上臈の次第に依るべき事。

④『御堂関白記』長保二年四月九日条

▲A「女使の従（＝従者）に布を賜ふ事」

九日、丙辰。

▲A「内裏」の女使の従（＝従者）に、布を賜ふ。

⑤『権記』長保二年四月十日条

△A「御禊の前驅の右兵衛佐（＝藤原重尹）を詣問ふ事」

十日、丁巳。

▲A「御禊の前驅の右兵衛佐（＝藤原重尹）を詣問ふ事」
罷出づ。小兒等を世尊寺に将向かふ。民部卿（＝藤原懷忠）の第に詣づ。右兵衛佐（重尹（＝藤原懷忠の男）の明日の御禊の前驅の事を問ふ。先年、余（＝藤原行成）、左兵衛佐と為て、此の役を供するの時、戸部（＝懷忠）、藏人頭・左大弁を以て過問はる。旧意を思ふに依りて詣問ふ所也。

次いで参内す。宿す。

（注1）藤原行成は寛和二年八月十三日に左兵衛権佐に任じられ、正暦四年正月九日に正四位下に叙された『公卿補任』。この時、左兵衛権佐を解任したと考えられる。藤原懷忠は永延元年十一月十一日に左大弁に、同二年二月廿七日に藏人頭に、同三年七月十三日に参議に任じられた『公卿補任』。なお、正暦五年八月廿七日に権中納言に任じられるまで左大弁を兼任した。従って、行成が左兵衛佐で、懷忠が藏人頭兼左大弁であったのは永延二年か同三年の賀茂祭ということになる。

⑥『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同年月（＝長保二年四月）十一日、斎王（＝選子内親王）の禊の事。

⑦『御堂関白記』長保二年四月十一日条

▲A「御禊」

十一日、戊午。

▲A「見物を為す。」

⑧『権記』長保二年四月十一日条

△A「御禊」

十一日、戊午。

▲A「御禊」
罷出づ。左府（＝道長。土御門第）に参る。未剋許、右中弁（＝源道方）と同車して見物す。左馬頭（＝藤原相尹）、相共に、之を見る。一条大宮の辻（＝一条大路と大宮大路の交差点）の列見、年来の例也。而るに一条院（＝内裏。左京北辺二坊一町）に御すの間、便宜無きに依り、左近（＝左近馬場）の馬駐の南に於いて列見す。斎院（＝選子内親王）の供奉の者、大宮路（＝大宮大路）に於いて下馬し、堀河橋の東に到り、更に騎馬す。〔即ち宣旨也。〕

⑨『日本紀略』長保二年四月十一日条

十一日、戊午。

賀茂斎内親王「選子（＝選子内親王）」の禊。

⑩『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

長保二年四月十三日、上卿参らず、警固の召仰無き事。

⑪『御堂関白記』長保二年四月十三日条

▲A「賀茂詣に参らざる事」

十三日、庚申。

▲A「例は賀茂に参る。而るに身の假有るに依りて参らず。」

⑫『権記』長保二年四月十三日条

△A「右府（＝藤原顕光）、賀茂に詣で給ふ事」

十三日、庚申。

▲A「右府（＝藤原顕光）、賀茂に詣で給ふと云々。朝、罷出づ。」

⑬『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝長保）二年四月十四日、賀茂祭の事。

⑭『御堂関白記』長保二年四月十四日条

▲A「賀茂祭」

十四日、辛酉。

△A

東宮（＝居貞親王。東三条院）の召有るに依りて参る。一小君（＝敦明親王）に、物見の者の御車を奉る。右府（＝藤原顯光、之に同じ）

宮（＝中宮藤原彰子）の御方（＝一条院東北対）の東の細殿に御渡り（宮御方東細殿御渡）、物を御覧す。殿上人候すと云々。

（注1）『栄花物語』（巻六・かかやく藤壺）には賀茂祭があったことのみ見える。

⑮『権記』長保二年四月十四日条

△A「明豪僧都の車宿の事」

△B「賀茂祭の藏人所陪従・飾馬御覧の事」

十四日、辛酉。

△A

内（＝一条院）に候す。賀茂祭也。明豪僧都の車宿、高く棚を構ふ。

東北の陣中より、之を露見ゆ。仍りて藏人所の小舎人を遣はし、此の由を示す。而るに承引せず。仍りて右衛門府生林重親に仰せて撤却せしむ。是、事由を奏して行なふ所也。重親、先づ仰旨を奉はり、彼の車宿に到り、案内を示さしむるに、敢へて承引すること無し。

重親、時に更（×還）に騎馬し、埒（＝左近馬場）の辺に立ち、隨身等をして撤却せしむ。見物の為に登居する所の女房・道俗等乱落つと云々。此の事に依り、彼の僧都、東三条院（＝藤原詮子）に愁申す。重親を勘問せらるべきの由、面々に告ぐる事有り。然而、

件の棚、御所（＝一条院）より近見ゆるの内なり。僧の車宿、已に制有りて禁ずる所也。加之、案内を奏（奏×）し、勅を承はりて行なふ所也。其の旨、亦、失錯に非ず。果たして重親を召問はるる所無し。亦、仰する所も無し。

△B 此の日、藏人所の陪従並びに使等の飾馬を御覧す。権中将成信朝臣（＝藤原）、御前に候す。右中弁（＝道方）と同車して見物す。帰参す。

宿侍す。

（注1）僧侶の車宿に対する禁制は、『新抄格勅符抄』に長保元年（九九九）七月廿七日（×廿五日）太政官符が見える。

⑯『日本紀略』長保二年四月十四日条

十四日、辛酉。

賀茂祭。

⑰『小記目錄』（第五・四月・警固・解陣事）

十五日、解陣の事。

⑱『御堂関白記』長保二年四月十五日条

▲A「還立」

十五日、壬戌。

△A 女（＝源倫子）と同車して見物す。

⑲『権記』長保二年四月十五日条

△A「還立」

十五日、壬戌。

△A 成房少将（＝藤原）と同車して見物す。

桃園（＝世尊寺）に帰到る。疲を補ふの間、権中将（成信）・藤中将（実成（＝藤原）・四位少将（兼隆（＝藤原）・能通朝臣（＝藤原）・藏人式部丞則隆（＝橘）・右衛門尉兼宣（＝源）、同じく来会ひて共に飯ふ。訖りて各退帰る。

余（＝行成）と藤中将と同車し、東宮（＝居貞親王）に参る。

十五日、壬戌。

解陣。

30 長保三年（一〇〇一）

①『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝長保）三年四月五日、禊祭を奉行する人、四月の内、他の公事を奉行せざる事（事×）。

②『権記』長保三年四月九日条

△A「申文」

△B「御禊の前駈定」

九日、庚戌。

参内す。左大臣（＝藤原道長）参らる。右大史文信（＝石城）、文二枚を申す。前阿波守忠良（＝源）申す勘出文、紀伊国の鈎匙文等也。

左大弁（＝藤原忠輔）参らざるに依る。仍りて予（＝藤原行成）、申文に候ず。

△B 亦、御禊の前駈を定申さる。罷出づ。

伊予守（伊与守）（＝源兼實）と同車し、藤相公（＝藤原懷平）の御許に詣づ。東院（＝為尊親王）に参る。罷出づ。

③『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同年月（＝長保三年四月）十日、御禊の前駈定、并びに図書助忠理（＝源）を以て、齋院（＝齋院司）の次官の代と為す事。

④『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝長保三年四月）十七日、御禊の事。〈御禊の京職、代官を用ふる事。〉

⑤『権記』長保三年四月十七日条

△A「御禊」

△B「陪膳」

十七日、戊午。

御禊也。御物忌に依り、牛井びに所（＝藏人所）の陪従等を覽ぜず。

権左中弁（＝藤原説孝）来示して云はく「雑色定輔（＝藤原、日者、痼病を煩ふ。然而、公役を闕かざる為に、平癒を相待つ。今日、當日也。而るに束帶せしむるの間、已に発動す。即ち行事藏人頼定（＝源、此の由を奏す。仰せて云はく『今日、縦ひ懈怠すと雖も、祭日、奉仕せしむべし。但し、前駈の人、此の如き慮外の障有るの時は、垣下を以て奉仕せしめよ。』而るに今日、垣下一人も参らず。」と云々。此の如きは、之を何為む。即ち事由を奏せしめ、少監物惟弘（＝橋）を召遣はしりぬ。西刺許に見えず。齋院（＝選子内親王）の催に依り、未刺許、前駈等を遣はしりぬ。

⑥『日本紀略』長保三年四月十七日条

十七日、戊午。

齋院（＝選子内親王）の禊。

⑦『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

同（＝長保）三年四月十八日、警固の事。

⑧『日本紀略』長保三年四月十八日条

十八日、己未。

警固。

⑨『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝長保）三年四月廿日、賀茂祭の事。

⑩『権記』長保三年四月廿日条

△A「賀茂祭見物」

△B「賀茂祭使」

廿日、辛酉。

△A 右中弁（＝源道方）・式部丞（＝源兼宣）と同車して見物す。是、偏に見物の興有るに非ず。或云はく「禊日、見物の車は財に百兩許なり。往還の者は幾も非ず。疫癘の滋蔓に依り、天亡の者多し。事に触れ、無常の觀を催す。」と云々。仍りて見物し、車を計ふるに、二百兩を過（X至）ぐべからず。

△B 内蔵寮使は助平朝臣惟忠、右近衛府使は少将源朝臣雅通、右馬寮使は権助平朝臣孝義、中宮使は大進大江朝臣清通、東宮使は少進高階朝臣業遠。次第使は左馬助源朝臣守隆・右馬允藤原是光。藏人所の陪従は雑色藤原頼任・雑色藤原定輔・雑色藤原頼職・源伊公・藤原実行・藤原時重。又、典侍源明子朝臣、使の巡に当たる。而るに縫殿頭貞清（＝源）の喪に依り、俄に供奉せず。仍りて掌侍平朝臣寛子、代官と為り、其の役を勤む。即ち典侍の設くる所の雑具を以て、之を用ふ。其の前駆は、散位藤原朝臣義忠・紀朝臣孝親・带刀平頼孝・藤原宗扶。

（注1）源明子と源貞清は光孝源氏。貞清は師世の男で、光孝天皇の男是茂（実父は昇。嵯峨源氏で、融の男）の孫。明子は信明の女で、光孝天皇の男国紀の曾孫。藤原説孝の妻となった。

⑪『日本紀略』長保三年四月廿日条

廿日、辛酉。

賀茂祭。

⑫『権記』長保三年四月廿一日条

△A「還立」

△B「閑院を見る事」

廿一日、壬戌。

△A 又、昨日の人々と同車して見物す。

△B 帰宅の便に、閑院（＝左京三条二坊一五・一六町）の故大納言（＝藤原朝光の家を見る。今、内府（＝藤原公季）買領せらる。

（注1）閑院は、藤原冬嗣、基経、致忠、兼通、朝光、朝経、公季と伝領された。

⑬『日本紀略』長保三年四月廿一日条

廿一日、壬戌。

解陣延引す。

⑭『小記目錄』（第五・四月・警固・解陣事）

同（＝長保三年四月）廿三日、戌日の解陣、上卿参らず延引する事。

⑮長保四年（一〇〇二）

①『小記目錄』（第五・四月・御禊事）

同（＝長保四年四月十五日、御禊の事。

②『権記』長保四年四月十七日条

△A「出立所」

△B「御禊見物」

十七日、壬午。

甚雨。未剋許、頗る晴有り。春宮大夫殿（＝藤原道綱）に詣づ。故

二条殿（＝藤原道兼）の子（子×）兵衛佐兼綱（＝藤原）、彼の殿（＝道綱の

一条第か）より出立つ。仍りて問ふ為也。

左府（＝藤原道長）に詣づ。山井大納言（＝藤原道頼）の子兵衛佐忠経

（＝藤原、此の殿（＝土御門第）より出立つ。

△B 三位中将（＝藤原兼隆）・頭中将（＝源経房）と同車して見物す。已に

秉燭に及ぶ。

(注1) 藤原兼綱は道綱の養子となる。藤原忠経の父道頼は道隆の男で、兼家の養子。道頼薨去後、兼家の男である道長の庇護下にあったために土御門第を出入所とした。なお、³²⑦参照。

- ③『日本紀略』長保四年四月十七日条
十七日、壬午。

賀茂斎院(「選子内親王」)の禊。

- ④『小記目録』(第五・四月・警固・解陣事)
同(「長保」)四年四月十八日、警固の事。

- ⑤『日本紀略』長保四年四月十八日条
十八日、癸未。
警固。上卿参らざるに依り延引す。

- ⑥『権記』長保四年四月十九日条
△A「祭使(「近衛府使藤原経通」)に白の褂を送る事」

十九日、甲申。
△A「はうしゆ」
芒種。五月節(「四月十九日から五月十八日」)。祭使所に、白の褂二重を送る。〔□□一具。〕

- ⑦『日本紀略』長保四年四月十九日条
十九日、甲申。
警固。

- ⑧『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)
同(「長保」)四年四月廿日、賀茂祭の事。

- ⑨『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)
同年月日(「長保四年四月廿日」)、近衛府の舞人の袴摺らず。陪従の装束、例の如し。又、歌笛の声無し。諒闇(「藤原詮子。長保三年閏十二月

廿二日崩御)の事に依る也。

- ⑩『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同日(「長保四年四月廿日」)、主上(「一条天皇」、中宮(「藤原彰子」)の御方(「一条院東北対」)に渡御し、密々(蜜々)に祭を御覧する事。

- ⑪『権記』長保四年四月廿日条

△A「祭使出立」

△B「賀茂祭見物」

△C「賀茂祭使」

廿日、乙酉。

△A「鴨祭。已剋許、藤宰相殿(「藤原懷平」)に詣づ。使を訪ふ事、右衛門督(「源憲定」、示さるるの事有り。

△B「権左中弁(「源道方」と同車し、密々に見物す。申剋、一条大宮

(「一条大路と大宮大路の交差点」)に列見す。

△C「内蔵寮使は頭(「経房」(「源」)、近衛府使は左少将経通(「藤原」)、馬寮は左権頭兼資朝臣(「源」、中宮使は権大進高雅朝臣(「源」、東宮使は頼親(「源」)。「大進頼光朝臣(「源」)の代と云々。」

見物し了りて、金吾(「懷平」)を送る。家に帰る。

(注1) ³²⑦参照。

- ⑫『日本紀略』長保四年四月廿日条
廿日、乙酉。
賀茂祭。

- ⑬『権記』長保四年四月廿一日条

△A「物忌」

△B「還立」

△C「祭日、鬩乱有る事」

廿一日、丙戌。
△^A 今明、物忌也。

△^B 右兵衛佐資平（＝藤原）出来たる。小兒と同車し、宰相殿（＝懷平）に下る。左府（＝道長）に詣づ。見物に出で給ふ（見物出給）。三位中将（＝兼隆）と見物す。

△^C 昨夕、頭中将（＝経房）の牧童と右衛門尉忠隆（＝源。檢非違使）の隨身と、鬭乱の事有りと云々。

⑭『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

同（＝長保四年四月）廿二日、解陣の事。

⑮『日本紀略』長保四年四月廿二日条
廿二日、丁亥。

解陣。昨日、上卿参らざるに依り延引す。

⑯『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝長保四年四月）廿五日、山城介淑光（＝紀）の僕従の過差に依り召問はるる事。

⑰『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同日（＝長保四年四月廿五日）、淑光（×叔光）帶劍せざる事。

⑱『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同年（＝長保四年）五月一日、山城介淑光帶劍せず、賀茂祭に供奉する事、召問ふべき宣旨を下さるる事。

⑲『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同年（＝長保四年）八月廿五日、淑光、祭日に帶劍せざる事。

⑳長保五年（一〇〇三）

①『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝長保）五年四月五日（×十五日）、御禊の前駆定の事。

②『權記』長保五年四月五日条

△^A 「右大将（＝藤原実資）の着陣」

△^B 「官奏」

△^C 「御禊の前駆定」

△^D 「中宮（＝藤原彰子）の弓の負態」

五日、甲子。

△^A 参内す（＝一条院）。右大将（＝藤原実資）、加階の後、初（初×）めて着陣す。申文せしむ。

△^B 左大臣（＝藤原道長）、初めて官奏有り。

△^C 御禊の前駆を定申さる。

△^D 中宮（＝藤原彰子）の御方（＝一条院東北対）に於いて、弓の負態有り。

射す。弼宰相（＝藤原有国）、懸物纏頭す。

③『本朝世紀』長保五年四月五日条

五日、甲子。

権中納言藤原信卿・参議源俊賢卿（源×）、左衛門陣（＝建春門）の座に参着す。庁（＝外記庁）に着して政（＝外記政）す。次いで侍従所に移着す。

次いで右仗座（＝一条院寝殿東北廊）に着す。午刻、左大臣（＝道長・権大納言藤原実資卿・大納言同懷忠卿・中納言同公任卿仰せられて云はく「官奏有るべし」。即ち左大史惟宗允政、件の奏文、文刺に挿す。大臣（＝道長、殿に昇る。

官奏畢るの後、左大臣、陣座に還着す。大外記滋野善言を召して仰せて云はく「賀茂祭の禊日也。前駆の例文奉るべし。」者り。即ち仰旨を承はりて還出づ。件の文書等、宮に納め、大臣の御前に

置き奉る。例に任せ、件の前驅を定めらるること已に了りぬ。事畢り、上卿（＝道長）以下退出す。

④『権記』長保五年四月六日条

△A「御禊の前驅・次第使」

六日、乙丑。

△A 左衛門佐兼貞（＝藤原）・右衛門佐周家（＝藤原）・左兵衛佐伊成（＝藤原）・右兵衛佐（右々々）資平（＝藤原）・左衛門尉扶忠（＝藤原）・右

（＝右衛門尉）序政（＝ウジ名不詳）・左兵衛尉惟佐（＝藤原）・右（＝右兵衛尉）頼孝（＝藤原）。次第使は左馬助守隆（＝源）・右允（＝右馬允）頼信

（＝藤原）。

⑤『小記目録』（第一五・摂政関白物語事）

同（＝長保）五年四月八日、左大臣（＝藤原道長）の家、俄に馬斃有る事。

⑥『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同年月（＝長保五年四月）十一日、御禊の事。侍従頼通（＝藤原）、左衛門佐代を勤めしめ給ふ事。

⑦『権記』長保五年四月十一日条

△A「御禊」

十一日、庚午。

△A 兵衛佐（＝伊成）、御前驅（□）を奉仕すべし。装束して相共に院

（＝齋院）に参る。行事上卿（＝隆家）・宰相、北面の西階より上り、

東面の座に着す。左右の衛（＝衛門）の佐（＝兼貞・周家）、障を申すに

依り、侍従頼通を以て、左の代と為し、内匠頭惟道（＝藤原）を以て、

右の代と為す。

去年、一条北小路（＝現在の今出川通）より、禊日（＝四月十七日）、路

と為す。祭日（＝四月廿日）、定有り、内裏（＝一条院）の北の路（＝一条

大路）よりとす。今年、内裏の北の路を用ふと定□□む。

行列し、御車を寄する間、上卿以下、庭中に列立す。寝殿の東一

間の程（□）也。

（注）『大鏡』（中・右大臣師輔）、『古本説話集』（上・大齋院事）は、藤原頼通が

「兵衛佐」として御前（前驅）を勤めたとするが、頼通は兵衛佐には任じられ

ていない。

⑧『本朝世紀』長保五年四月十一日条

十一日、庚午。

此の日、賀茂齋王（＝選子内親王）の御禊也。例に依り、前驅は諸

衛の佐・尉等。但し、一条院の北辺に、群集す。

⑨『日本紀略』長保五年四月十一日条

十一日、庚午。

齋院（＝選子内親王）の禊。

⑩『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

長保五年四月十二日、頼通、齋院より御衣を給はしむる事。

⑪『小記目録』（第一五・摂政関白物語事）

同年同月（＝長保五年四月）十二日、昨日の馬斃の穢に依り、左大臣

（＝道長）の賀茂詣停止する事。

⑫『本朝世紀』長保五年四月十二日条

十二日、辛未。

休也。午後、權中納言隆家卿、左仗座（＝一条院寢殿西北廊）に参る。

外記伴為利を召す。参入して膝突に着す。上卿（＝隆家）仰せられて

云はく「警固の召仰有るべきの諸衛の具否、例の如くせよ。」退出

す。

(注1) 一条院は西礼の邸第であるため東西を逆にし、内裏において左仗座で行なわれる儀が右仗座で行なわれた。『権記』長保五年正月十四日条「但以^レ西代^レ東^レ」、『小右記』寛仁元年(一〇一七)十一月十九日条「一条院儀相違内裏^レ以東儀^レ為^レ西儀^レ」、十一月廿二日条「内裏儀出入東二間、此院以西替^レ東、仍用^レ西二間^レ」とある。

⑬『小記目録』(第五・四月・警固・解陣事)

同(=長保)五年四月十三日、警固の事。

⑭『本朝世紀』長保五年四月十三日条

十三日、壬申。

午後、中納言藤隆家卿参入し、右仗座(仗[×])に着す。少外記伴為利を召す。仰せて云はく「警固の事有るべし。諸衛の具否は如何^レ」者^レり。即ち申して云はく「諸衛誠(誠^レ)め候ぜしむ」者^レり。上卿(=隆家)仰せて云はく「内豎の如きを^レ召さしめよ」仰^レ承はりて還出づ。内豎を召仰す。須臾、右近陣(=右仗座)より入り、庭に立つ。上(=隆家)宣る。「諸衛を召さしめて参らしめよ。」右近将監山弘忠・左衛門少尉藤扶忠・右衛門少尉源忠隆・右兵衛権佐藤能通・右兵衛少尉中原為象等、西中門より入り、小庭に並立つ。即ち上卿仰せられて云はく「例に任せて警固(×言上固)すべきの由なり。」各称唯して退出す。本陣に進みて召仰畢りぬ。但し、右近衛の次将・将監(×監)、各、障を称して参らず。之に因り、五府を以て召仰す。畢りて上卿、各、退出す。

⑮『日本紀略』長保五年四月十三日条

十三日、壬申。

警固。

⑯『権記』長保五年四月十四日条

△A「賀茂祭」

△B「賀茂祭使」(裏書)

十四日、癸酉。

齋院に参り、客殿に着す。先是、右將軍(=藤原実資)坐す。弁・外記・史等行事(○)す。未剋斜(=未終剋、御輿を寄す。上(=隆家・宰相、庭中に列立すること、先日^レの如し。御し了りぬ。上、共に一条(=一条大路)の馬場(=左近馬場)の亭の前に立ちて見物すること、例の如し。

裏書に云はく「東宮使は少進業遠朝臣(=高階、中宮使は亮正光朝臣(=藤原、馬寮使は右助貞亮朝臣(=源^カ、近衛使(使[×])は右中將実成朝臣(々々)(=藤原、藏使(×藏)(=内藏寮使)は頭為義(○)朝臣(=橘。典侍は弁。」

(注1)『年中行事秘抄』(四月・有三酉時用中西例事)に「長保五」とある。

⑰『本朝世紀』長保五年四月十四日条

十四日、癸酉。

此の日、賀茂祭也。例に依り、諸宮の使々供奉(×奉供)すること、常の如し。但し、一条院の北面に依り、大宮大路より始め、堀川に至るは、下馬して渡る。但し、女使は下馬せず、並びに車等、例に任せて渡る者なり。

⑱『日本紀略』長保五年四月十四日条

十四日、癸酉。

賀茂祭。但し、一条院の北陣、大宮大路より堀川に至るは、供奉の人は下馬す。女使は下馬せず。

⑲『小記目録』(第一七・闘乱事)

同年(=長保五年)四月十五日、雑色定輔(=藤原、齋院に於いて、鞭を以て、雑色頼任(=藤原)を打落とす事。

②〇『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

同（＝長保五年四月）十五日、解陣の事。

②一『本朝世紀』長保五年四月十五日条

十五日、甲戌。

午後、権中納言藤隆家卿、右仗座に参着す。時に上卿（＝隆家）、少外記伴為利を召して仰せて云はく「解陣の諸衛の具否は如何。」者り。爰に為利、諸衛、皆具する由を申す。即ち上卿仰せられて云はく「内豎を召さしめよ。」称唯して退出す。諸衛、随ふは則ち、左近少将藤原朝臣経通・右近少将藤原公任・左衛門大尉矢田部為忠・右衛門大尉忠信（＝伴）・左兵衛権佐藤原朝臣能通・右兵衛少尉中原為象。西中門より入り、小庭に立つ。時に上卿仰せられて云はく「解陣すべきの由なり。」各称唯して退出す。本陣に到り、召仰せりぬ。事畢りて上卿退出す。

②二『日本紀略』長保五年四月十五日条

十五日、甲戌。

解陣。

②三『小記目録』（第一五・摂政関白物語事）

同年同月（＝長保五年四月）廿一日、左大臣（＝道長）、賀茂社に参り、東遊・競馬を奉る事。

②四『権記』長保五年四月廿一日条

△A「賀茂詣」

△B「競馬の手結」

廿一日、庚辰。

左府（＝道長）に詣づ。今日、賀茂詣也。辰刻、諸卿以下参入す。即ち詣で給ふ。祓物。次いで下家司二人、十列。次いで左右の競馬、

召使・官掌、御前の弁・少納言、御車、家司二人、使（＝檢非違使）の官人・陪従等。次いで上達部の車。下御社の祓戸に於いて祓ふ後、

御社（＝下御社）に於いて奉幣す。御馬を廻らすこと三匝。次いで左右十列を廻らすこと一匝。東遊の後、馬場に就く。左勝つ。陵王（×龍王。次いで納蘇利（×助□利）。次いで上（＝上社）に着し給ふ。下（＝下社）に同じ。奉幣の間、下社は御剣を解き、上（＝上社）は解かず。上（＝上社）は又、三輪酒有り。戌刻、還り給ふ。

裏書に云はく「一番。〔左、二の鹿毛。〕右将監播磨（播磨）保信。右、〔黒毛。〕右将曹多武文。〔持。〕二番。〔左、三の鹿毛。勝。〕左将監茨田重方。右、左府生多為奉。三番。〔左、菱喰。〕右将曹下毛野公助（□助）。右、右府生中臣嘉数。勝。四番。」

②五『本朝世紀』長保五年四月廿一日条

廿一日、庚辰。

天晴。此の日、左大臣（＝道長）、賀茂上下の社頭、自らの願を果たさむが為に参詣す。諸卿、同じく彼の社に参らる。

②六『小記目録』（第一七・闘乱事）

同年同月（＝長保五年四月）廿四日、定輔・頼任を召問はれ、並びに勘事に処せらるる事。

③三寛弘元年（一〇〇四）

①『御堂関白記』寛弘元年四月四日条

▲A「東三条第・枇杷殿等を見る事」

▲B「御禊の前駆定の上卿の事」

四日、丁巳。

▲Aがしんじょう 東三条・枇杷殿（＝左京一条三坊一五町。当時の道長の居所）等を見る

(「造営中の兩第を突検した」。

▲B 善言朝臣(「滋野」)を以て、右府(「藤原顯光」)に御祓(「御禊」)の御前(「前驅」)申定むべき由を示送る。即ち命せらる。「明日参りて申行なふべし(参明日可申行)」。者り。是、輕服に依り示す所也。

(注1) 輕服は二月七日に道長の異母妹尚侍藤原綏子が薨去したことによる(「御堂関白記」「権記」「日本紀略」)。

②『御堂関白記』寛弘元年四月五日条

▲A「御禊の前驅定」

五日、戊午。

▲A 右府(「顯光」)、御祓の御前を定むと云々。

③『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同(「長保」)六年(「寛弘元年」)四月十七日、御禊の事。(外記・史等の肥牛の論の事)。

④『御堂関白記』寛弘元年四月十七日条

▲A「御禊」

十七日、庚午。

▲A 午上、内(「内裏」)より罷出づ。後に右衛門督(「藤原齊信」)来たりて云はく「仰事(「一条天皇」)あり。『祭の間に調ふる童・雑色人等、供し奉る者、数多隨身すること制止すべし。』者り。『早く官人(「検非違使官人」)を召して仰せらるべし。』者り。又、『見物の者、車新なる有り。同じく制すべき也。』

家(「道長家」)の馬を申す者は、左衛門佐兼貞(「源」)・右衛門佐孝忠(「藤原」)・左衛門尉頼信(「藤原」)・右衛門尉守親(「紀」)・左兵衛佐朝任(「源」)所(「藏人所」)の御前(「前驅」)は、木工允俊孝(「橘」)・平明範等也。

見物を為す。

⑤『権記』寛弘元年四月十七日条

△A「石井(「為尊親王室」)に詣づる事」

△B「御禊」

十七日、庚午。

▲A 石井(「為尊親王室」)に詣づ。

▲B 御禊。左府(「道長」)・枇杷殿に参る。侍從中納言(「藤原隆家」)と同車して見物す。

⑥『日本紀略』寛弘元年四月十七日条

十七日、庚午。

賀茂斎王(「選子内親王」)の禊。

今日、軒廊御卜。去る十三日、鹿入る事に依る也。

(注1) 鹿は大藏省から出て右衛門陣に入って打ち殺された(「御堂関白記」「日本紀略」四月十三日条)。

⑦『日本紀略』寛弘元年四月十八日条

十八日、辛未。

警固。

⑧『御堂関白記』寛弘元年四月十九日条

▲A「由祓」

十九日、壬申。

▲A 早朝より、雨下る。申時許、東河(「鴨川」)に出でて祓す(「由祓」)。

賀茂に参らざる由なり(「輕服のため」)。

⑨『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(「長保」)六年(「寛弘元年」)四月廿日、賀茂祭の事。(中宮(「藤原彰子」)・扇を斎院(「選子内親王」)に献ぜらる。御使、禄を給はらずに逃

去る事。」

⑩『御堂関白記』寛弘元年四月廿日条

▲A「賀茂祭使出立」

▲B「賀茂祭見物」

▲C「馬を申す人」(裏書)

廿日、癸酉。

近衛府使(「左近衛中将源頼定」)の許に、舞人(「まいびと」)の下襲(「したぎさね」)送る。

中宮(「藤原彰子」)より、斎院(「選子内親王」)に扇(「あふぎ」)を奉らると云々。

典侍(「ないしすけ」)の許に、金作(「かねづくり」)の二車(「にくるま」)並びに一車の料(「いちのくろま」)の牛(「うし」)及ぼす。

▲B 春宮大夫(「藤原道綱」)の一条(「一条第」)左京北辺二坊五町(「かへ町」)に渡りて見物(「みぶつ」)す。栈敷(「さじき」)(「栈木」)有り。

一宮(「敦康親王」)、物を御覧(「みとら」)ず(「一宮物御覧」)。是(「これ」)女方(「にようぼう」)(「源倫子」)の車(「くるま」)なり。北陣(「きへいじん」)(「朔平門」)に参る(「まゐる」)に、其(「その」)の車御座(「くるまござ」)す。同じ門(「いっしょもん」)の下(「した」)に、御車(「ごくるま」)を立つ。

▲C(裏書) 馬(「うま」)を申(「まをまを」)す人々、左近中将頼定(「源」)・春宮大進頼光(「源」)は各一疋(「ひと」)(「飾馬」と引馬)。内蔵助(「内蔵助」)師言(「師言」)(「藤原」)は引馬(「ひきうま」)。雑色(「ざうしき」)為濟(「おののお」)。

(「藤原」)・木工允俊孝(「橋」)・輔清(「ウジ名不詳」)。

⑪『権記』寛弘元年四月廿日条

▲A「賀茂祭見物」

▲B「賀茂祭使出立」

▲C「讃岐掾の任料」

▲D「武蔵守(「平行義」)の餞」

廿日、癸酉。

枇杷殿(「道長」)に詣(「おもむき」)づ。御共(「おとも」)に候(「まち」)じ、一条(「一条大路」)の大納言殿(「道綱」)一条第(「一条第」)の北門(「きたもん」)に於(「おき」)いて見物(「みぶつ」)す。事(「こと」)了(「はたし」)りて近江守知章朝臣

(「藤原」)と同載(「どうさい」)して帰(「かへ」)る。

▲B 式部卿宮(「為平親王」)の中將(「源頼定」)、祭使(「さへした」)為(「な」)り。摺袴(「すりばかま」)を奉(「ほう」)る。

昨日(「けふ」)、宮(「平親王」)の御消息(「しやうそく」)有(「あ」)りと雖(「いえど」)も参入(「まゐりいれ」)せず。着座(「ちやくざ」)の後(「のち」)、未だ参内(「まゐりいれ」)せざるの前(「まえ」)、他(「ほか」)の事(「こと」)に従(「したが」)ふべからざるに依(「よ」)る也(「なり」)。移代(「うつりしろ」)の錦(「にしき」)、亦(「また」)、入(「いれ」)奉(「ほう」)る。「廿三日(「にじふさん」)に返(「かへ」)さる。」懸盤(「かけばん」)廿前(「にじふぜん」)、同じく供奉(「くわんぷ」)す。(「廿三日(「にじふさん」)に返(「かへ」)さる。」)

▲C 讃岐掾(「さぬきのかみ」)(「持」)放友(「ウジ名不詳」)の任料(「にんりよう」)卅疋(「さつしち」)の内(「うち」)、且(「かつち」)は廿疋、国平朝臣(「多米」)の許(「もと」)より、之(「これ」)を送(「おく」)る。

▲D 行義朝臣(「平」)、入夜(「よる」)来(「きこ」)たり、明旦(「めいたん」)に下向(「げこう」)(「武蔵守」)すべきの由(「よし」)を示(「しめ」)す。塵蔭(「ちりまき」)の野剣(「のけん」)腰借(「こしかし」)与(「あた」)ふ。故殿(「このとの」)(「藤原伊尹」)の御剣(「ごけん」)也(「なり」)。

⑫『日本紀略』寛弘元年四月廿日条

廿日、癸酉。

賀茂祭。

⑬『小記目錄』(第五・四月・賀茂祭事)

同年月(「長保六年(寛弘元年)四月」)廿一日、斎院(「選子内親王」)の御返事(「ごへんじ」)並びに祿(「ろく」)、雅通(「雅通」)の車(「くるま」)に投入(「なげい」)入(「いれ」)る事(「こと」)。

⑭『権記』寛弘元年四月廿一日条

▲A「還立」

廿一日、甲戌。

▲A 頼親中將(「藤原」)と同車(「どうくるま」)して見物(「みぶつ」)す。

弥勒寺(「宇佐八幡宮の神宮寺」)の講師(「こうし」)元命(「げんめい」)来(「きこ」)たる。

⑮『日本紀略』寛弘元年四月廿一日条

廿一日、甲戌。

解陣(「げじん」)。

34 寛弘二年（一〇〇五）

①『小右記』寛弘二年三月十五日条

+ 1 「陣定の事」（目二・陣定事）

▼ a 「禊祭の物の進未勘文」

十五日、癸亥。

参内す。左大臣（＝藤原道長・内大臣（＝藤原公季）・右金吾（＝藤原

信）・礼部（＝源俊賢）・権中納言（＝藤原隆家）・勘解（＝勘解由長官藤原

国）・右大丞（＝藤原行成）、同じく参る。諸国司申請の雑事を定申す。

▼ a 齋院（＝選子内親王）の禊祭の物の進未勘文、左中弁（＝藤原説孝）、

之を進る。見了りて返給ふ。国々の未進物を催納むべき由を仰す。

②『小右記』寛弘二年三月廿五日条

▼ a 「近江守（＝藤原知章）、修善の非時を調送る事」

▼ b 「賀茂祭の宣旨」

廿五日、癸酉。

▼ a 近江守（＝藤原知章）、修善（＝中宮藤原彰子の御修善）の阿闍梨・伴僧

の非時を調送る。

▼ b 藏人式部丞隆光（＝藤原）、宣旨八枚「賀茂祭に触るる宣旨。」を持

来たる。

③『小記目録』（第五・四月・御禊事）

寛弘二年四月五日、御禊定の事。

④『小右記』寛弘二年四月五日条

+ 1 「御禊定」（＝③）

▼ a 「出車・童女の騎馬を定むる事」

五日、壬午。

参内す。左府（＝道長）、御禊の前駟を定む。右衛門督（＝齊信）・治

部卿（＝俊賢）・権中納言「隆家」・勘解由長官（＝有国）・左右両大弁

（＝藤原忠輔・行成）参入す。宣旨数枚、左中弁（＝説孝）に下す。

▼ a 申上、齋院に参る。行具を実檢し、損破を注さしむ。左中弁に付

して奏聞す。出車・童女の騎馬を定むる事、例の如し。院（＝齋院）、

粉熟の儲有り。黄昏に罷出づ。

⑤『御堂関白記』寛弘二年四月五日条

▲ A 「前駟定」

▲ B 「位禄目録を奏する事」

五日、壬午。

参内す。左仗（＝陣座）に着す。前駟を定む。

位禄目録を奏す。

⑥『小右記』寛弘二年四月八日条

▼ a 「前駟の左衛門権佐（＝惟宗允亮）に絹を送る事」

▼ b 「治部卿（＝源俊賢）の病」

▼ c 「伊予守（＝高階明順）の病」

+ 1 「直物の事」（目四・三月・京官除目事）

▼ d 「灌仏」

+ 2 「興福寺の雅敬並びに弟子、茸を食ひて死する事」（目二〇・頓死

事）

八日、乙酉。

▼ a 絹五疋、左衛門権佐允亮朝臣（＝惟宗）の所に送る。御禊の前駟を

奉仕すべきに依る。隨身の料に充てしめむが為也。件の朝臣（＝允

亮、道（＝明法道）の事に就き、数雑事を問ふ。今、此の當有り。

仍りて微志を致す耳。

治部卿（＝俊賢）、去夕より悩煩ふ告有り。仍りて忠時（＝石作）を

差はして問送る。報じて云はく「頭打ち、身熱く、辛苦なり。」者り。礼部（＝俊賢）、宇佐（＝宇佐宮長保事件）の定の間、帥（＝権帥平惟仲）を引汲むの情有り。怖畏無きに非ず。

▼興光（＝三善）を差はし、伊予守（伊与守）（＝高階明順）に問送る。報じて云はく「悩む所、増減無し。但し、臨夜、弥倍す。」者り。病者、人々の消息を聞入れず。吐く所は狂言なり。邪氣の所為と云々。報告は是、妻子の消息也。

参内す。左右内三相国（＝道長・藤原顕光・公季）・右金吾（＝斉信）・権中納言（＝隆家・左大弁（＝忠輔）参入す。直物有り。玄蕃頭・大蔵・式部録等を申す者の申文を下さる。撰上し了りて即ち奏聞せらる。召に依り、左府（＝道長）、御前に参上す。此の間、心神宜しからず。退出す。秉燭せむと欲するに、資平（＝藤原）書送る。馬允（内舍人藤原有信）。を請申して任ぜらる。是、員外也。明日、恐の由を左府に申さしむべし。除目、別に在り。

▼早旦、灌仏。今日、神事（＝梅宮祭）に遇ふ。仍りて公家（＝一条天皇）、御灌仏無し。

陣（＝陣座）に於いて左府談ぜられて云はく「興福寺の雅敬、日来、読経在り。而るに、昨、茸を食ひ、今日、酔ひて死す。弟子一人、同じく食ひて死す。」者り。

（注1）宇佐宮長保事件は、長保五年から寛弘元年にかけて大宰権帥平惟仲と宇佐宮との間に起きた争い。宇佐宮神人も大宮司大神邦利（反惟仲）と権大宮司宇佐宗海（親惟仲）との二派に分かれて争った。その経過は、長保五年十一月廿七日に神人が惟仲の苛政を訴え、寛弘元年三月廿四日に陽明門に愁訴した。三月廿七日に陣定が行なわれ、四月十日に神人を勘問して怠状を提出させた。六月八日に推問使が派遣されて惟仲の贅務が停止され、十二月廿八日に惟仲は権帥を停任された（以上『小右記』『御堂関白記』『権記』『日本紀略』『百練抄』など）。

⑦『小右記』寛弘二年四月十日条

▼a「故殿（＝藤原実頼）の女御（＝醍醐天皇女御藤原能子）の御忌日」

▼b「伊予守（＝明順）の病の事」

▼c「斎院の申請文」

▼d「禊祭の日の行事宰相」

十日、丁亥。

▼故殿（＝藤原実頼）の女御（＝醍醐天皇女御藤原能子）の御忌日（々忌日）。仍りて諷誦を勧修寺に修す。

▼伊予守（伊与守）朝臣（＝明順）、昨より宜しき由なり。観音院の僧

正（＝勝算）示送る也。

▼左中弁（＝説孝）、斎院の申請文等を持来たる。見了りて返給ひ、奏すべき由を答ふ。

▼参議有国（＝藤原）を以て、禊祭の日、斎院に参らしむべき由、左中弁を以て奏聞せしむ。

⑧『小右記』寛弘二年四月十四日条

▼a「勘宣旨並びに御禊の点地等の勘文」

▼1「陣定の事」（目一四・陣定事）

▼b「禊祭の料物、後院の絹を借下さしむる事」

▼c「禊祭の行事宰相」

▼d「尼君（＝藤原実資の姉）、始めて西宅に渡り給ふ事」

十四日、辛卯。

▼左中弁（＝説孝）、勘宣旨並びに御禊の点地並びに御出の時刻・祭日の御出の時刻等の勘文を将来す。即ち状を奏すべきを答へ了りぬ。但し、勘宣旨は留む。

▼参内す。左右内三相府（＝道長・顕光・公季）、中納言斉信・時光（＝

藤原・隆家、参議有国・懷平（＝（＝藤原）・行成（＝藤原）等参入す。大宰大式（＝藤原高遠）並びに諸国司申請の雑事を定申す。入夜、退出す。

勘宣旨、隆光（＝藤原）に付す。即ち下給ふ。亦、左中弁に下す。

▲齋院（＝選子内親王）の禊祭の日の御車副・手振の紫の褐・青の褐等並びに紫の蓋の料の染絹、率分の下文を以て、諸国に召さしむ。忽ちには出来たるべからず。仍りて事由を左府（＝道長）に触れ、後院納むる絹を借下さしめ、後日、率分の絹を以て返納すべき也。

▲禊祭の日、齋院に参るべきの宰相の事、有国。先日、奏聞すべき由、左中弁に仰す。而るに忘失（×忌失）し、今に奏せず。御物忌に依り、今日、奏聞すること能はざれば、藏人隆光を以て奏聞せしむ。「請に依れ。」者り。即ち大外記善言朝臣（＝滋野）に仰す。

▼今夜、亥刻、尼君（＝藤原実資の姉）、始めて西宅に渡り給ふ。本は是、既の地なり。東の地を相替へて奉る所なり。御前の高器物・女房の垢飯、調へしめて奉り了りぬ。

（注1）『小右記』寛弘二年五月十日条に見える「先日所令下勘之宣旨三枚」は、本日条の勘宣旨と同じものか。

⑨『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同年月（＝寛弘二年四月）十七日、御禊の事。

⑩『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同日（＝寛弘二年四月十七日）、右大將（＝藤原実資）、御禊の前驅の左衛門権佐允亮（＝惟宗）に隨身並びに馬を賜ふ事。

⑪『小右記』寛弘二年四月十七日条

+ 1 「御禊」（↓⑨）

+ 2 「左衛門督公任の子金石の引出物の事（道風（＝小野）の手本）」

（目一四・引出物事）

▼ a 「小童（観葉）、西殿より渡る事」

+ 3 「右大將、御禊の前驅の左衛門権佐允亮に隨身並びに馬を賜ふ事」（目↓⑩）

十七日、甲午。

午刻許（々刻許）、齋院に参る。先是、参議有国参入す。但し、院の侍所に在りと云々。仍りて下官（＝藤原実資）、客殿に着す。後に有国来たる。其の後、肥牛を見る。次いで下仕・走孺等を見る。

先例、中門の中より度る。而るに程遠きに依り、客殿の北庭を度り、中門より入る。頗る便宜有り。藏人隆光云はく「所（＝藏人所）の前驅藤原惟信、忽ちに胸病を煩ひて参入すべからざる由、經通朝臣（＝藤原）より申送る。」者り。余（＝実資）答へて云はく「時刻、已に到り、御車を寄するに及ぶべし。之を如何為む。所の前驅一人も参り給はざるに依り、御禊の事、何ぞ遅留有る乎。」即ち起座し、御前（＝齋王の御在所）に進む。申刻、御車を寄す。余並びに勘解由長官（＝有国、堀河の辺以西に於いて見物す。左府（＝道長、此の処に於いて見物す。右衛門督（＝齊信）・治部卿（＝俊賢）同車す。春宮大夫（＝藤原道綱）・左兵衛督（＝藤原懷平）合乗す。権中納言（＝隆家）、車を別ち、之を見る。今日、所の前驅四人度る。一人は病を煩ふ。今一人は見えず。未だ其の由を知らず。後聞く。「大中臣信助、堀河の辺に到着す。」と云々。

+ 2 余、家（＝小野宮第）に帰る後、左金吾「公任（＝藤原）の愛子金石に、之を送る。『吉日に依り送る所也。』」者り。即ち資平と同車して（資平と同車）見物するの次に來たる所也。道風（＝小野）の手跡一卷を与ふ。資平を以て送らしむる也。帰來たりて云はく「金吾（＝公任）」

涕泣^{ていきりやう}すること、雨の如し。哀憐^{あうれん}、之^{これ}、甚^{はなはだ}し。附属^{ふそく}の詞、敢^あへて云ふべからず。」者^{しや}り。

▼a 弁腹^{べんぷく}の小童^{しょうどう}〈観葉^{かんえつ}〉、西殿^{にしどの}（＝小野宮第の西町）より送り給ふ也。即ち見て返送^{かへしやう}る。入夜^{にや}、西殿^{にしどの}に詣^{よこ}づ。深更^{しんこう}に帰^{かへ}る。昨^{きのう}以往^{いおう}、触穢^{しょくえ}の疑^{うたがひ}有り。仍^{なほ}りて詣^{よこ}でざる所也。

今日^{けふ}、鹿毛^{かかげ}の馬、左衛門権佐允亮^{（＝惟宗）}に借^かす。又、申さしむるに依^より、隨身^{ずしん}の近衛酒井正武^{（＝惟宗）}を相副^{あひそ}ふ。栗毛^{あしけ}の馬、所^{ところ}の前驅宮道式光^{（＝式部）}に借^かす。又、隨身^{ずしん}穴太国時^{（＝惟宗）}を給^{たま}ふ。

（注1）『栄花物語』（巻八・はつはな）は詳しく記しているが、近衛中將となった藤原頼通が近衛府使を勤めたとする。使は源雅通で、頼通は中将に任じられておらず、賀茂祭使を勤めたという史料はない。

⑫『御堂関白記』寛弘二年四月十七日条

▲A「御禊」

十七日、甲午。
見物^{けんぶつ}す。

（注1）具注暦の上部欄外に「御禊」とある。

⑬『権記』寛弘二年四月十七日条

△A「御禊」

△B「物忌」（頭書）

十七日、甲午。
御禊^{みそぎ}。御前^{ごぜん}（＝前驅）の兵衛佐（＝藤原伊成）出立^{いでた}つ。
物忌^{（＝頭書）}。

⑭『日本紀略』寛弘二年四月十七日条

十七日、甲午。

賀茂斎院（＝選子内親王）の御禊。

⑮『小記目録』（第五・四月・警固・解陣事）

寛弘二年四月十八日、警固^{けいこ}の事。

⑯『小右記』寛弘二年四月十八日条

▼a「宣旨」

十一「警固の事」（目↓⑮）

十八日、乙未。

藏人隆光、宣旨持来たる。廻^{すなわ}ち左中弁^{（左中■）}（＝説考）に下す。

外記清忠（＝文室）申して云はく「今日、警固有るべし。参入すべき乎^{（＝か）}」者^{（＝しや）}り。答へて云はく「所^{（＝ところ）}労^{（＝ろう）}有り、参入すべからず。」重ねて申して云はく「明日、申行^{（＝もうしおこ）}なふべき歟^{（＝か）}」者^{（＝しや）}り。仰せしめて云はく「今日、式日也。須^{（＝す）}く諸卿^{（＝しよきやう）}に申廻^{（＝もうしめく）}らしむべし。皆、故障^{（＝くわん）}有らば、事由^{（＝よし）}を奏^{（＝そう）}せしめ、仰^{（＝おほせ）}に随^{（＝したが）}ひ、明日に及ぶべき歟^{（＝か）}」件^{（＝くだん）}の清忠、家人^{（＝けにん）}為^{（＝な）}り。仍^{（＝なほ）}りて披蒙^{（＝ひもう）}る為^{（＝ため）}に申さしむる所歟^{（＝か）}。「祭日、南殿^{（＝なでん）}（＝紫宸殿）に出御^{（＝しゆつぎ）}し、諸使^{（＝しよし）}を御覧^{（＝ごらん）}すべし。」者^{（＝しや）}り。経通朝臣・隆光談ずる所也。

権中納言（＝隆家）の使嘉言^{（＝つかい）}（＝大江）、警固の事を問送^{（＝とんそう）}らる。聊^{（＝いささ）}か之を注送^{（＝しゆそう）}る。「今日、参行^{（＝まいりおこ）}なふべし。」者^{（＝しや）}り。

（注1）『御堂関白記』同日条の具注暦の上部欄外に「警固」とある。

⑰『日本紀略』寛弘二年四月十八日条

十八日、乙未。

警固。

⑱『小記目録』（第一五・大臣以下物詣事）

寛弘二年四月十九日、右大臣（＝顯光）、賀茂社に参らるる事。

⑲『小記目録』（第一五・大臣以下物詣事）

同日（＝寛弘二年四月十九日）、同人（＝顯光）の前驅、四位少将（＝頼通）勤められ并びに引出物^{（＝ひきだすもの）}の過差^{（＝かさ）}の事。

⑳『小右記』寛弘二年四月十九日条

+1「右大臣、賀茂社に参らるる事」(目↓18)

+2「同人の前駆、四位少将(頼通)勤められ並びに引出物の過差の

事」(目↓19)

十九日、丙申。

右大臣「顕光公」、賀茂に参ると云々。左右近衛の官人を以て、

舞人と為すと云々。

左府(道長)、四位少将頼通(藤原)を以て前駆せしむ。先日(

本年三月八日)、右府(顕光)、大原野行啓に候ぜらる。今、彼(後)

の恐に謝す為と云々。或云はく「右府、社の頭より退帰の間の、

車後に、四位少将乗る。家(堀河第)に帰る後、馬二疋・剣等を

志す。又、共人の兵衛尉二人(左は惟任(藤原)、右は以道(藤

原)は綾一疋、隨身等は絹二疋と云々。「二疋を以て、一疋に巻

く。其の過差、丞相の志に非ざる耳。後鑑とすべからず。奇為り、

奇(々)為(々)り。

(注1) 九月廿二日にも、左大臣藤原道長が大納言藤原道綱以下を伴って賀茂社に

参詣している『御堂関白記』『権記』。

㉑『御堂関白記』寛弘二年四月十九日条

▲A「賀茂詣」

十九日、丙申。

右府(顕光)、賀茂に参る。頼通、彼の共に有り(頼通彼共)。是、

宮(中宮藤原彰子)、大原野に参り給ふに供奉(×共奉)せらる。此の

恐に依りて奉る所也。馬二疋・野剣一腰給はる。是、太だ大いな

る送物也。

㉒『権記』寛弘二年四月十九日条

△A「参内」

△B「賀茂詣」

十九日、丙申。

左府(道長、枇杷殿)に詣づ。参内す。御前に参る。入夜、退出す。

右府(顕光)、鴨詣す。殿(道長)の四位少将(頼通)供奉すと

云々。

㉓『小記目錄』(第五・四月・賀茂祭事)

寛弘二年四月廿日、賀茂祭の事。

㉔『小右記』寛弘二年四月廿日条

▲a「典侍に車を遣はす事」

▼b「賀茂社奉幣」

▼c「摺袴を近衛使(源雅通)に送る事」

▼d「諷誦」

+1「賀茂祭の事」(目↓23)

+2「大宰帥(平惟仲)の骸骨の入京の事(三月十四日、府(大宰府)

に於いて薨す)」

「大宰帥惟仲卿の骸骨の入京の事(三月十四日、府に於いて薨

す)」(目二〇・公卿薨卒事)

廿日、丁酉。

▲a「車、使の典侍の許に遣はす。河内守朝臣(源奉職カ)に依り、懇

切に触示す也。

▼b「賀茂に奉幣す。今年、始めて貴布禰に奉る。賀茂社司等申すに依

る也。近代の例、必ず件の社を加へて奉ると云々。

▼c「摺袴を使の少将雅通朝臣(源)の許に送る。〔左府(道長)より

出づ。則ち是、枇杷殿。〕

▼^{dふ} 誦誦を賀茂下御神宮寺に修す。是、例也。

午終、剋許、齋院に参る。先是、参議有国参入す。飾馬・下仕・走孺等を見ること、恒の如し。使々、清涼殿に於いて御覽ずと云々。時刻推移し、已に薄暮に及ぶ。使々、未だ列見辻（＝一条大路と大宮大路の交差点）に來たらず。然而御輿を寄せしむ。下官（＝実資）見物す。参議（＝有国）相従ふ。申終許、斎王（＝選子内親王）渡り給ふ。次々の事、已に黄昏に及ぶ。近衛府使雅通、御衣を給はる。隨身持つ。左府の定と云々。

備中介（×守）生昌朝臣（＝平）、故平中納言惟仲卿の骸骨を隨身して入京すと云々。実の説なり。平納言（＝惟仲）、去月十二日に病を受け、十四日に薨す。

（注1）平生昌は『日本紀略』四月廿四日条、『権記』十月廿二日条では「備中介」とすることから改めた。

②⑤『御堂関白記』寛弘二年四月廿日条

▲A「賀茂祭使出立」

▲B「賀茂祭見物」

▲C「帥中納言（＝前権帥平惟仲）の薨去の事」

廿日、丁酉。

▲A 枇杷殿の西対より、使（＝近衛府使）雅通を立つ。上達部（部×）八人來らる。

▲B 事了りて帥（＝前権帥藤原伊周）來らる。同車し、上達部（部×）、同じく棧屋（＝棧敷）に到りて見物す。

▲C 入夜、参内す。退出す。

生昌朝臣（＝平）申さしめて云はく（令申生昌朝臣云）「帥中納言（＝前権帥平惟仲）、去月十四日に薨す。廿二日（日×）に府（＝大宰府）を出

で（出廿二府）、今夜來たる。」者り。「神事の間に依り、子細を申さず。」者り。

（注1）源雅通は時通の男で、雅信の養子。叔母倫子（雅信の女の夫道長の家（枇杷殿西対）を出立所とした）。

②⑥『権記』寛弘二年四月廿日条

△A「賀茂祭使出立」

△B「賀茂祭見物」

△C「三位中将（＝藤原兼隆）同車する事」（頭書）

廿日、丁酉。

▲A 左府（＝道長）に詣づ。〈枇杷殿〉。右藏人少将〈雅通〉祭使なり。

▲B 西対より出立つ。

▲C 次いで一条〈上野介忠範（＝橋）〉に、見物所有り。相府（＝道長）御坐す。御共に候ず。

▲D 三位中将（□位中将（＝藤原兼隆）過ぎらる（□過）。同車す。

②⑦『日本紀略』寛弘二年四月廿日条

廿日、丁酉。

賀茂祭。

賀茂祭。

②⑧『小記目錄』（第五・四月・賀茂祭事）

同年月（＝寛弘二年四月）廿一日、祭日、齋院（＝選子内親王）の女房、信濃の前後司（後×）（＝前司源清政・後司藤原佐光）、論（×倫）を成し、紅花を弁ぜざるに依り、唐衣の外に、白の衣を着する事。

②⑨『小右記』寛弘二年四月廿一日条

▲a「還立、典侍・都督（＝藤原高遠）に物を遣はす事」

▲b「律師慶命に物を送る事」

▲c「同車の事」（頭書）

十一「祭日、齋院の女房、信濃前後司、論を成し、紅花を弁ぜざるに

依り、唐衣の外に、白の衣を着する事」(↓28)

廿一日、戊戌。

▼使の典侍の神館の宿所に、早朝、檜破子十余荷を送る。「使の出

納の男に、物を被く。」檜榔毛車並びに雑具等、都督(＝藤原高遠)

に遣はし奉る。彼(×後)の御消息に依る。是、室家(＝藤原実資の養

子資高の母)の料敷。

▼舍利会(＝延暦寺舍利会)の行事律師慶命、先日、示す所有り。仍り

都合一重を送る。

都督過られて云はく「今夕、左府(＝道長)に参るべし。」者り。

今日、左府・右府(＝顯光)・右衛門督(＝齊信)同車す。左府、牛

一頭を志さると云々。

今年の賀茂祭の日、齋院の女房、唐衣の外に、白の衣を着す。思

ふ所有るに似る。信濃国(信乃国)前司済政(＝源、新司佐光(＝藤

原)の禊祭料の紅花を以て、今年許、新司の申すに依り、色替を

許さる。「一斤の代は布一端一丈。勅定は、一斤は二端。」去年の

紅花を以て、前司弁済す。而るに公家(＝一条天皇)定められて云は

く「去年の十一月に辞退す。新司、須く弁済すべし。」者り。新司

申して云はく「紅花、時有り。仍りて前司の分附を以て、新司、之

を承はりて弁済すべき也。而るに一斤も度さざるは、之を如何為

む。」前司云はく「去年、早損し悉く以て損失すと云々。猶、後司

を以て弁済せしむべし。」と云々。仍りて今年許、色替を申請すと

云々。左府定申す所と云々。事、頗る乖理す。仍りて衆人に知らし

めむが為に、白色を着せしむ。誠に所以有り。後の為に記す所也。

③〇『御堂関白記』寛弘二年四月廿一日条

▲A「還立」

廿一日、戊戌。

▲A見物に出づる間、右府(＝顯光)来らる(被来右府)。是、頼通に、

悦を命ぜらるる也。同車して見物す。返来たり、牛一頭を引物と

為す。上卿(＝公卿)七人來らる。

還饗、常の如し。

③①『権記』寛弘二年四月廿一日条

△A「還立」

△B「解陣」

△C「大式(＝藤原高遠)の罷申」

廿一日、戊戌。

早朝、三位中将(＝兼隆)過らる。同車し、左府(＝道長)に参る。

右大殿(＝顯光)参られ、少将君(＝頼通)の一日(＝本年三月八日)の御

共の事(＝中宮藤原彰子の大原野行啓)を申さると云々。御共に候じて見

物す。即ち同車して見物し給ふ。余(＝藤原行成)と左兵衛督(＝懷平)

と同車して見物す。宅に還る。

亦、還立所(＝批杷殿)に詣づ。

▲B次いで参内す。解陣(×陳)の事、源納言(＝源俊賢)行事す。近

衛・兵衛四府参る。

▲C亦、左府に詣づ。大式(＝藤原高遠)罷申す。馬・女装束(束×)等、

之有り。余、深更に及び、雑事を申承はる。

(注)藤原高遠は寛弘元年十二月廿八日に大宰大式に任じられた(『御堂関白記』

『日本紀略』『扶桑略記』)。

③②『日本紀略』寛弘二年四月廿一日条

廿一日、戊戌。

解陣。

35 寛弘三年（一〇〇六）

①『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝寛弘）三年四月二日、齋院に於いて、出車并びに女騎の馬を定めらるる事。

②『御堂関白記』寛弘三年四月二日条

▲A「御禊の前駈定」

二日、癸酉。

▲A 時々、雨下る。左仗座（＝一条院寝殿西北廊）に着す。御禊の前駈を定む。

③『権記』寛弘三年四月二日条

△A「結政」

△B「御禊の前駈定」

△C「世尊寺に阿弥陀仏を安置する事」

△D「梅宮祭」（頭書）

二日、癸酉。

▲A 結政に参る。陽明門に至るに比び、雨ふる。源納言（＝源俊賢）、

先に左衛門陣（＝建春門）に在り。風雨に依り、壁の辺に立つ。上

（＝上卿俊賢）、弁候を召す。召使候ぜざるに、官掌をして戸を引かし

むるを仰せらる。而るに官掌も候ずる所は一人なり。召使の為に戸

を引くの事を奉仕す。其の間、出居に候すべき官掌候ぜず。今、史

生も参らず。其の由を申さしむる間、右金吾（＝藤原齊信）参らる。

風雨漸く止む。日、午に及ぶも、召使参らず。仍りて上出で給ふ。

結政に随ふ。

△B 了りて参内す（＝一条院）。申剋、左大臣（＝藤原道長）参らる。禊日
の前駈を定申さる。

△C 剋、世尊寺に至る。去年より造り奉る等身の金色の阿弥陀仏、

康尚の許より迎へ奉る。成正（＝ウジ名不詳）行事す。暫く大堂に安

置す。康尚に手作布二十端を賜ふ。惟頼（＝源）は布也。

△D 頭書
梅宮（□宮）。

④『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝寛弘）三年四月十一日、齋王（＝選子内親王）の禊の事。

⑤『御堂関白記』寛弘三年四月十一日条

▲A「御禊」

十一日、壬午。

▲A 御禊、常の如し。出立つは、右兵・左兵衛佐（＝藤原頼宗・藤原顕信）
等なり。見物す。

（注1）この年の前駈として、36③に右衛門佐藤原中尹が見える。

⑥『権記』寛弘三年四月十一日条

△A「御禊」

十一日、壬午。

▲A 参内す。左府（＝道長。土御門第）に詣づ。御禊を見る。

⑦『日本紀略』寛弘三年四月十一日条

十一日、壬午。

賀茂斎王（＝選子内親王）の禊。

⑧『日本紀略』寛弘三年四月十二日条

十二日、癸未。

警固。

⑨『権記』寛弘三年四月十三日条

△A「警固の召仰」
めしおおせ

十三日、甲申。

△A 参内す。昨の警固の召仰、権中納言（＝藤原隆家）行事す。女房の陪膳候ぜざるに依り、御膳に候（々）ず。左府（＝道長）に参る。

⑩『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同年月（＝寛弘三年四月）十四日、賀茂祭の事。

⑪『御堂関白記』寛弘三年四月十四日条

△A「賀茂祭使出立」

十四日、乙酉。

△A 土御門（＝土御門第）、東対より出立つ。忠経（＝藤原・近衛府使）なり。物忌輕きに依りて見物す。

⑫『権記』寛弘三年四月十四日条

△A「賀茂祭使出立」

△B「廢務」
はいむ

△C「□□」（頭書）

十四日、乙酉。

△A 左府（＝道長）に参る。祭使出立つ。忠経朝臣（＝藤原）。見物す。

△B 廢務（＝廢務）。

△C 頭書。

⑬『日本紀略』寛弘三年四月十四日条

十四日、乙酉。

賀茂祭。

⑭『御堂関白記』寛弘三年四月十五日条

△A「還立」
かえりだち

十五日、丙戌。

△A 朝より、雨下る。深雨。宣旨有りて参内す。一宮（＝敦康親王）の物見に、女方（＝源倫子）の車を奉る。東陣（＝一条院東門）の下に於いて、之に御す。

⑮『権記』寛弘三年四月十五日条

△A「還立」

十五日、丙戌。

△A 大藏卿（＝藤原正光）と同載して見物す。一宮（＝敦康親王）、同じく御出す。御送の為に参内す。然而、束帶せざるに依り、日給に預からず。

⑯『日本紀略』寛弘三年四月十五日条

十五日、丙戌。

解陣。

⑰『小記目録』（第一五・摂政関白物詣事）

寛弘三年四月十六日、左府（＝道長）、賀茂に参る事。

⑱『御堂関白記』寛弘三年四月十六日条

△A「賀茂詣」
かももうち

十六日、丁亥。

△A 十三日の物忌に依り、賀茂に参る。時々、小雨下る。入夜、還る。神宝・東遊等有り。同道する上達部十一人。大納言春宮大夫（＝藤原道綱）御座す。恐申すこと少なからず。

⑲『権記』寛弘三年四月十六日条

△A「賀茂詣」

十六日、丁亥。

△A 雨。左府（＝道長）に参る。賀茂詣。

⑳『日本紀略』寛弘三年四月十六日条

十六日、丁亥。

関白左大臣（＝道長）の賀茂詣。

（注1）藤原道長は関白にはなっておらず、この時は左大臣で内覧。

〔36〕寛弘四年（一〇〇七）

①『御堂関白記』寛弘四年三月十四日条

▲A「季御読経初」

▲B「祭使の雑事定」

▲C「東宮傳（＝藤原道綱）を以て、庁（＝春宮坊）を知らしむる事」

十四日、丁亥。

▲A「季御読経初」物忌に依りて参らず。右府（＝藤原顕光）、事行なふ

と云々。

▲B「頼宗（＝藤原）の祭使（＝近衛府使）の雑事定。又、自ら賀茂に参る

べき事（＝賀茂詣）あり。

▲C「入夜、業遠朝臣（＝高階）来たりて云はく「東宮（＝居貞親王）、傳

（＝藤原道綱）を以て、庁（＝ここは春宮坊）を知らしむる事を仰せ、令旨下す。」者り。

（注1）本年正月廿八日に、藤原懷平は東宮権大夫から東宮大夫に、藤原道綱は東宮大夫から東宮傳に転任した。

②『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝寛弘）四年四月五日、御禊の前驅定の事。

③『権記』寛弘四年四月五日条

△A「結政の物忌」

△B「御禊の前驅定」

五日、辛未。

△A「かたなはし」結政に参る。陽明門に至るに比び、結政の物忌を聞く。

△B「さんだん」参内す（＝一条院。権中納言（＝藤原隆家）、御禊の前驅の事を定申

さる。左府（＝藤原道長、御障有り。仍りて当日の上卿（＝隆家）定

申さる。右衛門佐周家（＝藤原）は四位也。中尹（＝藤原）は去年奉仕

す。天慶六年の例に依り、事由を奏す。兵庫頭聞（＝源）を差はし

りぬ。左衛門権佐随時（＝平）は天慶四年に差はさる。而るに障

を申すに依り、他人に差替ふ。同五年（＝四月二十五日）、随時、四位

（＝從四位下）に叙位し、佐を差はす。同六年、随時、猶権佐為り。

而るに兵庫斎章（＝平）を差はす。例也。

（注1）右衛門佐藤原周家の代官は、兵庫頭源聞から内匠頭藤原理邦に交替した

（〔36〕②）。

（注2）天慶四年（九四一）の賀茂祭に関する史料は本日条のみ。

（注3）天慶五年は四月十五日に斎院司長官の代官が定められ、十七日に禊、十八

日に警固、廿日に祭、廿一日に解陣が行なわれ、廿三日に叙位、廿五日に位記

請印が行なわれた（『本朝世紀』）。この叙位において防鴨河使左衛門権佐兼丹

波守平随時は正五位下から從四位下に昇叙された。なお、当時の左衛門佐に關

三月一日に任じられた源俊がいる（『本朝世紀』）。

（注4）天慶六年は四月二日に御禊前驅定が行なわれたが（『西宮記』恒例二・四

④『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同年月（＝寛弘四年四月）十二日、参内の間、犬死穢有り、禊祭を行な

ふべからざる事。

（注1）犬死穢については、『御堂関白記』『権記』同月十二日条参照。

⑤『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝寛弘）四年四月十四日、斎院（＝選子内親王）の雑事具せざる由

を申すに依り、延引有り。又、宮中の穢に依り、延引有る間の事。

⑥『権記』寛弘四年四月十三日条

△A「兵部省の位記請印」

十三日、己卯。

△A「官掌徳任」

官掌徳任（×湛）（＝丹波）来申して云はく「右衛門督（＝藤原奇信）の御消息に云はく『兵部の位記請印すべし。而るに宰相参らず。参るべし。』申さしめて云はく「昨・今日、結政の物忌、年（＝三十六）歳」当たるの内なり。内裏（＝一条院、穢有り。御禊の日に及ぶべし。禊日（々々）、斎院に着すべし。仍りて参らず。」

⑦『権記』寛弘四年四月十四日条

△A「御禊延引」

十四日、庚辰。

△A「御禊、内（＝内裏）」

御禊、内（＝内裏）の穢に依り、未日（＝十七日）に行なはるべし。是、延喜十九年、承平七、天慶九、天曆元・三年の例と云々。則ち左府（＝道長）に詣づ。参内す。

（注1）延喜十九年（九一九）の御禊は四月廿二日己未（『貞信公記抄』、『日本紀略』廿一日条、『西宮記』恒例二・四月・賀茂祭事）。

（注2）承平七年（九三七）の御禊は四月十三日乙未（『年中行事秘抄』四月・賀茂祭上卿事）。

（注3）天慶九年（九四六）の御禊は四月廿三日癸未（『即位部類記』、『小右記』長和元年（＝一〇一三）四月十九日条、『年中行事秘抄』四月・四月朔当西時禊祭用下午酉例（＝廿二日）は「廿三日」の誤りか）。

（注4）天曆元年（九四七）の御禊は四月十六日辛未（『貞信公記抄』、『日本紀略』十五・十六日条、『小野宮年中行事』四月・差賀茂斎内親王禊日前驅奏聞事所引『故殿御日記』天慶十年四月十二日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

承元年（＝一〇六）四月十八日条。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

（注5）天曆三年の御禊は廿二日乙未（『日本紀略』十九・廿二日条、『中右記』嘉承元年（＝一〇六）四月十八日条）。

△A「御禊、触穢に依り延ぶ。供奉する諸司等、皆、乙（＝乙穢）を以て也。

⑨『日本紀略』寛弘四年四月十六日条

十六日、壬午。

斎院（＝選子内親王）の禊延引す。昨日、内裏、犬死穢有るの故也。

（注1）『賀茂斎院記』（選子内親王）に同文が見える。

⑩『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝寛弘四年四月）十七日、御禊の事。

⑪『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同日（＝寛弘四年四月十七日）、御禊の延引の宣旨を下さるる事。

⑫『御堂関白記』寛弘四年四月十七日条

△A「御禊」

十七日、癸未。

御禊見物す。右兵衛佐道雅（＝藤原）織物の袍を着す。赤色の如し。衆人、頗る奇しむ。前驅、右衛門佐代（＝右衛門佐は周家）は内匠頭藤原理邦。次第使、本の者、障を申す代は右馬助孝義（＝平）。右衛門佐、四位に依り、本人は奉仕せず。

⑬『権記』寛弘四年四月十七日条

△A「御禊」

十七日、癸未。

斎院（＝選子内親王）に参る。御禊也。

⑭『日本紀略』寛弘四年四月十七日条

十七日、癸未。

斎院の禊。

今日、警固。

- ⑮『舍人記』寛弘四年四月十七日条『河海抄』へ二・藤裏葉所引)

同(寛弘)四年四月十七日。

齋院の御禊の前駟右兵衛佐道雅(藤原。従五位外、当色は緋色)、
色の人。赤色の織物の袍を着す。

- ⑯『小記目録』(第一五・摂政関白物語事)

同年(寛弘四年)四月十八日、左大臣(藤原道長)、賀茂社に参らるる事。

- ⑰『御堂関白記』寛弘四年四月十八日条

▲A「賀茂詣」

十八日、甲申。

賀茂に参る。東遊・神宝等有り。同道する上達部は、右衛門督(齊信)・権中納言(藤原隆家)・尹中納言(藤原時光)・源中納言(源俊賢)・新中納言(藤原忠輔)・勘解由長官(藤原有国)・左大弁(藤原行成)・修理大夫(平親信)・左兵衛督(藤原懷平)・大藏卿(藤原正光)・宰相中将(源経房)・春宮権大夫(藤原頼通)・三位中将(藤原兼隆)・源三位(源則忠)等也。東宮傳(道綱)来らる。同道すべき由を示さる。上臈に座するに依り留まり了りぬ。還祿等、上社に賜ふ。

(注1) 六月廿二日にも、藤原道長が賀茂社に参詣している(『御堂関白記』)。

- ⑱『権記』寛弘四年四月十八日条

△A「賀茂詣」

十八日、甲申。

左府(道長)に詣づ。賀茂に参り給ふ。御共に候ず。

- ⑲『日本紀略』寛弘四年四月十八日条

十八日、甲申。

左大臣(道長)、賀茂社に参る。

- ⑳『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(寛弘四年四月)十九日、賀茂祭の事。

- ㉑『御堂関白記』寛弘四年四月十九日条

▲A「賀茂祭使出立」

▲B「使々を見物する事」

十九日、乙酉。

朝より、天陰る。巳午時許、雨下る。衆人歎(欲)く問、未初(程、天晴れ、雲気無し。万人、喜と為す。近衛使頼宗(藤原、ひがしのたい)より立つ。

東対(土御門第)より立つ。

事了りて参内す。一宮(敦康親王)を、御見物に向かはしめ奉る(御向)。来らるる上達部(部々)、皆参る。申時、内蔵使権頭能通(藤原)・近衛府使頼宗・中宮使実成(藤原)・春宮使業遠(高階)等也。馬寮使は通任(藤原)。善を尽くし、美を尽くすこと、未だ此の如き年あらず。雨晴るる事、神感致す也(致神感也)。上達部十五人來らる。

- ㉒『権記』寛弘四年四月十九日条

△A「賀茂祭使出立」

十九日、乙酉。

左府(道長)に詣づ。頼宗少将(藤原)、使(近衛府使)也。摺

袴二具を奉る。

齋院に参る。

- ㉓『日本紀略』寛弘四年四月十九日条

十九日、乙酉。

賀茂祭。山城の国司供奉せず。延長五年の例也。

(注1) 山城介には真助朝臣(ウジ名不詳)がいる(『御堂関白記』寛弘四年六月九日条)。

(注2) 『扶桑略記』(裏書) 延長五年(九二七) 四月十七日条に山城守・介が病により供奉せず、掾一人を代官としたことが見える。

24 『小記目録』(第五・四月・警固・解陣事)

同(寛弘) 四年四月廿一日、解陣の事。

(注1) 解陣は廿日であることから「廿一日」は「廿日」の誤りか。あるいは、挿入符により傍書した「四年四月」が誤りであれば寛弘二年のことか(廿一日が解陣)。なお、寛弘年間の解陣日は、元年は廿一日、二年は廿一日、三年は十五日、四年は廿日、五年は廿日、六年は廿五日、七年は廿五日、八年は十九日、九年は廿五日。

25 『御堂関白記』寛弘四年四月廿日条

▲A 「還立」

廿日、丙戌。

▲A 内府(藤原公季)と東宮傳(道綱)等同道して見物す。上達部十余人同道す。未時に還る。此の間、中宮使(実成)の共の者の右近衛正親(泰)に、内府、衣を賜ふ。左近府の季忠(末忠)(ウジ名不詳)は、我(道長)給ふ。

還饗、常の如し。上達部十二人。

26 『権記』寛弘四年四月廿日条

▲A 「還立」

△B 「解陣」

廿日、丙戌。

▲A 見物す。還りて左府(道長)に詣づ。

▲B 亦、参内す。解陣の事、右衛門督(齊信)奉行す。右近(右近衛府)は具せず。

27 『日本紀略』寛弘四年四月廿日条

廿日、丙戌。

解陣。

37 寛弘五年(一〇〇八)

① 『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(寛弘) 五年三月廿九日、皇后(藤原彰子)の懷妊の間、祭使立つべきや否やの事。

② 『御堂関白記』寛弘五年四月九日条

▲A 「御禊の前駈定」

九日、己亥。

▲A 着陣し(一条院、禊日の前駈を定む。罷出づ。雨下る。

③ 『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同(寛弘) 五年四月十四日、御禊の点地の事。

④ 『御堂関白記』寛弘五年四月十六日条

▲A 「御禊」

十六日、丙午。

▲A 禊を見る。上達部多く来らる。頭信(藤原・能信(藤原)等、前駈を奉仕す。家の馬十一疋、人に給ふ。馬を申さざる人、他所と雖も、皆、是、本は我が馬也。

⑤ 『日本紀略』寛弘五年四月十六日条

十六日、丙午。

賀茂斎院(選子内親王)の禊。

⑥ 『日本紀略』寛弘五年四月十七日条

十七日、丁未。

警固。

⑦『小記目録』（第一五・摂政関白物語事）

同（＝寛弘）五年四月十八日、左府（＝藤原道長）の賀茂詣の事。

⑧『御堂関白記』寛弘五年四月十八日条

▲A「賀茂詣」

十八日、戊申。

▲A「小南」より賀茂に詣づ。舞人は、頼宗（＝藤原）・教通（＝藤原）

藤原（已上、四位）・兼綱（＝藤原）・兼貞（＝藤原）・顕信・忠経（＝藤原）

藤原・能信・資平（＝藤原）（已上、五位）・惟任（＝藤原）・成順（＝高階）

高階（六位）。陪従は、忠道（＝紀）・長能（＝藤原）・公忠（＝藤原）・行義（＝平）

・孝義（＝平）・保命（保名）（＝藤原）・忠隆（＝源）・頼信（＝藤原）

・興光（＝三善）・有光（＝直）・遠理（＝藤原）・惟忠（＝平）等也。

上達部十三人來らる。右大将（＝藤原実資）・左衛門督（＝藤原公任）留

まる。権中納言（＝藤原隆家）・勘解由長官（＝藤原有国）・大藏卿（＝藤原正光）

・三位中将（＝源経房）・三位中将（＝藤原兼隆）・権大夫（＝春宮権大夫藤原頼通カ）

・中宮権大夫（＝源俊賢）等、馬に乗る。殿上人の殊障、無きもの、両頭（＝藏人頭源道方・源頼定）、皆來たる。

⑨『権記』寛弘五年四月十八日条

△A「左大臣（＝道長）の賀茂詣」

十八日、戊申。

▲左大殿（＝道長）、賀茂に詣で給ふ。権中納言（隆（＝隆家））・勘解由長官（有（＝有国））

・右宰相中将（兼（＝兼隆））・大藏卿（正（＝正光））

・左宰相中将（経房）・春宮権大夫（頼（＝頼通））

・新宰相（実（＝藤原実成））等騎馬す。傳大納言（道（＝藤原道綱））

・尹中納言（時（＝藤原時光））

・治部卿（俊（＝俊賢））

・新中納言（忠（＝藤原忠（＝藤原時光））

輔）等乗車す。舞人（舞人）は、左四位少将（頼宗）・権中将（教通）

・左衛門佐（兼貞）・左近少将（兼綱）・少納言（資平）

・左兵衛佐（顕信）

・右兵衛佐（能信）

・藏人左兵衛尉（惟任）

・左衛門尉（成順）。陪従は、五位已下。

⑩『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同年（＝寛弘五年）四月十九日、賀茂祭の事。

⑪『御堂関白記』寛弘五年四月十九日条

▲A「祭使所に絹を送る事」

▲B「賀茂祭の馬寮使の事」

十九日、己酉。

▲A「祭使所の舞人に、下重・疋絹の料等送る。」

▲B「午時許（×件）、外記成親（＝惟宗）來たりて云はく「齋院に候ずる間、申して云はく『馬寮使（＝藤原相尹）、病の由を申す。』事由を奏聞す。爰に仰せて云はく『家（＝道長家）に付し、此の由を仰すべし。』者り。」

奏聞して云はく「只今、之（×云）を如何為む。猶、奉仕するは相尹の由を仰せらるべし。」即ち参入す。仰せて云はく「事關くべきに非ず。能かるべき様に行なへ。」者り。「前驅の諸大夫の中に侍る諸司の長官等の中、仰有る者を以て、代官を奉仕すべし。」仰せて云はく「図書頭（頭×）則孝（＝藤原）を以て奉仕すべし。」者り。此の由を外記に仰せて奉仕せしむ。

一宮（＝敦康親王）見物す。同じく東に度る事、戌時なり。

⑫『権記』寛弘五年四月十九日条

△A「賀茂祭」

十九日、己酉。

▲陸奥前守（＝橘道貞）の門に於いて見物す。一宮（＝敦康親王）見物

し給ふ。又、馬寮使左馬頭相尹、俄に故障を申す。仍りて図書頭則孝を以て、代官と為す。又、中宮（＝彰子）、御懷妊（×御□任）に依り、東宮（＝居貞親王）、御服（＝花山法皇）に依り、使を立てられず。

（注1）『御産部類記』所引『権記』には「賀茂祭、中宮依御妊不レ被レ立レ使、」とあり、首書を「賀茂祭中宮使、依御懷妊不レ被レ立事、」とする。『宮寺縁事抄』（第二八・賀茂・奉幣使用妊者夫例・承暦二年（一〇七八）三月十四日勘申）にも、懷妊により使を立てなかったことが見える。この年九月十一日に敦成親王（のちの後一条天皇）を出産。二月八日に崩御。居貞親王の兄。

（注2）花山天皇は冷泉天皇の第一皇子（母は藤原伊尹の女懷子）、居貞親王（のちの三条天皇）は冷泉天皇の第二皇子（母は藤原兼家の女超子）。

⑬『御産部類記』（四・後一条院）所引『外記日記』寛弘五年四月十九日条

「中宮（＝藤原彰子）、御懷孕に依り、賀茂祭使を立てられざる事」

十九日（＝寛弘五年四月）、己酉。

賀茂祭也。権大納言実資卿・参議実成・権左中弁藤原朝経已下行事す。中宮（＝藤原彰子）、御懷妊の事に依り、使を立てられず。

⑭『日本紀略』寛弘五年四月十九日条

十九日、己酉。

賀茂祭。中宮（＝藤原彰子）、御懷孕に依り、使を立てられず。東宮（＝居貞親王）、花山院の事に依り、使を立てられず。左馬寮使頭相尹朝臣（＝藤原、忽ちに本の病発る由を申して奏聞するの処、図書頭藤原則孝を以（×次）て、代官と為す。長官（＝齋院司長官。源為理、妻の喪に遭ふに依り、掃部頭藤原成親、代官と為す。此の如きの間、斎王（＝選子内親王）の出御。秉燭に及ぶ。希代の事也。

（注1）源為理の妻に大江雅致の女（中将の君）がおり、その女は選子内親王の女房（齋院中将）。

⑮『御堂関白記』寛弘五年四月廿日条

▲A「賀茂祭の馬寮使（＝藤原相尹）を召問ふ事」

廿日、庚戌。

▲A「物忌に依りて他行せず。晩景、人々、使の処（＝還立所）より来たりと云々。頭弁（＝源道方）来たりて云はく「左馬寮使を頭相尹朝臣に仰するに、昨日の当日当時、障の由を申し、祭事懈怠す。此の由を以て召問ふべし。」者り。

⑯『御堂関白記』寛弘五年四月廿一日条

▲A「馬寮使を召問ふ事」

▲B「三十講定」

廿一日、辛亥。

▲A「大外記善言（＝滋野）を召し、相尹を問ふべき由を仰す。三十講の事を定む。

⑰寛弘六年（一〇〇九）

⑱『日本紀略』寛弘六年四月六日条

六日、辛卯。

内裏（＝一条院、死穢有り。是、中宮（＝藤原彰子）の別納（＝一条院別納）の序の本守（×権守）の男、俄に以て死去するの故也。仰せて云はく「賀茂祭あり。左近衛、公卿以下、諸司・諸衛、参内すべからず。」

（注1）「左近衛」については、⑳（注1）参照。

⑳『御堂関白記』寛弘六年四月六日条

▲A「内裏触穢」

六日、辛卯。

▲A「一条院」(「内裏」の東町(「別納。左京北辺二坊四町」)の木守の男、午時許に死す。件の町、内膳所候ふ也。祭料の人々借(×假)る馬・雑物等、他処に出置く(他処出置)。

(注1)『権記』同目条に「今日別納有死穢、仍内裏同触穢云々」とある。

(注2)古記録本は「件の男(×町)、内膳所に候ずる也。」とし、全註釈本は「件の町の内膳所に候ずる也。」とし、学術文庫本は「この町には、内膳所があるのである。」としている。

③『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(「寛弘」六年四月七日、禁中の穢に依り、北祭(「賀茂祭」)停止す。又、猶行なはるる事。

④『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同年同月(「寛弘六年四月」)十三日、漏剋の具触穢し、御禊に候ぜしむべからざる事。

⑤『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(「寛弘六年四月」)十四日、漏剋を具すべきや否やの事。

⑥『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(「寛弘六年四月」)十五日、触穢の漏剋、斎王(「選子内親王」)に従ふべからざる事。

⑦『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同(「寛弘」六年四月十八日、御禊の点地の事。

⑧『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(「寛弘六年四月」)十八日、左兵衛佐孝明(「平」)を以て、近衛使代(「近衛府使は藤原定頼」と為す事。

⑨『小記目録』(第五・四月・御禊事)

同年月(「寛弘六年四月」)廿一日、斎王(「選子内親王」)の御禊の事。

⑩『御堂関白記』寛弘六年四月廿一日条

▲A「御禊」

廿一日、丙午。
雨下る。御禊、常の如し。渡る間、雨止む。見物す。

⑪『権記』寛弘六年四月廿一日条

△A「御禊」

廿一日、丙午。
御禊。出車、之を奉る。

⑫『日本紀略』寛弘六年四月廿一日条

廿一日、丙午。

賀茂斎院(「選子内親王」)の禊。

⑬『日本紀略』寛弘六年四月廿二日条

廿二日、丁未。

警固。

⑭『御堂関白記』寛弘六年四月廿三日条

▲A「賀茂詣に参らざる事」

廿三日、戊申(×戊申)。
雨下る。穢に依り、賀茂に参らず。

(注1)十二月十六日に、左大臣藤原道長が賀茂社に参詣している(『御堂関白記』「権記」『小記目録』第一五・摂政関白物語事)。

⑮『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同(「寛弘六年四月」)廿四日、賀茂祭の事。

⑯『小記目録』(第五・四月・賀茂祭事)

同日(「寛弘六年四月廿四日」)、穢に依り、中宮使(「中宮は藤原彰子」)無き事。

⑰『御堂関白記』寛弘六年四月廿四日条

▲A「賀茂祭」

廿四日、己酉。

▲A 天晴。祭事、常の如し。見物す。大裏（＝内裏）の穢に依り、中宮使を立てず。近衛府使（＝藤原定頼）の代官は左兵衛佐（×右兵衛佐）孝明（＝平）。他の男女の使等、常の如し。

⑱『権記』寛弘六年四月廿四日条

△A「賀茂祭見物」

△B「賀茂祭使」

廿四日、己酉。

▲A 右相公垂将（＝藤原兼隆）と同車し、左府（＝道長）に詣づ。途中、棚（＝棧敷）に出で給ふの由を聞く。件の棚に尋参る。一条路（＝一条大路）の北の好明寺の南に在り。東宮傳（＝藤原道綱）・中宮大夫（＝藤原齊信）・藤中納言（＝藤原隆家）・左金吾（＝藤原頼通）・大藏卿（＝藤原正光）・左宰相中将（＝源経房、先に候ぜらる。余（＝藤原行成）・右相公（＝藤原顕光）詣づるの後、源納言（＝源俊賢）参らる。

▲B 藏寮使（＝内藏寮使）は助師言朝臣（＝藤原）、東宮は少進道成朝臣（＝源）、近衛府は代官左兵衛佐孝明（＝平）、（右（＝右近衛府）の定頼少将（＝藤原）、故障を申す也。馬寮使は右助頼職（＝源）。内侍は清子（＝橘）。中宮使、穢に依りて立てず。内侍、御前（＝前驅）無し。

（注1）藤原定頼について、『公卿補任』（寛仁四年条）は寛弘六年正月廿八日に右少将に任じられたとし、『権記』本日条、『御堂関白記』寛弘七年七月廿七日条は右少将とする。一方、『日本紀略』寛弘六年四月廿四日条（3820）、『権記』寛弘八年十二月廿五日条は左少将とし、『日本紀略』寛弘六年四月六日条（3821）には「左近衛」とある。

⑲『御産部類記』（四・後一条院）所引『外記日記』寛弘六年四月廿四日条

「中宮（＝藤原彰子）、御懷孕に依り、賀茂祭使を立てられざる事」
寛弘六年四月廿四日、己酉。

賀茂祭也。中宮職、使を立てられず。「今案するに、御懷妊に依る歟。」

（注1）『宮寺縁事抄』（第二八・賀茂・奉幣使用妊者夫例・承暦二年三月十四日勅申）にも、懷妊により使を立てなかつたことが見える。

⑳『日本紀略』寛弘六年四月廿四日条

廿四日、己酉。

賀茂祭。内裏の穢に依り、使参内せず。但し、中宮「彰子」使を立てられず。又、近衛使左近少将定頼（＝藤原）、俄に障を申し、左兵衛佐平孝明を以て、代官と為す。

（注1）「近衛使左近少将定頼」については、3818（注1）参照。

㉑『御堂関白記』寛弘六年四月廿五日条

▲A「還立」

廿五日、庚戌。

▲A 見物の為に、内府（＝藤原公季）同車す。近衛府の代官（＝孝明）、病と称して渡らず。

㉒『権記』寛弘六年四月廿五日条

△A「還立」

△B「解陣」

廿五日、庚戌。

▲A 右宰相中将（＝兼隆）と同車し、左府（＝道長）に詣づ。出で給ふ。仍りて亦、知足院（智足院）の許に詣づ。

▲B 参内す。右宰相中将、又、参会はらる。解陣の事を行なふ。外記文義（＝小野）を召し、上臈の上卿（＝公卿）参らるるや否やの由を問

ふ。申して云はく「参らざるるに依り、事由を奏せしむ。」頭弁（＝源道方）に仰す（頭弁仰）。上卿を召さむと欲する間、予（＝行成）参入す。仍りて更に遣召さず。即ち諸衛の具否を問ふ。左近・左兵衛の佐・政人（＝判官、三等官）、障を申して参らざるを申す。即ち頭中将（＝藤原公信）をして解陣すべき事並びに具せざる府の事を奏せしむ。仰せて云はく「近衛府候ぜざるも行なふべき歟。先例を尋ねて行なふべし。」左右を奏せしむるの間、各、一府の先例有り。又、三府已上候する時は行（＝）なはる。今日、四府候する所也。仰せらるるに於いては、何事か有らむ哉。仰す。「請に依るべし。」者り。即ち南座に着す。外記を召し、内豎を召さしむ。内豎（々々）参来たる。仍りて諸衛召すべきの由を仰す。参入す。即ち解陣を仰す。諸衛称唯して退出す。右近中将公信・左衛門佐広業（＝藤原）・右衛門佐知光（＝藤原）・右兵衛佐通範（＝藤原）。
②『日本紀略』寛弘六年四月廿五日条
廿五日、庚戌。
解陣。

③9 寛弘七年（一〇一〇）

①『御堂関白記』寛弘七年三月十九日条

▲A「昨の仏経供養の事」

▲B「賀茂祭使・賀茂詣の雑事定」

十九日、戊戌。

▲内（＝内裏。批把殿より公信朝臣（＝藤原）仰せて云はく「昨の仏経（＝釈迦三尊像・七仏薬師像・千部法華経供養）、意の如く、不日に奉仕す。悦思ひ御すこと、極無し。」是、承はるに依りて行なふ也と云ふ。

▲B 又、教通（＝藤原）の賀茂祭使（＝近衛府使）の雑事並びに自ら詣づべき雑事（＝賀茂詣）等を定む。

②『御堂関白記』寛弘七年三月廿一日条

▲A「最勝講初」

▲B「皮聖人（＝行円）、千部経・千体仏を供養する事」

▲C「祭使（＝教通）の雑具を調ふる事」

廿一日、庚子。

▲A「物忌に依り、最勝講初に参らず。雑事等、昨日以前に仰置く。」

▲B「此の日、皮聖人（＝行円）、千部経・千体仏を供養すと云々。僧前・布施の料（卅石）を送る。」

▲C「祭使（＝教通）の雑具、初めて調ふ。」

（注1）『権記』同日条に「千部経」、「日本紀略」同日条に「法華經一千部・図繪三千余体仏像」とある。

③『御堂関白記』寛弘七年四月五日条

▲A「御禊の前駆定、不堪佃田定」

▲B「一条院の造作初」

五日、甲寅。

▲A「大内（＝批把殿）に参る。左仗（×丈）に着す。御禊の前駆、又、去

る年の不堪佃田文（×不堪田文）を定む。

▲B「早旦、一条院に到る。造作の事を初む（＝寛弘六年十月五日に焼亡）。

源中納言（＝源俊賢）・右大弁（＝源道方）、行事すべき由を仰せられて定む。後院の別当に依る也。

（注1）本年九月四日に去年の不堪田荒奏が、九月十六・十七日に去年の不堪佃田奏・不堪佃田定が行なわれている（『御堂関白記』）。ここの「去る年」は寛弘五年の分とも考えられるか。

④『小記目録』（第一五・摂政関白物詣事）

同（＝寛弘）七年四月廿三日、殿下（＝藤原道長）の賀茂詣の事。

⑤『日本紀略』寛弘七年四月廿三日条

廿三日、壬申。

左大臣（＝道長）、賀茂社に参詣す。

⑥『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝寛弘）七年四月廿四日、賀茂祭の事。〈見物の雑人の鬨乱の事〉。

⑦『御堂関白記』寛弘七年四月廿四日条

▲A「賀茂祭使出立」

▲B「物具」（裏書）

廿四日、癸酉。

教通、近衛府使を奉仕す。西対（＝土御門第）より立つ。所々の袴、例に似ず。使等に、装束を賜ふ。着座の後、中宮（＝藤原彰子）より袴、左馬頭（×右馬頭）相尹朝臣（×相伊朝臣）（＝藤原）を以て賜ふ。一座の時国（＝ウジ名不詳）に、着せしむるに借る（＝着用させるために借りたの意）。我（＝道長、舞の間に）出づ。上達部、盃を進む。時兼（＝尾張）に、衣を賜ふ。年老い、気色、本の如くに非ず（年老非気色如本）。事了りて、大内に参る。御覧（＝飾馬・引馬、常の如し。御前に召すと云々（＝近衛府使教通を召した。童を覧すること、是、希有の事也。廿四日。物具、頗る宜しく調ふ。古物無し。殊に馬副の装束は、青き白橡の衣、袴は紅の衣。沓（×躰）・襪等を着す。童の装束は、二藍の薄物の重、袋を結び、狩衣と為し、蘇芳の織物の袖・青色の織物の袴・紅の打褂・合袴。半靴（×伴化）等を着す。雑色は六十人。長四人は白の装束。六人は赤色の狩衣・袴・薄色の袖。六人は青色

の狩衣・袴（青色、々々）・山吹の袖（々々）。六人は紅梅の狩衣・袴（紅梅々々）・青色の袖（々々）。六人は若葉色の狩衣・袴（若葉色々々）・茜染の袖（々々）。六人は山吹の狩衣・袴（山吹々々）・蘇芳の袖（々々）。六人は二藍の狩衣・袴（二藍々々）・紅染の袖。自余は細記さず。頗る過差なり。而るに神事に依る也。

（注1）具注曆の上部欄外に「賀茂祭事、（癸務、当日使立、）覧男女被馬、（可倍從内覧、）」とある。廿一日条には「齋内親王禊事、」とあり、廿二日条には「警固事、」とある。

⑧『権記』寛弘七年四月廿四日条

△A「賀茂祭」

廿四日、癸酉。

賀茂祭。行事は右大将（＝藤原実資）也。而るに、日来、触穢。仍りて中宮大夫（＝藤原齊信、之を代行す。朝経（＝藤原）の弁も亦、煩有り。右中弁重尹（＝藤原、之を代行す。行事宰相は右中將（＝藤原兼隆）と云々。中宮大夫の家の棚（＝棧敷）と仁和寺の僧都（＝齊信）の棚と、各、瓦礫を投じ、鬨乱有り。中宮大夫の家の仕丁、疵を被ると云々（□）。

⑨『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同年月（＝寛弘七年四月）廿五日、紫野の還の事。〈若宮（＝敦成親王）の御見物の事〉。

⑩『御堂関白記』寛弘七年四月廿五日条

▲A「還立」

▲B「装束の事」（裏書）

▲C「若宮（＝敦成親王）、小南（＝小南第）に渡り給ふ事」

廿五日、甲戌。

▲A 祭の還を見る。若宮（＝敦成親王）出で給ふ。傳大納言（＝藤原道綱）・中宮大夫（＝齊信）、御車後に候ず。殿上人廿余人許、御前に候ず。見物所より神館（神立）に、左衛門督（＝藤原頼通）・左右宰相中将（＝源経房・兼隆）・大藏卿（＝藤原正光・源宰相（＝源頼定）等、殿上人を率ゐて到る。返来たる人々、直衣（衣×）許を着す。御前の人々、身を露にす。

▲B（兼喜）還の日の童の装束、済政（＝源）調へて奉る。自余の装束は、皆借用す。近衛使、頗る人々に勝ると云々と云々（云々々々）。

▲C 若宮、左衛門督の在所（所×）の小南（＝小南第）に渡り給ふ（若宮左衛門督在渡小南給）。御小車（々々小車）に御す。然るべき上達部（部×）・殿上人等候ず。御本を奉る。

（注1）『栄花物語』などの史料については、40②（注2）参照。

40寛弘八年（一〇一一）

①『小右記』寛弘八年三月廿二日条

▼a「勘宣旨並びに斎院の奏状」

▼b「備中守（＝橘儀懷）の罷申」

▼c「夢想の事」（目一六・夢想事）

廿二日、乙未。

▲a 左中弁（＝藤原朝経）、先日（かんせんじ）の勘宣旨並びに斎院申請する雑物の奏状を持来たる。勘宣旨は、便に蔵人惟任（＝藤原）に付すべきの由を示す。院（＝斎院）の奏は、奏聞（×問）せしむる也。

▲b 備中守儀懷（＝橘）来たる。廿九日赴任（×赴任）の由を触る。良久しく雑談する後、女装束（×如装束）を被く。此の朝臣（＝儀懷、緑衫（＝六位の官人が着用する緑色の袍）の日（×由）、□□家人と為り、芳心

変はらず。仍りて微志を致す而已。

▲A 大炊頭光榮朝臣（＝賀茂）語（×諸）る次に云はく「或る女、右相府（×苜）（＝藤原顕光）の今年十一月七日に必ず死する由を夢みる。」者り。実々に談ずる所なり。彼の期に臨み、虚実を知るべき歟。

②『御堂関白記』寛弘八年四月二日条

▲A「賀茂詣定」

二日、乙巳。

▲A 雨降る。慎むべきに依りて外行せず。賀茂に参る雑事を定む。

③『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝寛弘）八年四月七日、御禊の前駆並びに公卿分配を定めらるる事。

④『御堂関白記』寛弘八年四月七日条

▲A「御禊の前駆並びに公卿分配」

▲B「維摩会の講師の宣旨」

七日、庚戌。

▲A 大内（＝一条院）に参る。右仗座（×右丈座）（＝寢殿の東北廊）に着す。

▲B 御禊の前駆並びに公卿分配を定む。

▲A 維摩（＝興福寺維摩会）の講師の宣旨を下す。東大寺の観真。候宿す。小雨並びに雷鳴あり。

⑤『御堂関白記』寛弘八年四月九日条

▲A「物忌」

▲B「馬寮使（＝源頼重）・次第使（＝紀□□、障を申す事」

九日、壬子。

▲A 物忌に依りて籠居す。

▲B 外記為親来申して云はく「馬寮使頼重（＝源）、子死する由にして、

障を申す。」者^{てへ}り。即ち奏せしむ。仰せて云はく「又々、尋問^{じんもん}し、案内を申すべし。」者^{てへ}り。又、次第使紀□□、同じく子死する由を申す。「他人^{ほかひと}（＝高階資平）を以て奉仕せしめよ。」者^{てへ}り（＝藤原道長の命）。

（注1）外記為親について、古記録本索引・全註釈・『平安人名辞典―長保二年―』（槇野廣造）は惟宗成親かとし、『外記補任』（井上幸治）は大江為清かとする。

（注2）「即令奏仰云」について、全註釈は「即ち奏せしむるに、仰せて云はく」と訓読し、道長が一条天皇に奏上するために、為親に再び頼重を尋問するよう命令したと解釈している。学術文庫は「すぐに天皇に奏上させたと、おっしゃって云われたことには」と現代語訳している。

⑥『御堂関白記』寛弘八年四月十日条

▲A「物忌」

▲B「齋院長官（＝源為理）の代官」

▲C「東宮（＝居貞親王）の主馬（＝主馬署）の舍人と殿の雑色との鬭乱」

（裏書）

▲A 十日、癸丑。物忌也。

▲B 左中弁（＝朝経）、門外（＝小野宮第）に來たりて云はく「齋院長官為理（＝源、日來、所勞有り、院（＝齋院）に參らず。申さしめて云はく『悩む所、猶重し。祭に供奉すべきに非ず。』者^{てへ}り。事由を奏せしむ。然るべき者を以て（可然以者、代官^{だいがん}と為すべきを仰す。物忌重きに依り、明日定むと申す。

▲C（裏書） 十日。入夜、為義朝臣（＝橘）來申して云はく「一条殿（＝道長所有の一条第、左京北辺四坊四町）の前の泥途、今作る間、当家（＝一条第）の者を召出だす処（当業者召出処、東宮（＝居貞親王。御所は一条院別納）の主馬（＝主馬署）の舍人と云ふ者、殿（＝道長。あるいは一条第か）の雑色

の男を打臥す（殿雑色男打臥）。後に又、主馬に持入ると云々。」者^{てへ}り。隨身利正（＝ウジ名不詳）を指して見せしむ。反來たりて申して云はく「雑色の男、主馬に、縛置く。」者^{てへ}り。奇しみ、大夫（＝春宮大夫藤原懷平）の許に、消息を送り、上件の事を云ふ。即ち大夫の返事に云はく「只今、宮（＝居貞親王）の許より、男（＝雑色の男）を給はり（男給、獄（＝獄舎）に付すべし。是、主馬の舍人打害する者也。」輒（×）ち件の男（男×）（＝雑色の男）を尋ねしむるに、件の害する由を申す者（＝主馬の舍人）、主馬に候ずと云々。大夫の許より、件の雑色の男を返送る（従大夫許件雑色男返送）。然るに示して云はく「宮より獄に給ふべき由の仰有れば、受取るに、便無し。案内を啓する後、左右すべし。」返送り了りぬ。

⑦『御堂関白記』寛弘八年四月十三日条

▲A「馬寮使（＝源頼重）を替ふる事」

▲B「公成（＝藤原）、禁色を免さるる事」

▲C「所（＝藏人所）の陪從（＝高橋成通）の除籍」

▲D「維衡（＝平）、馬を献ずる事」

▲A 十三日、丙辰。

大内（＝一条院）に參る。馬寮使の助頼重、障を申す所、分明ならず。仍りて越後權守に遷任し、高階資平を以て任ぜらる。

▲B 公成（＝藤原）に禁色を免さる。即ち退出す。

▲C（裏書） 入夜、藏人惟任（＝藤原）來仰せて云はく「所（＝藏人所）の陪從高橋成通の申す所、故無し。之を如何為む。」者^{てへ}り。申さしめて云はく「右近將監親業（親成（＝藤原）に奉仕せしめ（右近將監親成令奉仕）、件の成通は除籍せらるべし。」者^{てへ}り。除籍せられ了りぬ。

▲D 維衡（惟平（＝平）、馬十疋二疋を献ず（惟平馬十疋一疋獻）。皆、鞍

を具す（皆鞍具）。

⑧『権記』寛弘八年四月十四日条

△A「左兵衛督（＝藤原実成）の訪」

△B「馬寮使（＝源頼重）の改任」

十四日（×十五日）、丁巳。

左兵衛督（＝藤原実成）過らる。明日の実経（＝藤原、行成の男）の御禊の前驅の事を訪はる。

此の日、左馬助源頼重を以て、越後権守に任ず。高階資平を以て、左馬助に任ず。頼重、祭使、巡に当たる。而るに故障を申すこと無し。而るに今、期に望み、子死するの由を申す。期に望み、此の由を申すは当たらず。仍りて改任せらる。而るに内々に悦氣有りと云々。

⑨『小記目録』（第五・四月・御禊事）

同（＝寛弘）八年四月十五日、斎王（＝選子内親王）の御禊の事。（祭に供奉する人、一条院の北に於いて、下馬すべからざる事。）

⑩『御堂関白記』寛弘八年四月十五日条

▲A「御禊」

▲B「馬を申す人」（裏書）

十五日、戊午。

終日、雨降る。内（＝一条院）より罷出づ。侍從中納言（＝行成）の兵衛佐（＝実経）の許に、随身の装束・馬を送る。

見物す。此の間、雨降る。甚雨也。

十五日。馬を申す人々、中尹朝臣（＝藤原）・実経朝臣（々々）・頼国（＝源）・頼範（＝源）・義通（＝橘）・敦親（＝藤原）。已上、兵府（＝諸衛府）。所（＝藏人所）の者は、頼成（頼重）（＝藤原）。

（注1）具注曆の上部欄外に「斎王御禊」とある。

⑪『権記』寛弘八年四月十五日条

△A「御禊」

十五日、戊午。

御禊也。実経、前驅に供奉す。右宰相中将（＝藤原兼隆）過らる。亦、左京大夫（長経（＝源））・後侍從（資平（＝藤原））来臨す。諸大夫は数輩。

申刈、見物す。相公（＝兼隆）・京兆（＝長経）と同車す。斎王（＝選子内親王）の前驅は、左衛門佐平孝明・右権佐藤原中尹・左兵衛佐実経・右佐藤原通範・左衛門少尉源頼国・右同頼範・左兵衛少尉橘義通・右藤原敦親。次第使は、右馬助源頼職・左允菅野数遠。斎院長官代は清原為成（雅楽頭）。実経、左府（＝道長）の御馬（平緒と号す。）に騎す。隨身は四人。（二人の物節は、褐衣を着す。二人は、蜜絵並びに下襲等を着す。其の装、左府より給はる。使の実国（＝菅野）に、褂一重を被く。）童は六人。（二人は二藍の狩衣・指貫（指貫は、単に作るべし。而るに合（＝袷）に作る。後日、左相府（＝道長）命せて云はく「単に作るは、是、例也。」）雑色廿四人の中、長四人・舎人四人は、帰來たるの時、禄を給ふ。其人の馬の轡右近府生秦正延は絹三疋、別に二藍の下襲・半臂を給ふ。（即ち今日、着する所なり。））番長多為重は二疋、別に柏一を給ふ。（又、今日、

着する所也。」副童の者、左府生秦延命・物部武士、並びに絹二疋。馬舎人は二疋。居飼は手作布二端。借隨身二人は各疋絹。

- ⑫『日本紀略』寛弘八年四月十五日条
十五日、戊午。

賀茂斎王（選子内親王）の禊。外記に仰せて云はく「一条院の北、堀川に至り、例年、禊祭の供奉の人、皆以て下馬す。但し、今年は然るべからず。皆、騎馬すべし。」者り。

（注1）『賀茂斎院記』にも見える。

- ⑬『御堂関白記』寛弘八年四月十六日条

▲A「侍従中納言（＝行成）、帶・劍・鞍具等を持来たる事」

十六日、己未。

▲A 雨、時々降る。晴氣無し。侍従中納言（＝行成）借（×僦）す所の帶・劍・鞍具等持来たる。

- ⑭『権記』寛弘八年四月十六日条

△A「隨身の装束並びに雑具等の悚を申す事」

十六日、己未（×乙未）。

▲A 左府（＝道長）に参る。昨の隨身に給はるる装束並びに雑具等の悚を申す。

- ⑮『日本紀略』寛弘八年四月十六日条

十六日、己未。

警固。

- ⑯『小記目録』（第一五・摂政関白物語事）

同（＝寛弘）八年四月十七日、左府（＝道長）の賀茂詣の事。

- ⑰『御堂関白記』寛弘八年四月十七日条

▲A「賀茂詣」

十七日、庚申。

▲A 天晴。午時、賀茂に詣づ。舞人・陪従等、近衛府の者、常の如し。同道する上達部は、傳（＝道綱）・中宮大夫（＝齊信）・権大夫（＝源俊賢）・藤中納言（＝藤原隆家）・侍従中納言（＝行成）・左衛門督（＝頼通）・尹中納言（＝藤原時光）・右衛門督（＝懷平）・右宰相中将（＝兼隆）・大藏卿（＝正光）・左宰相中将（＝経房）・左兵衛督（＝左兵衛門督）（＝実成）・三位中将（＝藤原教通）等。社頭、常の如し。二社（＝上社・下社）に、永に神馬を献ず。上御社にて、上官・舞人・陪従・隨身等に、禄を給ふ。

還る後、即ち大内に参る。女（＝源倫子）と同じ。

- ⑱『権記』寛弘八年四月十七日条

△A「賀茂詣」

十七日、庚申。

▲A 左府（＝道長）に参る。左府（々々）、賀茂に参らる。東宮傳（＝道綱）・中宮大夫（＝齊信）・権大夫（＝俊賢）・藤中納言（＝隆家）・左衛門督（＝頼通）・彈正尹（＝時光）・右衛門督（＝懷平）・右宰相中将（＝兼隆）・大藏卿（＝正光）・左兵衛督（＝実成）・三位中将（＝教通）、御共に候ず。金銀の幣帛・神宝・東遊・十列等を奉らる。

- ⑲『日本紀略』寛弘八年四月十七日条

十七日、庚申。

左大臣（＝道長）、賀茂社に参詣す。

- ⑳『小記目録』（第五・四月・賀茂祭事）

同（＝寛弘）八年四月十八日、賀茂祭の事。

- ㉑『御堂関白記』寛弘八年四月十八日条

▲A「賀茂祭見物」

▲B「馬を申す人」(裏書)

十八日、辛酉。

▲Aあかつき

暁、内(「一条院」より若宮(「敦成親王」・三宮(「敦良親王」・尚侍

(「藤原妍子」)同道し、一条家(「一条第」)の棧敷(散敷)の室に御す。已

午時許、上達部等参会ふ。右大臣(「藤原顕光」・内大臣(「藤原公

季)・傳大納言(「道綱」・中宮大夫(「齊信」・権大夫(「俊賢」・藤中納

言(「隆家」・侍從中納言(「行成」・左衛門督(「頼通」・尹中納言(「時

光」・右宰相中将(「兼隆」・左宰相中将(「将」×)(「経房」・大藏卿(「正

光」・左兵衛督(「左近衛督」(「実成」・三位中将(「教通」等なり。殿上

人、皆参る。

事了りて大内(「一条院」に参り給ふ。右府(「顕光」、早くに退出

す。内府(「公季」以下、御供に候ず。内府に、引出(「引出物」)の馬

一疋。彼(「公季」)の御前(「前駟」)の有光朝臣(「平」)に、衣を給ふ。

陣頭(「一条院の東面の南側の東門」)に着し、自ら若宮を懷き奉る。是、

入夜に依る。中宮大夫、三宮を懷き奉る。

尚侍・母々(「倫子」、同じく東宮(「居貞親王」)に参る。即ち母々と

与に退出す。

(注2) 敦成・敦良両親王の見物については、『栄花物語』(巻八・はつはな)は寛

弘七年のこととして、道長が一条の棧敷で敦成親王と見物したとする。『後拾

遺和歌集』(巻一九・雑五・一一〇七・一一〇八番歌)は年次の記述はなく、

道長が敦成親王と見物したとする。『大鏡』(中・右大臣師輔)と『古本説話

集』(上・大斎院事)は年次の記述はなく、道長が棧敷で敦成・敦良両親王と

見物したとする。

△A「賀茂祭使出立」

△B「使々を見物する事」

十八日、辛酉。

祭使所(「出立所」)に向かふ。〔藏人少将朝任(「源」)〕中宮権大夫

次いで左府(「道長」)の棧敷(狭敷)に参る。若宮(「敦成親王」・三

宮(「敦良親王」)御坐す也。右内府(「顕光」・公季)、共に参らる。見物

し了りて、右(「右府顕光」)退く。内(「内府公季」)候ぜらる。引出物有

り。内(「一条院」)に入る。御共に候ぜらる(御共被候)。

東宮使は権亮頼光朝臣、中宮使は亮清通朝臣、馬寮使は左馬助

(「助」)資平朝臣(「高階」、近衛府は左少将朝任朝臣、内蔵寮使は頭

公信朝臣、(二度、落馬すと云々)女使は中納言典侍。

の棧敷（狭敷）に於いて見物する事。

②6 『御堂関白記』寛弘八年四月十九日条

▲A 「賀茂祭使に還禄を送る事」

十九日、壬戌。

▲A 物忌に依りて籠居す。近衛府使（源朝任）の許（還立所）に、還禄の料の絹布等を送る（還禄料絹布等送）。加陪従（々陪従）の官人等の絹の料を加ふ。

②7 『権記』寛弘八年四月十九日条

△A 「還立」

△B 「解陣」

十九日、壬戌。

△A 知足院（智足院）の辺に向かひて見物す。

△B 参内す。解陣の事を行なふ。左近少将忠経（藤原）・右少将経親（源）・左兵衛佐実経（藤原）・右（右兵衛佐）能信（藤原）。二府（左右衛門府）、具せずと雖も、候ずるに随ひて召さしむる例也。

②8 『日本紀略』寛弘八年四月十九日条

十九日、壬戌。

解陣。

②9 『小記目錄』（第五・四月・賀茂祭事）

同年（寛弘八年）五月十日、祭に供奉せざる人々、過状を進らしむべき事。

